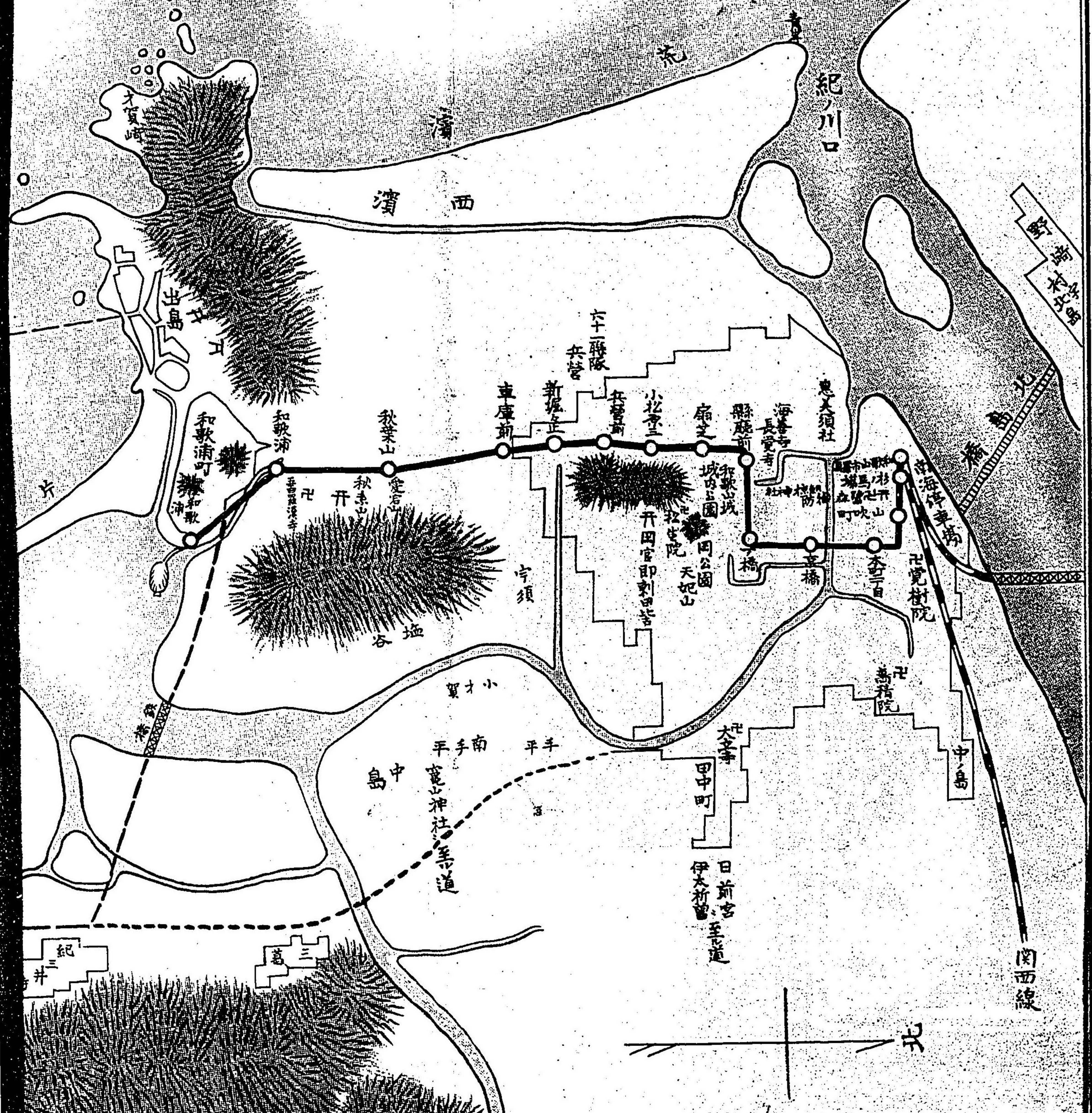


和歌山電力水車軌道

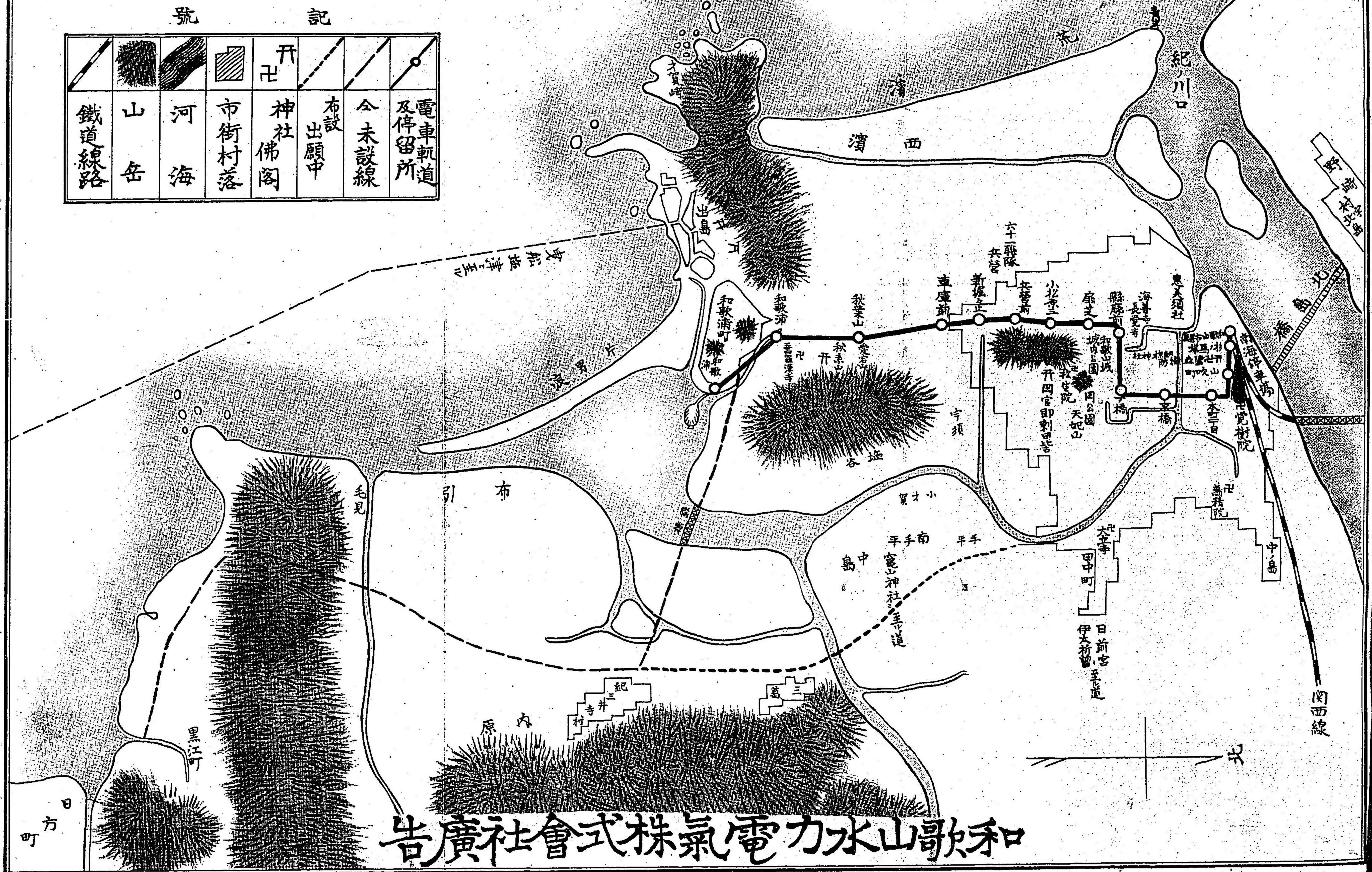


和歌山電力水車株式



和歌山電力氣車軌道案內圖

記		號	
	鐵道線路		電車軌道及停留所
	山岳		今未設線
	河海		布設出願中
	市街村落		神社佛閣

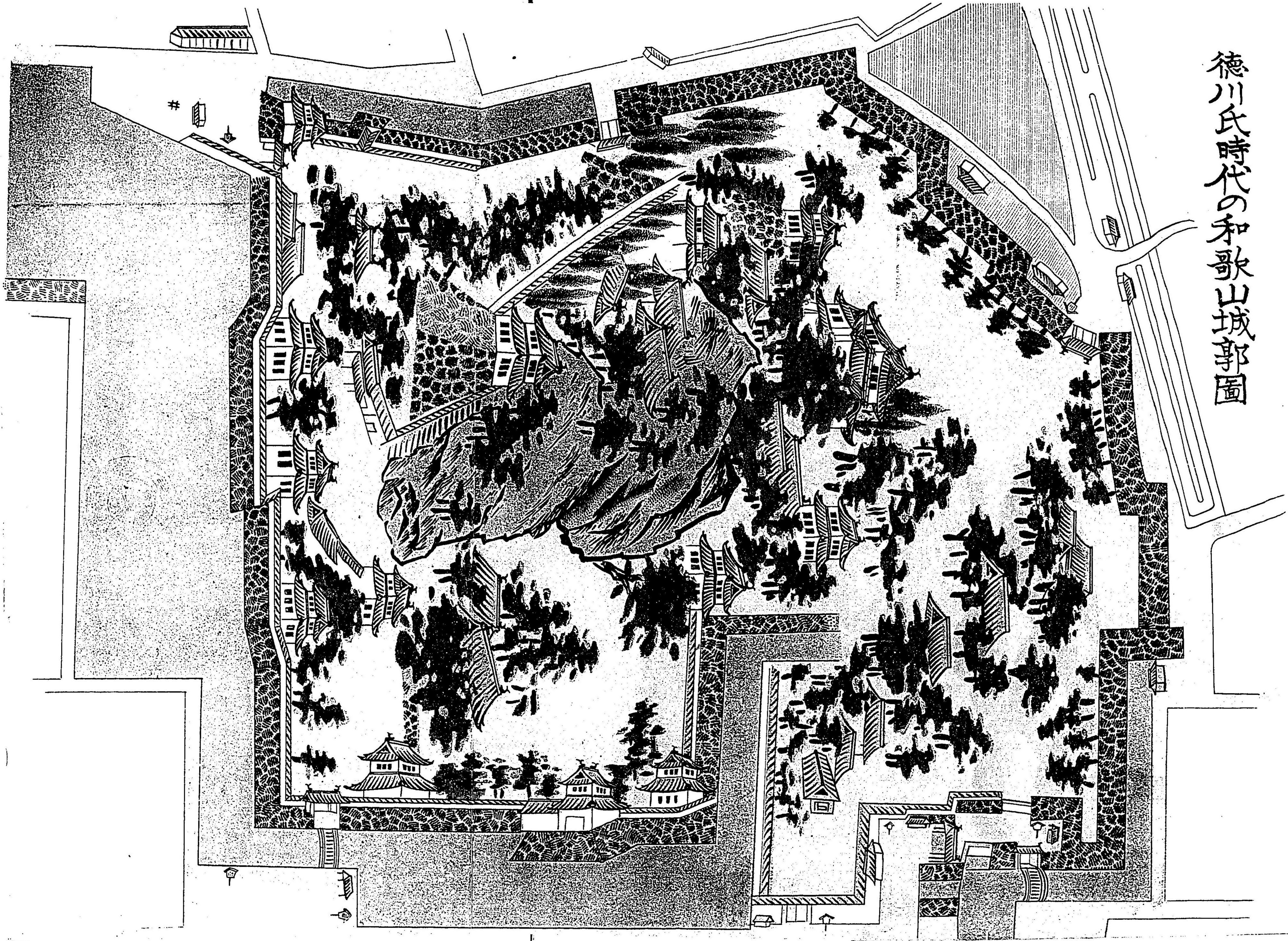


和歌山電力株式會社廣告

日方町

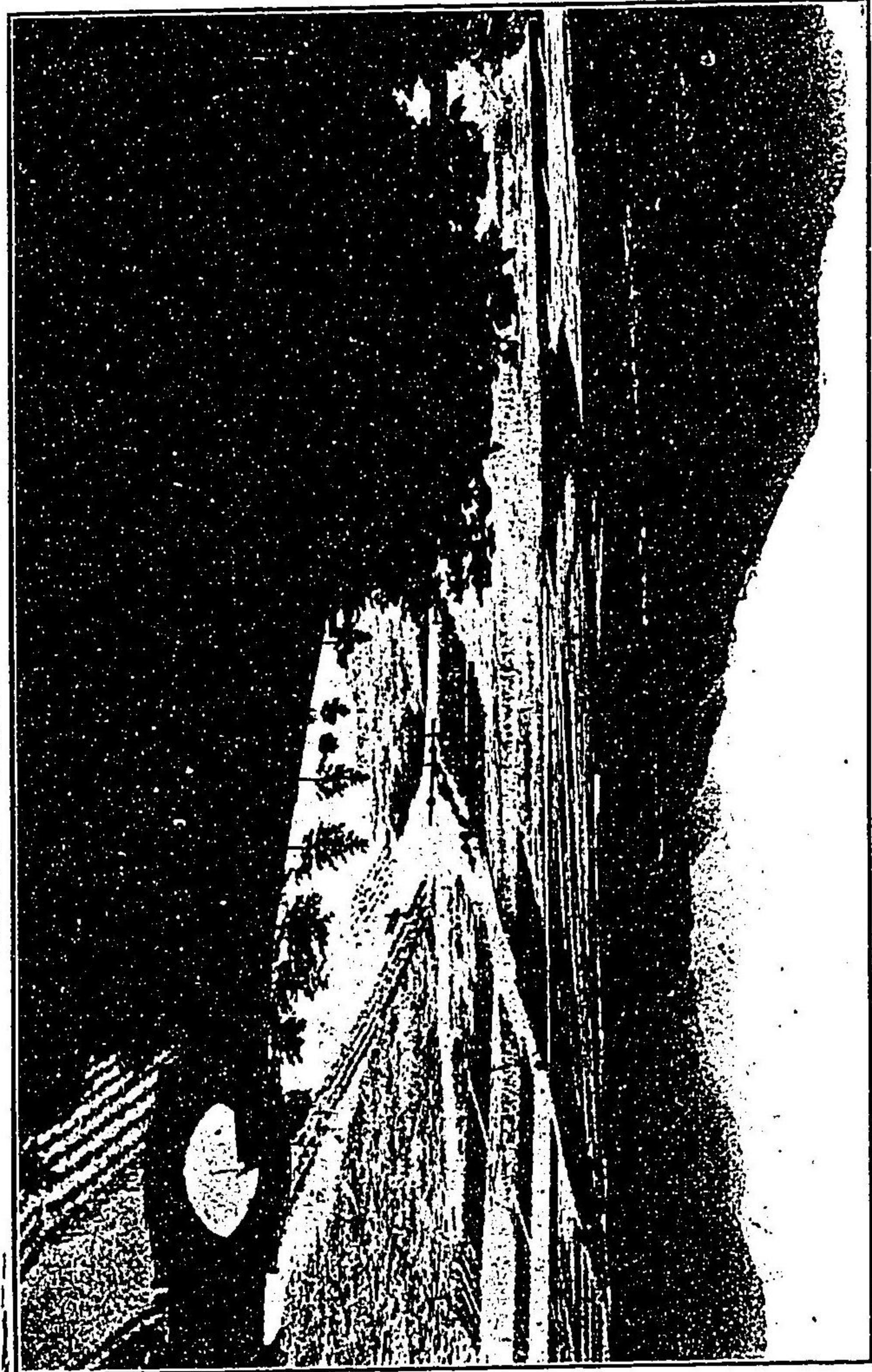
北

徳川氏時代の和歌山城郭図





徳川氏時代の和歌山城下繪圖



山崎津玉るたひ玉し障登の皇天武聖

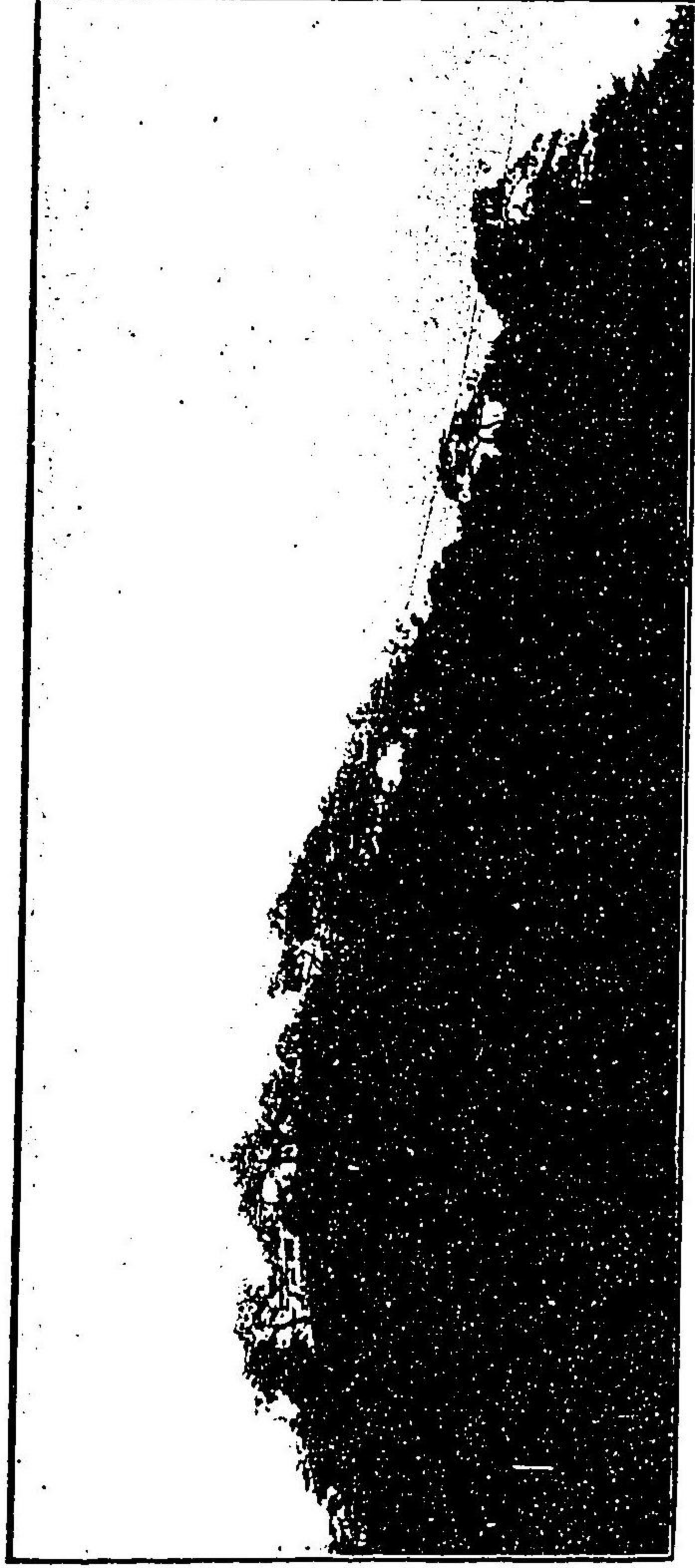


關守天城山歌和舊るせ存現

五津嶋神社址

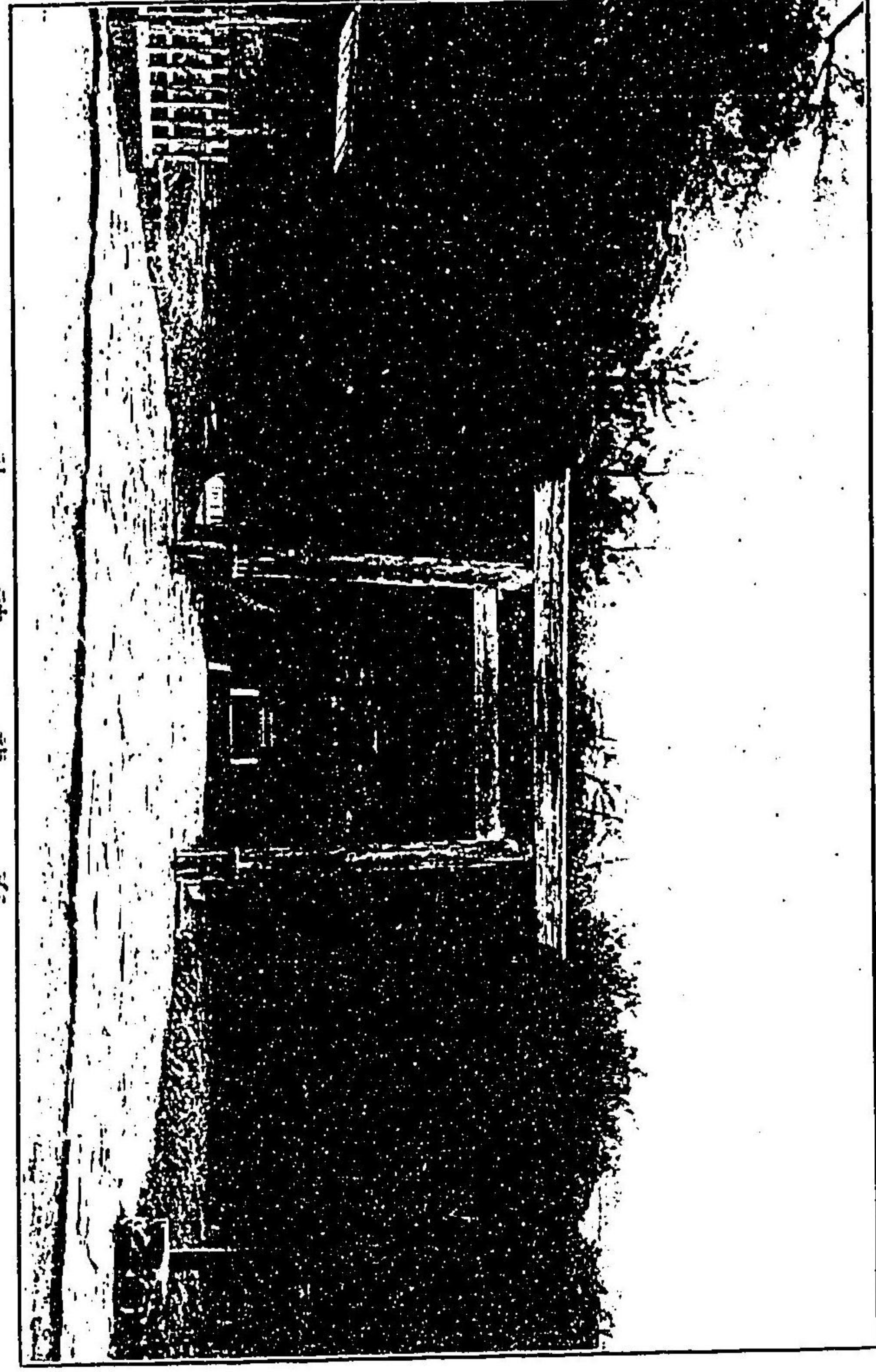


雜賀城址

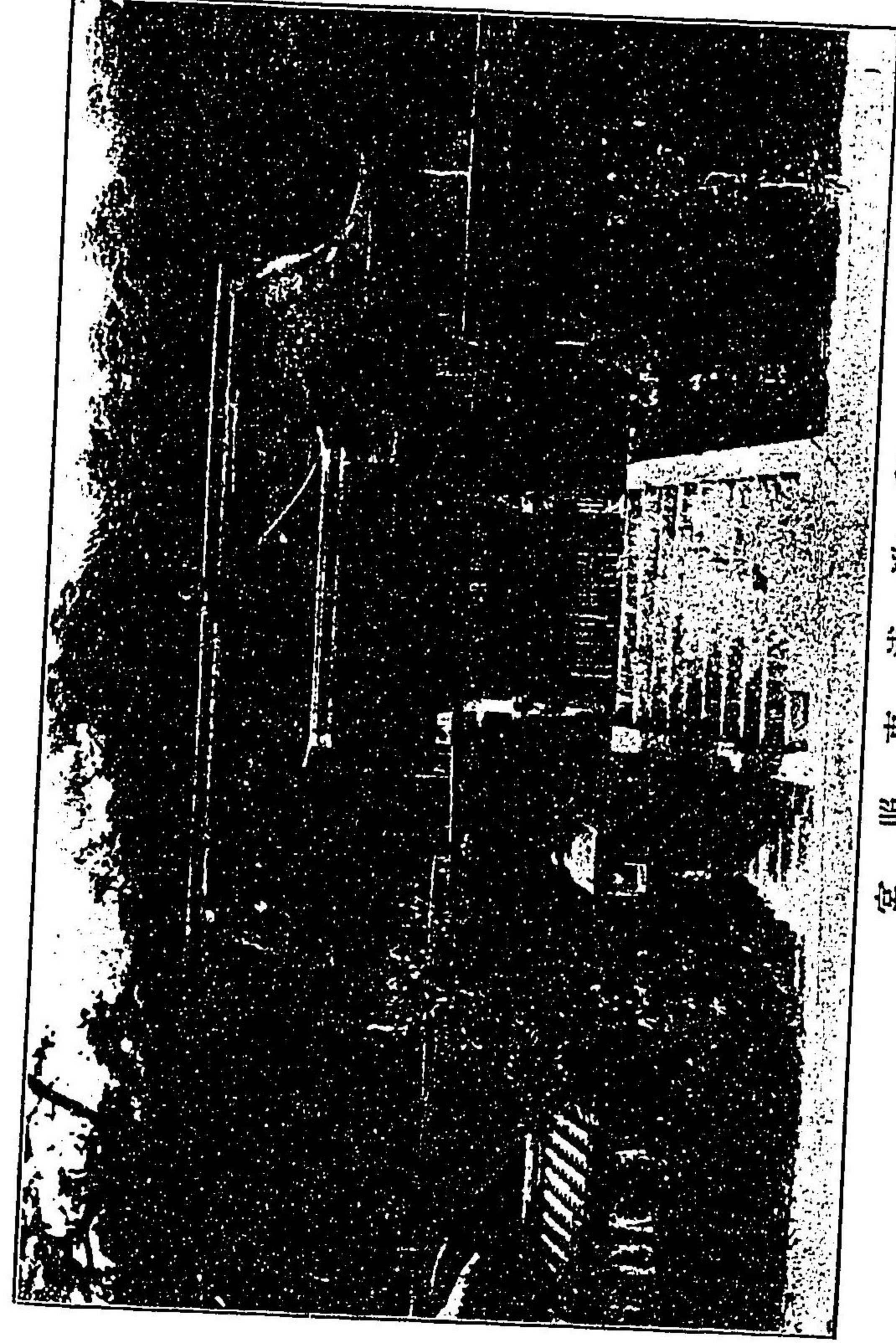


又山、見妙

山寺珠養



南 龍 神 社



和 歌 浦 東 照 宮



和歌浦天満宮

はしガキ

去る未の秋、僕が本國史談會を創設して、紀州の歴史を研究し、史蹟を探求しにかからうとした時、さし向き手近な所から始めようといふ思ひつきで先づ和歌山と和歌浦二乃至其の回隈の郡邑の有ゆる古今の事物を書き載せた記録、或は物語の書、又は古老聞書でも名けるやうな雑記の類、さては地圖繪圖などの物を編み出して、而して實地の踏査も、事實の考索も試みた結果聊か得る所があつたやうに獨自ら信じてゐた、けれど未だ其を以て十分安心するといふ段にまでは至らなないので、史談會の雜誌にも掲載するとはしなかつたのだ、然る處爰に平素能く僕の事を知てる或る好運な營業會社の棟梁株の人から、足下の片手間て和歌山と和歌浦邊の案内記を出版しては何如だ尤も普通のあり觸りのものでなく、歴史的趣味の添はつたものをだ、必定精確な材料も蒐集してあるのであらう、該案内記の出版は我が會社の營業上にも至極必要を覺ゆるのだから云云と、意味のある豫約條件までつけての懇意が

4. 6. 8
内容

あつたので、僕も頗る妙だと思つたまま、迂濶きやうくわに即坐すまに諾の一言を與へたのは大膽に失したと、後で悔んで見たが及ばなひ、そこで其の責任を盡す了簡りょうかんで、急に秃筆を呵喝かかくして原稿を綴り始め、漸く稿を脱して印刷に付したものが、今度出版の『和歌山と和歌浦』と題した、前後貳編兩卷合本の此の小冊子だ、が前にも一應述べた通り、根本の研究が既に不十分であつたのだから、全璧の書だとは勿論誇れはしなひ、ただ誤謬の點は多くなからうと信じるばかりだ、併し世の本書を購つて讀む人、倘し其の誤謬の點を發見されたならば指摘して叱つても呉れ玉へ、正しても呉れ玉へ、僕は其の叱られた事正された事が適當だと思つたならば、直ぐ本書に改訂を加ふることにする、發行に臨んで一言を卷首に辯じおく云爾

明治己酉五月

養浩居主人 内村義城識

和歌山と和歌浦前編 和歌山の卷目次

- 第一 和歌山の地名起因及び城郭築造……………一頁
- 第二 和歌山市街の開始及びその沿革……………一〇頁
- 第三 和歌山城下八區の地域……………一三頁
- 第四 和歌山の名所舊蹟……………一六頁
 - 聖武天皇離宮舊蹟○男之水門紀水門○吹上濱○岡○菟道○吹上社故址○辨財天山○奥山城址○城山
- 第五 和歌山の古神社……………二二頁
 - 岡宮と號する刺田比古神社○水門吹上神社○朝棕神社
- 第六 和歌山の佛刹寺院……………二四頁
 - 大智寺遺址○報恩寺瑠璃院夫人○護念寺○蓮心寺○密譽寺火車記○大恩寺○大泉寺渡野家○無量光寺念佛行者○長覺寺古名○西岸寺安藤彦四郎○海善寺正清院夫人墓○加納墓○吹上寺茶毘地跡○正住寺勝石塔○光明院菟裘地○覺樹院高野寺○弘法路平墓○松生院古名廣逸寺○寺寶佐藤公生母淨圓院巨勢氏墓碑○法道森御坊○松生院嗣信守本尊水月觀世音○感應寺○大立寺

寺 伊藤岡 豐臣秀頼公の那智山
嶋嶽寺 萬精院 本宮寺へ寄附の梵鐘

第七 和歌山附近の名所舊蹟……………三二頁

德勒津宮遺址○岸村行宮遺址○孝子越○形見浦○加太驛家址○他浦濱○太田
城址○武内宿禰誕生井

第八 和歌山附近の神社佛寺……………三八頁

日前國懸大神宮○菟山神社○須佐神社○伊太郎會神社○相坂八幡宮○栗林八幡宮○園部神社附り躰火神社○志摩神社○木本八幡宮○加太淡島神社○坂田了法寺○梶取總持寺

和歌山と和歌浦後編 和歌浦の卷目次

第一 和歌浦街道……………一頁

高松の根上り松○高松茶屋○成合の松原一に雜賀の松原○愛宕山○彌勒寺山
一に御坊山○矢の宮○秋葉山○五百羅漢寺○蘆邊寺舊蹟現口石○龜遊殿○鶴立崎○形崎○宗祇松

第二 和歌浦の位置と名稱の起因……………八頁

第三 古代の和歌浦……………一一頁

第四 近古時代の和歌浦……………一五頁

和歌浦の風雅大觀……………一八頁

古今の詩歌○紀行文及び物語文の類○和歌浦入景

第六 現今の和歌浦……………二四頁

玉津島及び玉津島之神……………二五頁

玉津島神社は祭神三座○玉津島の地名の稱○玉津島の神社の號○玉津島を題にしたる古今の歌詠○玉津島山と聖武天皇御登臨の遺蹟

第八 和歌浦の名所舊蹟……………三五頁

東照宮○南龍神社○菅公廟○妹脊山○養珠寺遺址○妙見山○望海樓遺址○權の市郷の舊蹟○漁乎無美の舊蹟

第九 和歌浦附近の名所舊蹟……………四四頁

雜賀崎浦○鷹巢○上人窟○紀三井寺○濱宮○翠浦○黒江○日方○名高○淨土寺鈴木三郎・龜井六郎兄弟の墓○山名修理大夫義理の墓○日切地蔵尊○藤白御坂

兩卷中挿繪目次

徳川氏時代の和歌山城郭圖……………同 拾

和歌浦古圖……………同

和歌浦近古圖……………同

四

徳川氏時代の和歌山城下全圖	同
現存する徳川氏時代の和歌山城天守閣	同
玉津嶋神社	同
鎌賀城址、妙見山又養珠寺山	同
聖武天皇の登臨し玉ひたる玉津嶋山	同
和歌浦東照宮	同
南龍神社	同
菅公廟	同
岡宮(刺田比古神社)	前編三二頁
水門吹上神社	同三三頁
朝棟神社	同三四頁
高野寺(覺樹院)	同三〇頁
松生院(古名廣遠寺)	同三一頁
總勸津宮遺址	同三三頁
日前宮及び國懸宮	同三九頁
檀山神社	同四〇頁
栗林八幡宮	同四一頁
高松の根上り松	後編二頁
和歌浦街道八町岐の取っ手	同四頁
愛宕山	同五頁

彌勒寺山一名御坊山	同七頁
矢の宮	同九頁
五百羅漢寺	同一一頁
香の輿の窟、今の地釜神祠	同三五頁
出崎浦及び其の魚市場	同三七頁
片男浜の東の道より玉津嶋へ江及び妹背山を望む	同三九頁
妹背山多賀塔及び其の拜殿	同四一頁
寺の浦	同四八頁

阿卷中略所に挿入する石版及び寫眞版挿入り廣告(目次)

和歌山水力電氣会社の電軌軌道案内圖	
嶋村榮油店前所作りの場	
嶋村銘酒天長藏前荷積みの場	
嶋村銘酒天長藏遺蔵内部	
吉田小間物商店の見つき	
和歌山織布会社本社の外観	
同 分工場の外観	
和歌山紡績会社の外観	
同 分工場の外観	
和歌山倶楽部	
三井銀行和歌山支店	

所を岡山と呼んでゐた、併し城山も亦一に岡山といふ呼名を持てゐた、その譯は彼の丘阜の北の首に突起した高嶺であるからだ。

右に説明した所で、近古以前和歌山といふ名の地の無つた事が會得されよう、然るに天正十三年にあつてから、始めてその地に城郭が築造された、其に就ては歴史がある、『武徳編年集成』に曰く、「天正十三年紀州の中央岡山に城を築き、秀長羽柴美濃守俊長に大和大納言の居地とす、後年和歌山城と稱す」とあつて、又『續風土記』には曰く、「天正十三年豊臣太閤根來寺を滅し、太田城を降し國中を一統して、羽柴美濃守秀長に賜ふ、此地の體勢城地に宜きを觀察して、親自ら繩張を命じ、三月二十一日鐵砲あり、藤堂和泉守、羽田長門守一庵法印を普請奉行として、本九二之九其年の内に土功竣れり、秀長大和國郡山に居城するにより、其臣桑山修理亮重晴尾州安知郡の地主三萬石を領すを以て本國の城代とし、同じ十四年より茲に在城し、若山の城と稱す」云云とあるから、是で以てその城郭が築造されてから、その地の全形を總る名の生れ出た事の會得がゆくであらう、但しその地名を文字に見はすのに、或は若山の字を書き、又は和歌山の字をあて嵌るのは、是から南方一里ばかりの海邊を弱濱聖武天皇御紀といひ、或は稚濱和歌浦といひ、或は又若浦高梁集の歌とも、和歌浦玉葉集といひ、字にも亦その通りに書て、區區一定しかつたのと同様の事だ、尤も元祿年中からは若山と書く事に紀州藩で一定して、その後約二百年、維新の最初の頃まで改める事は無つたのが、明治の時代にあつてから更に和歌山の字を用ふる事にあつて、以て今日に及

了んだのだ。

當時吹上峰即ち岡に築造された城郭に、最初若山の名を負はせ、又和歌山の名も負はせ、更に若山と一定し、遂に和歌山と改定したが、その徳川氏時代に何の頃からだか、山を虎伏と呼び、城を竹垣と名づけてゐた、譯を聞くと昔は城の不開門の邊が一帶に苦竹の繁茂した藪で、而して山が猛虎の蹲踞した形に似てゐるからだとの説明である、そこで當時の文人だか韻士だかが洒落て、虎伏の字を到散し且つ音讀して伏虎と呼び、之に對して夫の蒼龍の蜿蜒たる様の狀の岡山を臥龍と名づけ、今では縣廳所在地の中学校まで、伏虎の山が何うして、臥龍の岡が何うしてと、或は伏虎城頭云云、臥龍水畔云云あざといふ様な校歌を歌つてゐる、蓋し一個の記念を歌ふのあらん。

さて爰に又若山の城といふ事に就て『岡山記』に、「文正元年十月遊佐勘解由左衛門成加若山の城を堅む」といふ事、又「永祿元年九月岡山高政の下知として、和歌山の城には舍弟岡山秋高、家兄岡山河内守之を守る」といふ事が書てあるので、天正以前にも夫の吹上峰に城があつた様に見えて紛らはしひが、幸ひ『續風土記』に其事を辨明して、『岡山記』のいつてゐる若山の城とは、今の城地を南に三町ばかりも離れた岡山にあるただ、其所に石壘の崩れた跡のあつた事を證に引いて説てゐるから、疑は其で解けるといはねばからさひ、因に云ふ、『續風土記』の指して岡山といふ所は、前にいつてゐる通り城山の南の丘阜の高ひ所で、一に吹上の岡山とも呼び、今の師範學校の背後の山つづきで、吹上の寺町から東の

山に當るのだから、讀者は宜く注意すべしである。

由來和歌山の城地は、最も形勝利便の地である、先づ其地理を按せよ、南に重疊たる長嶺が横つてゐて北に峻嶒ある葛城が列あり、剩へ滾滾たる長流の紀川が繞り、而して東は剽然として開豁した那賀名草の平野に連つて、不斷上國との驛息が相通じられ、又西は漫漫たる常浪の紀海を控へて、一たび其水門に船舶の纜を解うならば、東北諸州の遠ひ方の津津へありとも、西南地方の隅の所の浦浦ありとも、乃至は海外の諸國へありとも、自由自在に往來がかし得られる、然らば則ち一旦之を鎖せば、直に是れ山河襟帯の城郭、金城湯池の要害で、之を開けば忽ち四通八達の地區、輻湊聚散の場所とあるのだ、此の如く山河襟帯の城郭、金城湯池の要害は、即ち國防上最重最要の鎮府である、然らば則ち近古天正年間豊太閤が、その體勢城地に宜きを相し、親自ら繩張を命じて城を築きたりといふのは、畢竟するに此邊の着眼點から來たのだ、其後徳川氏が露親の人を封じて、其國城の守護としたのも、その見る眼は彼此同一揆に出たのだ、尤も是は内に於ける四國九州の諸豪雄を威壓する爲めのみで、外寇の來襲を慮つた豫防的設備では無つた、併しその設備は安政文久の交江戸幕府の教を受けて、紀州藩の手で施された、當時南は和歌浦から水軒青岸、海口を隔つて松江、北へ廻つて加太深山の邊まで、一帯に聯珠的砲臺の築設されたのが其である、今日でも深山に砲臺が築設してあつて、要塞兵が幾隊か配置されてゐる、和歌山にも亦新に歩兵旅團司令部と同聯隊とが設置された、皆以て外寇に對しての豫防的設備と見るべし。

さて又四通八達の地區、輻湊聚散の場所は、亦即ち通商貿易の市場である、勿論和歌山の城下が其等の市場に開かれた事は無ひが、會て英佛米等の諸外國が江戸幕府へ、兵庫の開港を強要する以前、紀水門を開港場、和歌山城下を開市場の候補地に擬して、幕府に内請した事があつたと聞てゐる、尤も是は傳聞の説だから確かだといはれぬ、けれど今日からでも市民あり縣民ありが、更に二層も三層も奮發して、工業及び諸産業の大發展を畫策して實行するに至つたならば、之を開港場にも開市場にも、爲さんと欲して爲し得られぬといふ理由はあるまひ。

因に云ふ前に謂ゆる國防的設備は、上古時代にも之れあつたか否かとの問題に對しては、愾くいふわれ等は、その必ず之れあつたといふ事を、中古時代に置かれた海部郡の事を以て證しようと思ふ、何故ならば海部郡は即ち『日本書紀』に出てゐる海人の部落があつた地で、而して海人は即ち海邊の守備の爲めに配置されたものだからだ、尤もこの海人の事に就ては、古今の學者間に普通の解説と奇怪の珍説とがあつて、『續風土記』に記して、「海人は漁鹽を營むむもの名あり」とあるは、謂ゆる普通の解説だ、但しその名の字には鹽戸と書き、又は白水郎とも書くのがある、允恭天皇の御紀には、白水郎と海人の兩様の字が使つてゐる、その職業は漁撈と製鹽とである、けれど上世兵農の未だ相分れぬ時代は、國民は皆兵だといふ事を忘れてはならぬと同時に、その平野坦開の地に住むものが耕作農業に従事し、山間にあるものが狩獵の業を營み、而して海邊にゐるものが漁鹽採藻、若くは操舟回漕などの營業をする

のは、彼等各自が糊口生活上の状態だといふ事も忘れてはならぬ、されば夫の海人なるものが、平時糊口生活の爲め海潮を浴びながら、魚族を漁り甲介類を撈るのを見、中世以降武門武士あるものが生れてから、兵農が全く相分れた時代の思想を以て、彼は是れ専ら獲戸たるのみ白水郎たるのみ、又専ら漁夫撈丁たるのみと一概に看做して、敢て國防兵役の事に關あらぬものとするは、未だ深く海人の性質を研究せぬ説といはねばならぬ、即ち海人は海邊を守備するもので、國防的設備の爲めに配置されてゐたものだといふ事を、嶺から見落した説だといはねばならぬ。

若夫れ奇怪の珍説といふのは、海人は武家時代の謂ゆる海賊で、その部衆が多くあつて、數艘の船隊を組んで海上に出没し、沿海の村邑を劫かし、碇泊の舟船を脅かし、小あれば則ち財物を劫盜し、大あれば則ち土地を侵略して之を占領し、或は人民を鹵掠して奴婢に役する等、すべて暴力を以て掠奪を行ふ徒の集團であるやうにいつてゐる説だ、いかにも武家時代頃から源平両氏時代よりも遙か以前に海賊と稱するものがあつて、操舟の技に能く熟練した浮浪が、相聚つて水師を編成し、その船を海賊船と稱し、乗組員を海賊衆と呼び、而してその張本を海賊大將軍と號し、南海から中國九州邊の海島に根據を設けて内海を横行し、官船民船を擄ます暴掠劫奪を逞ふた事はいふに及ばず、支那朝鮮海の沿岸にも押寄せ、人を殺し財を奪ひ、因て兩國の官民を震懼した事は、歴史にも載てゐるし、その他の物の本にも書てあつて、誰でも能く承知してゐる、が上世の海人を之に擬して論じるは無理であらう、否を斷じて

不當といふべし、何故ならば上世の海人は、政府からその地方の海邊に配置され、而して宰官の統率の下に、國防的守備の任務に服する事、既説した通りの譯であるからだ。

然らばその地方の海邊に海人の配置されたのは、何の年代の事であらうか、其は歴史が缺けて完全でなから、據を捉へて確かにいふとは能はぬ、けれど應神天皇の御紀に、三年十一月に海人の宰官が置かれ、同五年八月にその部が定められた事が記してあるから、蓋し神功皇后攝政の御時代から、遡つて神武天皇御東征後の時代、即ち上古我國に於て多く舟師を動かされた時代かと推想される、木國の方へも勿論同じ時代に配置されたのであらう、而してその場所は名草在田日高三郡の地の西に接した海邊の加太木本雜賀の三莊から、仁義濱中衣奈由良の四莊にかけて一帯の地域だといふ事は、前説した通り右七莊の地帯が皆、海人部落のあつた所で、郡名を海部と稱したので證されよう、熊野國の邊海に至るも亦、海人部落のあつた事は勿論であらうが、捉ふべき據があひ、けれど源平氏時代に別當湛増の率ひた二百餘艘の戦船の艦を押し、南北朝時代に脇屋刑部卿義助を送つた三百餘艘の戦船の艦を操り、或は足利時代に夫の八幡船隊に参加し、又は織田右府の命に依り九鬼嘉隆が徵發して雜賀埵に集合した數百艘の船舶の漕手とあつた水夫、さては慶長年間から始つた捕鯨、數十艘の漆船を浮べて鯨海の大鯨を攻撃殺獲する勇壯ある漁夫等は皆、當時配備された海人の末裔だと推想して誤あからう。

國防の説、海人の考は此邊で閑話休題として、是から更に和歌山城の歴史を語らう、さても勿柴秀長即

ち大和納言が紀州を兼領して本城の主であつた事は僅か七年で、天正十九年に薨じたから、その跡は子の秀俊が襲だけれど、彼は亦文祿三年に幸し或は秀俊の卒年を慶長八年なりといふ跡が絶へたから、國除かれ、その後暫くは缺國のまま、城は獨り桑山重晴が留守預をしてゐた、折から慶長五年に淺野左京大夫幸長が之に封せられて城に入た、此時重晴は泉州谷川に退去したといふと、幸長の就封後更に城郭を増修して、内堀總堀を築り石垣を築くかど、おひ／＼にその構設を堅固にしたが、居ると十四年で慶長十八年に卒した跡は、舍弟但馬守長晟が襲た、が間もなく元和五年に藝州廣島に轉封し、代つて之に封せられたのは誰であらう、東照公の十男で紀州家の始祖二位權大納言南龍院殿徳川頼宣卿、即ち南龍公である、而してその封に就き城に入たのは、實に元和五年八月十三日一に十八日といふ説もあるが南龍公の諱には十三日と書てあるから之に據たの事であつた、紀州藩の時には此時を指して私に國初と稱してゐた。

南龍公が就封した再翌元和七年に城郭の増修があつた、淺野氏の時まで東方にあつた城の大手口門今の門を北方の門に改めた之橋門而して東から南へ繞る高石垣を増築したのだ、その普請は藤堂高虎が安藤直次と相談してしたとのとだ、當時江戸將軍家秀忠公からして、「紀州城間ある様に被開召の間、石垣等御思召のままに御普請可被成旨」との口上を添へて、銀子二千貫匁を贈與せられた南龍公が、年譜略愆して増修した城郭の規模は、本書の巻首に挿入してある、徳川氏時代の和歌山城郭圖と題した石板摺圖が其である是で以て謂ゆる山河襟帶の城郭、金城湯池の要害、南海道の雄鎮と崇仰する所の規模は全く全備したの

だ、而して此本城は南龍公頼宣から光貞、綱教、頼職、吉宗、宗直、宗將、重倫、治貞、治賢、齊順、齊強、慶福と改む、茂承と數世十餘代に相傳した、此間光貞卿の代明暦元年に二之丸に火災があり、又齊強卿の代弘化三年七月二十六日に雷火で天守閣が焼失した此時に讃州の高松、阿波の徳島等から非常に見舞の人数が来た由に浪水筆記に見へるが、越て嘉永二年十一月朔日に改築の上様式を舉行した、此時何人だかが狂歌を讀た、その詞は

天さがる國の守りの棟あげば
酉の霜月朔日が 嘉永

といふのだ、下の句の酉の霜月は嘉永二年十一月に相當し、かゝい、は年號の嘉永に利さして讀すのだ。さて此和歌山城は豊太閤の細張で築造した天正十三年からは二百八十四年、南龍公が封に就き居城とした元和五年からは二百五十二年に當る、明治四年に廢城とあつた、其は明治元年に王政復古の鴻業が成就して、江戸將軍家は武職を辭退し、兵馬の大權を朝廷に返上し、諸侯伯は亦同二年から四年にかけて、版籍を奉還し、藩國の稱を廢され、隨つてその常備兵も解除されて、舊各藩の城郭は不用に屬し、悉皆兵部省の手に收められた折、和歌山城も亦同じやうな始末で、同省の手に收められて、而して四方の樓櫓塹壁かども、漸次毀却されて了つたからだ、其後二之丸の建物、即ち舊藩の政廳の構造物全部も明治十八年に大阪へ運搬し去られ兵部省と第四師團司令部に用ひられておた建物が即ち此である今では唯獨り天守閣ばかりが、依然當時の形體を存して、風雨四十年紀州一國の記念物とあつて、和歌山全市の壯觀を飾をわしてゐる、懐古の人倚

十
し當時の條を憑ばふとあらば、試みにその上層に登つて看よ、必ず轉た感慨に禁への事があるであらうと思はれる、祇南海と頼山陽との詩一首づつを左に記して見せよう。

仰府城恭賦

祇南海

宗藩雄府屹如桓。表裏山形龍虎盤。江漢于今南國紀。金湯自古大邦翰。炎州翡翠集球樹。碧海珊瑚拂釣竿。更有蓬萊稱仙窟。鬱葱佳氣五雲蟠。

紀藩書感

頼山陽

藩府形便接鎮臺。吾公昔日煎蒿萊。山分畿甸逶迤遠。海擁西南港洸開。平蔡功勳憑胤武。登股戈戟賦廉來。移封二百星霜變。誰識孤臣頭數回。

南海の詩は即ち雅頌の風であるが、山陽の詩は正に是れ憑弔の類である。

第二 和歌山城下市街の開始及びその沿革

天正十三年初めて和歌山城の築造された當時にあつては、その四方はみか村落があるばかりで、城下の市街といふもの未だ片隅にもあらざりたは、前以て説明して置た通り事だ、其故當時の普請奉行藤堂和泉守と羽田長門守とが合議の設計で、先づ釘貫村の民舎を鷺森村に移轉させ、而してその故地を内郭に取込み、郭外の東西に堀川を開鑿して、西は傳法から湊川へ通じさせ、東は鈴九川に至て廣瀬から和歌川湊川と潮汐を相通じさせ、城下を貫いた水路を造り、運漕の便宜を圖り、又市街を東の方廣瀬

に、西の方湊に、北の方内町に開き、大道小路を通じたから、工商の徒輩諸方から來り集つて住居を定め、おの／＼肆廩を開張してその業を營み始めた、是れがそも／＼今日南海道屈指の一都會で、七萬の人口を有してゐる和歌山市の創始である、して見ればその初め此地に城郭を建築し、市街道路を開通させた豊太閤は、正しく和歌山市の開祖として仰ぐべきではあるまじか、羽柴氏の後淺野氏の時にあつては、更に市中の町割を定め、肆廩の改易を行つた跡が見ゆる。

さて又南龍公の時にあつては、市街道路の大開修があつた、先づ第一に城郭の京橋門の北から、眞直ぐに本町といふ大路を開いた、但し是れは城の舊の大手の岡口を、今の一之橋口に變更した結果だ、而して又寺院や肆廩もしば／＼移轉させた、寺院は今の元寺町から多く、かは市街の區域が狹隘で以て、工商諸民は吹上寺町に移したのだが、を容れるに足らぬといふので、東の方は廣瀬の川を越して新内村、中野島村領に亘る地を開いて、其所に新町を、北の方は鈴丸の川を越して、中野島村の地を開き其所に北新地を作つた、是れで城下の區域廣袤は、北は宇治村の故地を盡して紀川堤を限り、東北隅は中野島村と人家接續し、東は新内村と太田村との境に亘り、南は吹上を盡して關戸村と隣をかし、西は湊川の岸に臨んで界をかした、而してその中央を内郭、即ち丸之内と定めた。

この時に城下の全体を八區に分割した、岡といひ廣瀬といひ新町といふ、以上は城の東にある、北新町といひ内町といひ宇治といふ、是れはその北にある、又湊といふはその西にあつて、吹上といふは南に

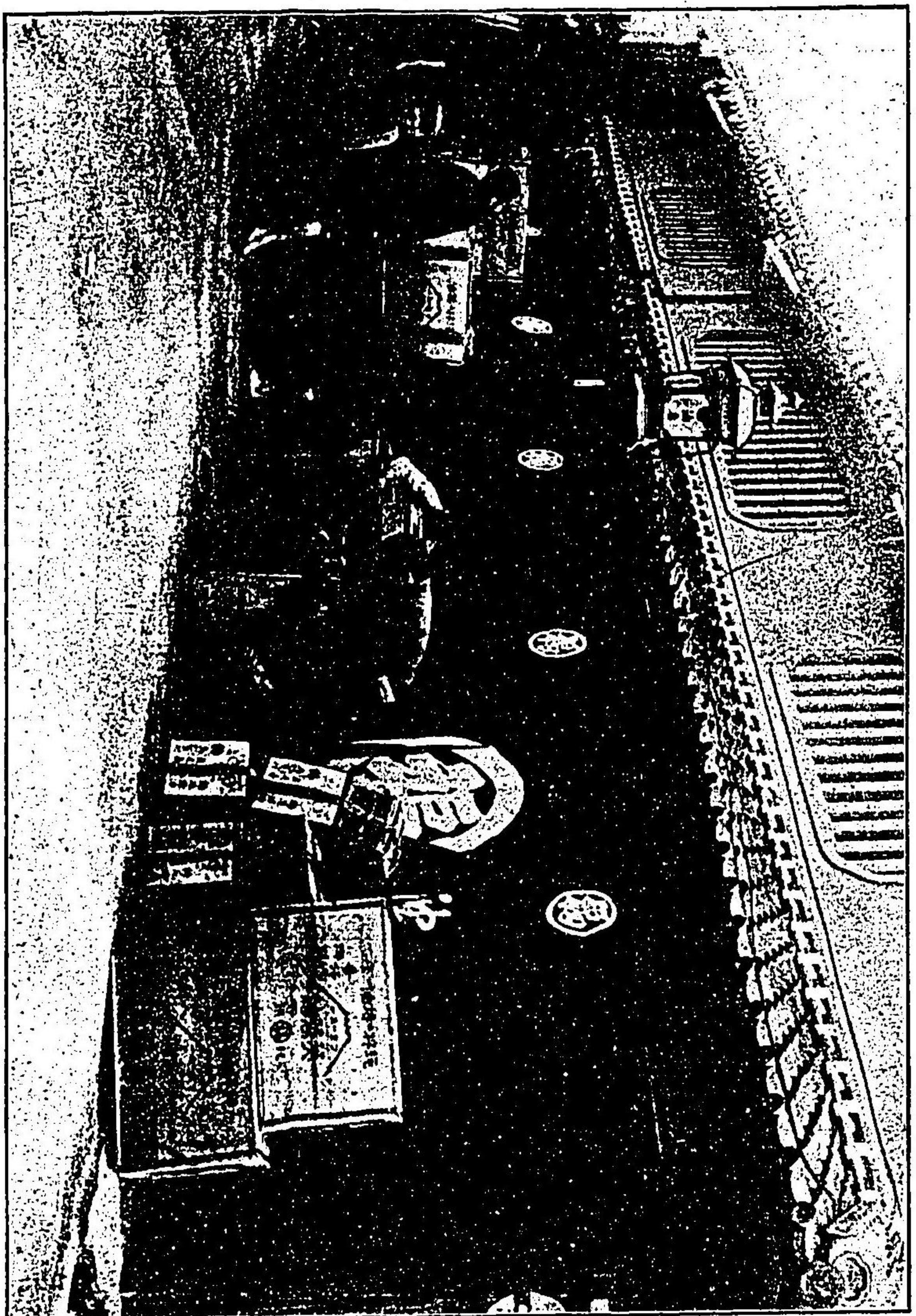
十四
 がその地で、上世は西は紀水門の地、吹上に接し、東は紀川の流域、上世は紀川の下流二に分れ一方はに瀨してゐたのが、後世和歌山城が築かれてから、その地の北端は内郭の内に入り、岡島と鹽道とは村方に屬し、その餘は廣瀬、新町、岡、吹上と分れて、みぎ城下の市街にあつて、今では岡といふ名の地は、僅か岡山からその東麓の邊ばかりに縮つて了つた。因に云ふ、神龜元年の十月聖武天皇の玉津島御遊幸の時、難宮を岡東に造ると『書紀』に出でゐるその地は、今の廣瀬の内だとの説があるが、是れは大なる疑問であつて、何か證據らしき事が物があければ、迂濶として同意する譯に行かぬ。

廣瀬、舊は岡町の内であつたが、おほその以前は紀川の流域であつた證據は、今でも井を穿るときには腐朽した段の根ぞが出るとのことだ、この地は東北は川を以て新町、内町と界し、南は鹽道村、西は岡及び内郭と界してゐる。

新町、西北は川を以て廣瀬、中野島村と界し、東南は宮郷の諸村と界してゐる、この邊古ひ昔は難賀川の瀨にあつてゐたのを、淺野氏の時に開拓して市街にしたから、それで新町と名けたのだ、而して此所は淺野氏の時の追手口に當つてゐたから、城下の中でも主たる市街であつたのだ。

北新町、南は鈴丸川を隔つて新町と相對し、西は同く川を隔つて東宇治に臨み、東北は中野島村に接してゐる、舊は名草郡中野島村の領内であつたが、元和年中その村領を削ぎ城下に入れて市街としたのだ、その北新町と名けたのは、新町の北にあるからのことだ。

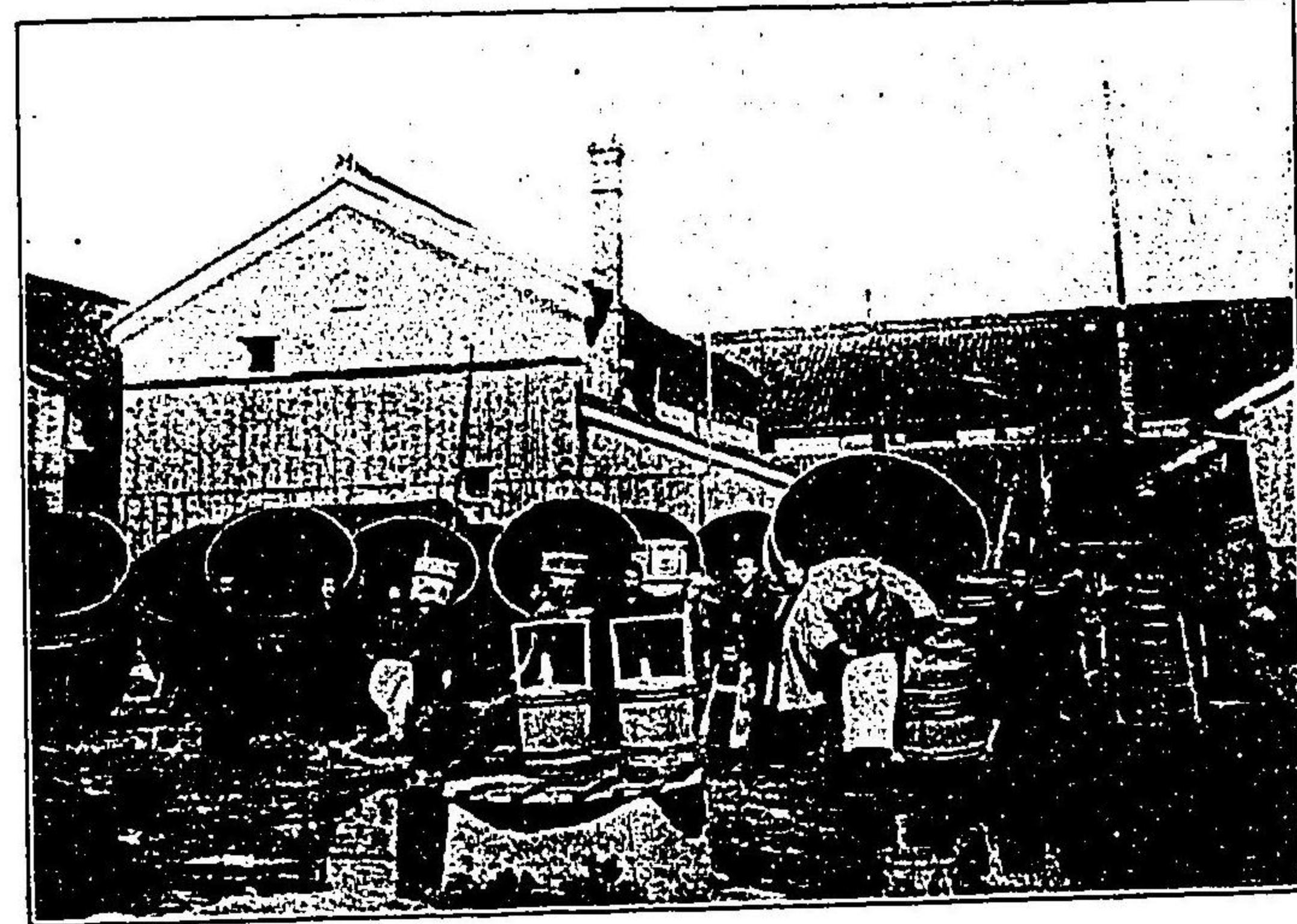
國産髮油商



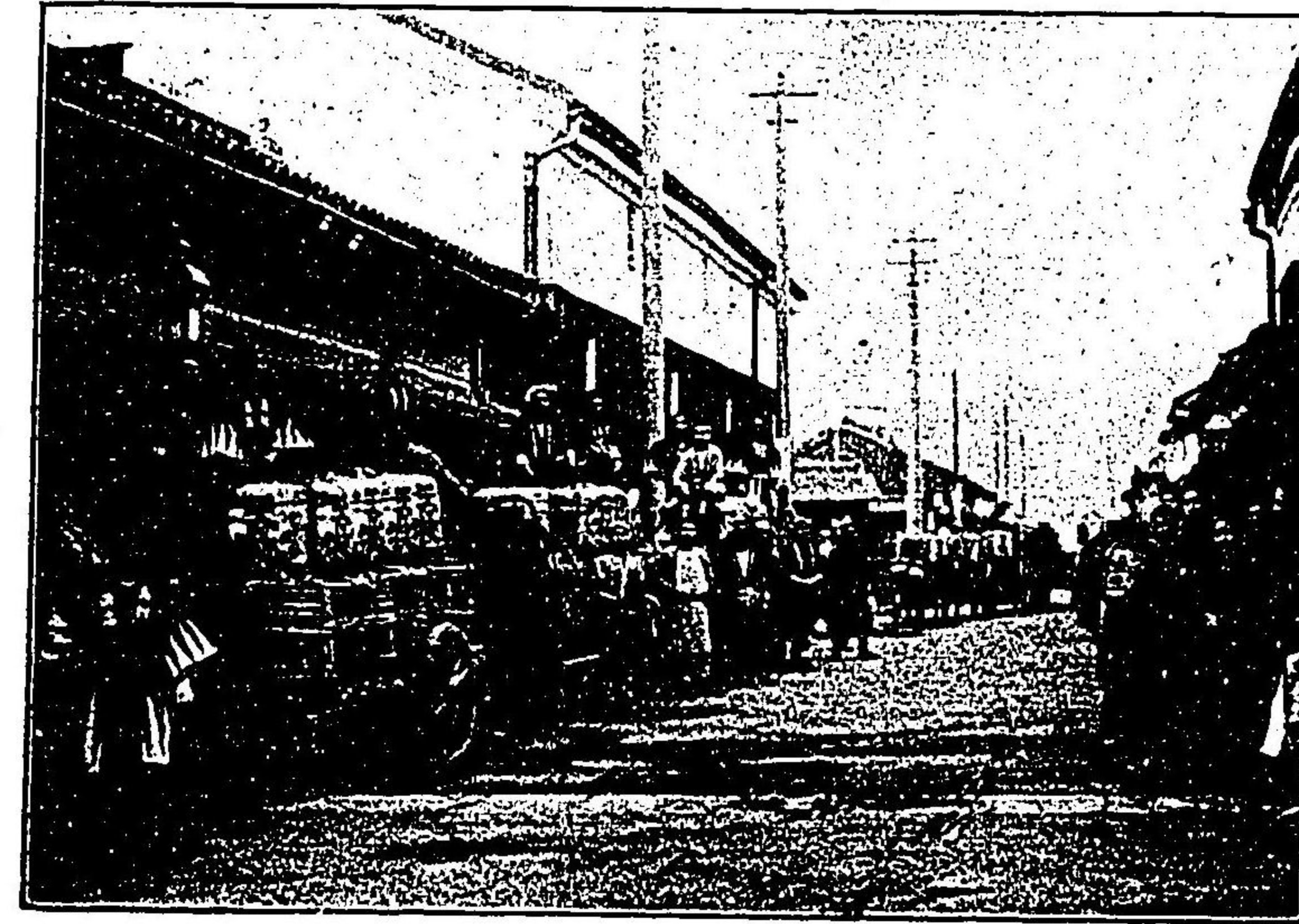
福 鳴村髮油店
 紀州和歌山市新通四丁目
 (電話一四〇番)

福 鳴村支店
 大阪市南區大寶寺町仲之町

銘酒天長釀造廠內部



銘酒天長釀造廠前荷積



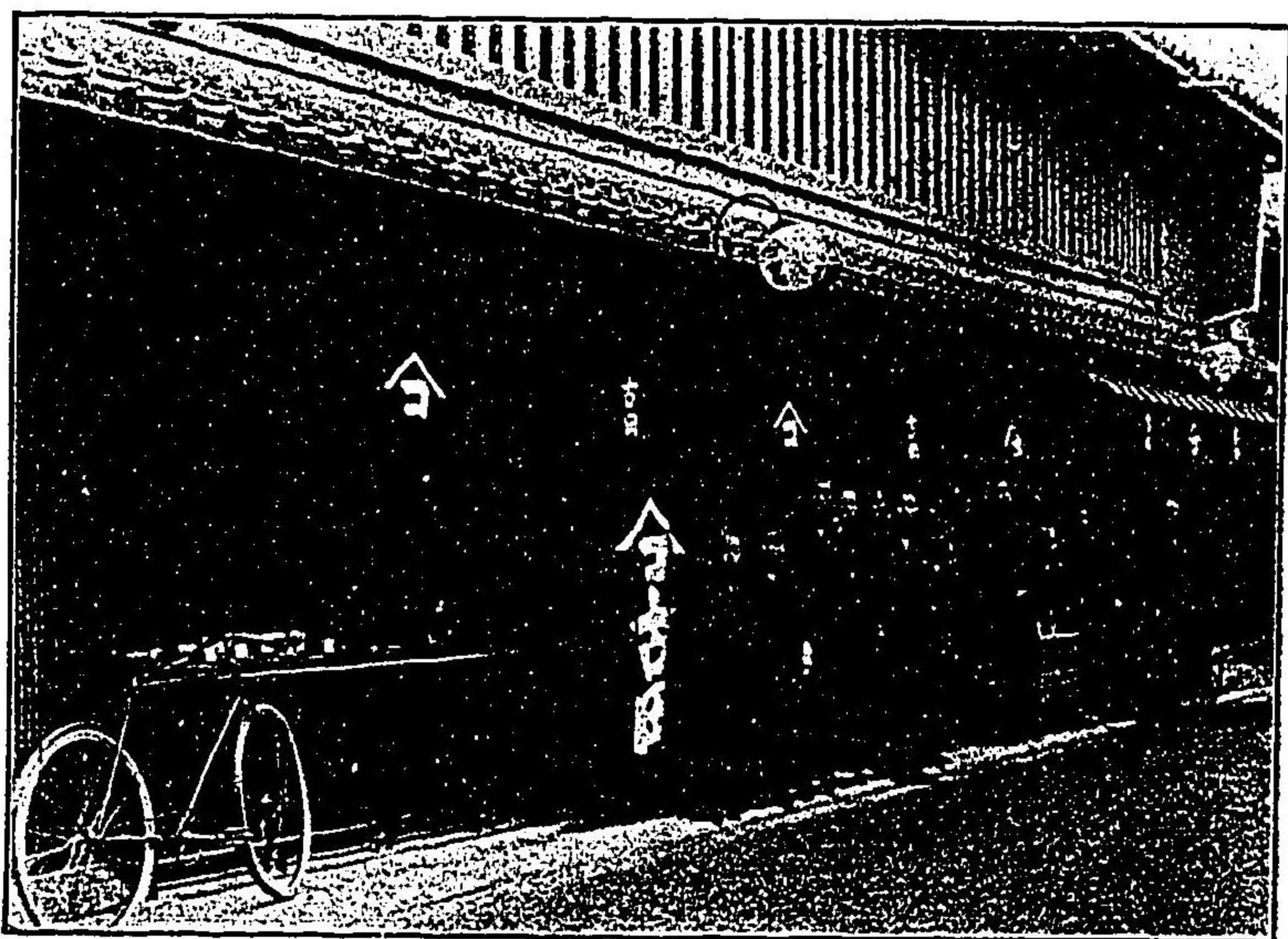
銘酒天長釀造元

和歌山本市町七丁目

鳴村釀造場主

電話四九番

我	銘	釀	氣	可
家	日	造	味	以
之	天	醇	芳	醉
酒	長	粹	冽	可
				以
				樂



本店は遠く父祖創業の時代より謂ゆる現金懸直無し
 正札付きにて御需めに應じ各位の御高評を蒙り
 在候得ば他店の品物と御見比べの上にて萬一高價又
 は劣等也と御認め御遠慮なく御申下され度
 左候半ば何時にて御氣に適ひたる品と引替或は代金
 の御返戻も致すべく候、昨今店の手前に取揃へ之れ
 ある諸色概目は
 純金指環 根懸簪 儀式用頭飾品
 貴金屬指環 金物烟管 羽織 紐帶締
 珊瑚珠寶玉石類 合財囊銀貨入
 籠 甲 櫛 簪 簪 卷貫入弗入提物
 蒔 繪 櫛 櫛 簪 簪 烟草具一式
 其他貴婦人紳士用裝身具。頭飾品。携帶品一式
 ○猶又當店は各位の御需めに應じ金五拾錢以上は何
 程にても體裁優美にして至極御便利なる御進物用の
 小間物切手さし上申すべく候

頭飾品
 裝身具
 携帶品
商 今
 和歌山市中之店住吉橋北詰
古田小間物店
 電話三二番

内町、川を隔つた東に新町があり、西に湊があり、南は内郭の川限りで、北は宇治に接し、ただ本町の
 一筋だけが、紀川堤まで延てゐる、この地は舊は宇治村及び登森村の内であつたのを、淺野氏の時に市
 街にしたのだ、いま北町の東の横筋に城之口といふ所がある、是れはその時ふんの搦手口であつたとの
 とだ、然るに元和に至て本町を此地に開き、改めて城の大手口にしたので、町筋も廣大にあつた、但し
 その内町といふのは、外郭の内にあつてゐたからのとだ。

宇治、是れは前にもいつた通り、和歌山では最古の地で、舊はこの界隈の總名であつた、さてその地域
 は、川を隔つた東に北新町があり、西北は紀川堤で限られ、南は内町に接して、中間に本町が南北に縦
 貫してゐるから、その東を東宇治、西を西宇治と稱してゐた、景行天皇の三年に屋主忍男武雄心命宿禰
 父の妻つた影媛の父、紀直の遠祖菟道彦の名は此地に取たものだとの説がある續風土記この地は後世にあつ
 てから登森、七日市、六日市の三个村に分れて、その内に釘貫、徳田木、四日市などの小名があつたが
 慶長六年の檢地の時、更に宇治、登森の二个村に分合し、その後又城下の地にかつてから、この二个村
 の地を割て、内町と宇治との二區域にしたのだ。

湊、海部郡雜賀莊湊村の内、上世は廣ひ船泊りの場所、潮汐のさし引きする海面であつたが、後
 世に及ぶに随ひ漸漸陸地に變じて、應て南の方は村落にかり、北の方は城下の區域に入つたのだ、而して
 その地は西は湊川に限られ、南は吹上に接し、北は宇治に接してゐた。因に云ふ、『古事記』神武天皇

の御卷に彦五瀬命が男健して而して崩ましぬと記された紀國男之水門も、『書紀』神功皇后の御紀に記された武内宿禰が皇子を懐ひて泊した紀伊水門も、又應神天皇の御紀に記された同宿禰が筑紫を避けて泊した紀水門も、彼此れ同じ此所であるとの舊説があるが、彦五瀬命の雄詰の水門は泉州の男水門で、武内宿禰が白子を懐ひてし泊した紀伊水門は日高郡の衣奈浦であらうと思ふ、詳さる事は『木國史談會雜誌』に考を盡して置た。

吹上、此の地は東は岡に、北は湊に、西は湊村に接して、而して南は今福、宇須の西村に接した所であるが、原來此所は海部郡雜賀莊の海濱の總名で、今の湊の南から今福の邊を包ね、和歌、關戸、西濱村の北方一帯をいふのだ、即ち上世からの海濱であつたのだ、かは細しひ事は名所舊蹟の部で記さう。

第四 和歌山の名所舊蹟

和歌山の地には名所舊蹟が比較的少い、先づ左に取立てて記す位なものであらう。

□聖武天皇離宮遺址 廣瀬八百屋町今東の東字宮之嶺といふ所にある、『續紀』に見へてゐる岡東の地であるとの傳説だが、史蹟研究の上からいふと固より疑問は免がれなひのだ、但し舊は此所に八幡宮の神祠があつたのを、寛永年中に岡宮の境内に移したとのとだ。

□男之水門紀之水門 此の地の事は前に湊の項で盡して置た、要するに紀水門といふのは是れから東へ一里餘りの所であつたらうが、男之水門といふのは此の地ではあるまじ、『古事記』に記

された男之水門は泉州の男里だといふ舊説がある、然るに夫の李梅溪は、湊雄の町今野小伊達神社水門吹の境内の地は雄之芝と呼んで、彦五瀬命の雄健の御場所と斷定を下して、雄之碑の銘さへ石に刻して建ててあるけれど、訝しひ證議といはねばならぬ、剩てや五瀬命を神武天皇と取違へた様を書き方がしてあつて、杜撰極まつてゐるから、讀んで而して之れを信じることは不可だ、ただ今の人は現在の湊の地は上世の入海で、紀川の流を呑む紀水門は、是れから一里餘りの東にあつたらう位に思つてゐる方が宜からう。

□吹上濱 この地の事も前に吹上の項で略書して置た通りだが、原來この濱は西南の風の烈しむ時には、眞砂を東北の方へ吹上げて、それが歳月を積重ねるまゝに、凝固つて地盤とあるから、自然その名を負ふやうにあつたのだ、或はいふ往昔は此地を月の名所にかぞへてゐたと、が月ばかりの名所ではあひ、さまざま風景の眺めもあつたらしひ、題詠の歌もまた數多ある、就中く有名を菅公の白菊の詠がある、左に記す

寛平の御時せられける菊合にすはまをつくりてさくの花をうねたりるにくわへたりけるうた ふさるげのはまの方にさくうねたりけるをよめる

古今集 秋風の吹上になつてる白菊は花あらぬ波のよせてか 菅原 朝臣

といふのだ、但し是れは菅公が實地の實景を見て讀れたといふのではあひ、吹上の名が寛平の時ころから、都へまで聞へてゐたといふ事を知らすために記したのだ。

又大納言公任卿の王津島紀行文の中に

吹上の濱に至りぬ、風の砂を吹上げば、霞たを引やうなり、げに名にはたかはぬ所なり云々と記してある、この他は

熊野へまかりける道にて吹上の濱を見て
 後拾遺 宮古にて吹上の濱を人とはけふ見るはかりいか、語らん 貫圓法師
 新古今 浦風に吹上の濱のはまちどり波たたくらし夜中に鳴なり 祐子内親王家紀伊
 月ぞすむ誰かはこゝに紀の國や吹上の千鳥ひとり鳴なり 攝政太政大臣
 打くする波の聲にしてさかな吹上の濱の秋のはつかせ 祝部成伴
 熊野へ御幸の時よませ給ひける
 沖津風吹上の千鳥夜やさむき明るにちかき波になくなり 白河院御製
 加賀乳母紀伊國へ下りける時鐘給はずくて
 朝夕に馴れ見し事をおもひ出上吹上の濱の風につけても 圓融院御製
 弘長三年玉津鳴歌合演震
 浦邊く霞にけりなしは風のおなじ真砂の吹あけのはま 前大納言爲兵
 うつは物語吹上の巻上に
 花さそふ風も心すこく吹く浦邊を見渡したまひつゝ花は色をつくした、今さかりなり風に
 さほひてちりかひこさわたるをふね近く隔るにひとつにさきてと見ゆれば
 ゆくふねの花にまかふは春風の吹上の濱をこけはさけり 少 將
 春風の吹上に与ふ櫻花露のうへにもさかせてしかな
 同様のうへの巻上

紀の國の吹上の濱のはまへにて契りしかひはなきなるらん 大 將

吹上の濱邊の契なごりなくかひある事はみせしとそさく 中 納 言

吹上の濱にどまれる夜ふかくそをたつて波のたかう思ゆれば 増基法師

いはぬし 天の月を吹上の濱にたつ波はよるさへ見ゆる物にぞありける 増基法師

玉津鳴會正治二年九月海濱晚月 飛鳥井集

なむれは吹上の濱の松風に波よりすめるありあけの月 雅 經

後鳥羽院熊野御幸時藤白王子御會和歌海濱冬月 浦邊く八十崎かけてよる波を吹上の月に松風をふく 御 製

沖津風吹上の濱にすむ月は霜か氷かうらのあま入 左中將通光

しほ風や吹上の月に雪消て霜よりうへに霜を氷れる 藤原清範

同御幸時熊野王子御會海濱月似雪

しほ風や吹上の濱の空さへて月かけすめる雪のあけほの 春宮惟茂源朝臣入道

草根集 時の間に真砂吹上の山谷をつくりかへたる和路のしほ風 正 徹

新勅選 時しあれば櫻をそおもふ春風の吹上の濱にたてるしら波 家 隆

續後選 夜とよもに吹上の濱の沙風になひく真砂の聲けとそ思ふ 定 家

内裏名 春の夜のためしるしきの國や吹上の濱に夜む月かけ 俊 成 女

繁 禁 見るまゝに雲を波とは別れつゝかけ行空に吹上のほま 順徳院御製

山 家 波かくる吹上の濱の箱貝風もぞあるすいそさひるはん 四 行 法師

更に又吹上の峰を詠じた家隆卿の歌を記さう、

以上は『續風土記』に出てる所で、以下は『名所圖會』に見ゆる所だ

秋の夜を吹上の峰の木枯に横置しらむ山の嶺の月

是れは『玉吟集』に見えてゐる。但し吹上の峰とは謂ゆる伏虎山の事で、今の天守臺の高嶺をさして言たものだ、さて恁やうに吹上の濱は、中古時代の歌枕の名所であつたが、物換り星移るに隨ひ、今ではその傍を荒濱から水軒西濱あたりで見ると見るばかりだ。

吹上神社故址 今の湊牛町の地が其所だとの傳説であるが、何所の邊だか判然としあひ、併しその社は天正年中に湊小野町水門神社の境内に移された事だけは分明である、この神社は往昔は餘ほど名高かつたと見えて、夫の西行法師も參詣して、降る雨に逢ふた時に、日和請の歌を讀んでゐるその事は同法師の『山家集』に書てある、

待賢門院申納言の扇をくらをすて、高野の麓に天野と申す山にすまれけり(中略)かゝるついでには今はあるまじきことなり、吹上みひといふこととせられたりける人々申し出て吹上へおわしけり道より大雨風吹きてけうなくなりにけりさりとてはとて吹上に行つたりけれども見所なきやうにて社に與かすて思ふにも似たりけり能因か苗代水にせきくたせと讀みて云ひ傳へられたる物なと思ひて社にかきつける

又 天くたる名を吹上の神ならば豈晴れのきて光りあらはせ

苗代にせきくたされし天の河とむるも神の處なるべし

かく書たりければやかて西の風吹かばりて忽に豈晴てうらく日となりにけり末の世なれとこころさしいたりぬることにはしるしありたなること人々申しつゝ信をおこして吹上和歌の浦おもふやうに見て贈られにけり

辨財天山 岡にある巖石山だ、この地は正しく上世の海岸と思はれる、夫の突元とした巖の形、傾斜した大盤石をみると、何しても浪打際のありさまである、山上に舊は辨財天の祠があつた

それで山の名に負はせたのだ、その祠は寛文以前に岡宮の境内に移したとのだが、今では天妃山といひ、岡公園の中にあつて、山上には佐賀熊本の役に於ける和歌山出身軍人戦死者の記念碑も、征清の役の記念碑も建てゐる、殊にこの山上は至極眺望の好い所であつて、西を仰げば巍然たる城山の鬱蒼たる樹梢越しに、碧瓦白壁の天守閣が眸中に入り、東北を望めば人烟稠密なる市中の景状も、剗然野の如き

平田を通して、葛城長嶺名草諸山の姿態形容から、その邊の一切の光景が眼界に擴つて来る、加旃らず山上下には梅も櫻もあり、各種の良樹佳木もあり、又池あつて、數多放養されてゐる真鯉鯉の類が悠揚として水中を游泳する状を見るかど、誠に市中第一の遊覽場と稱しても不當ではあひ。

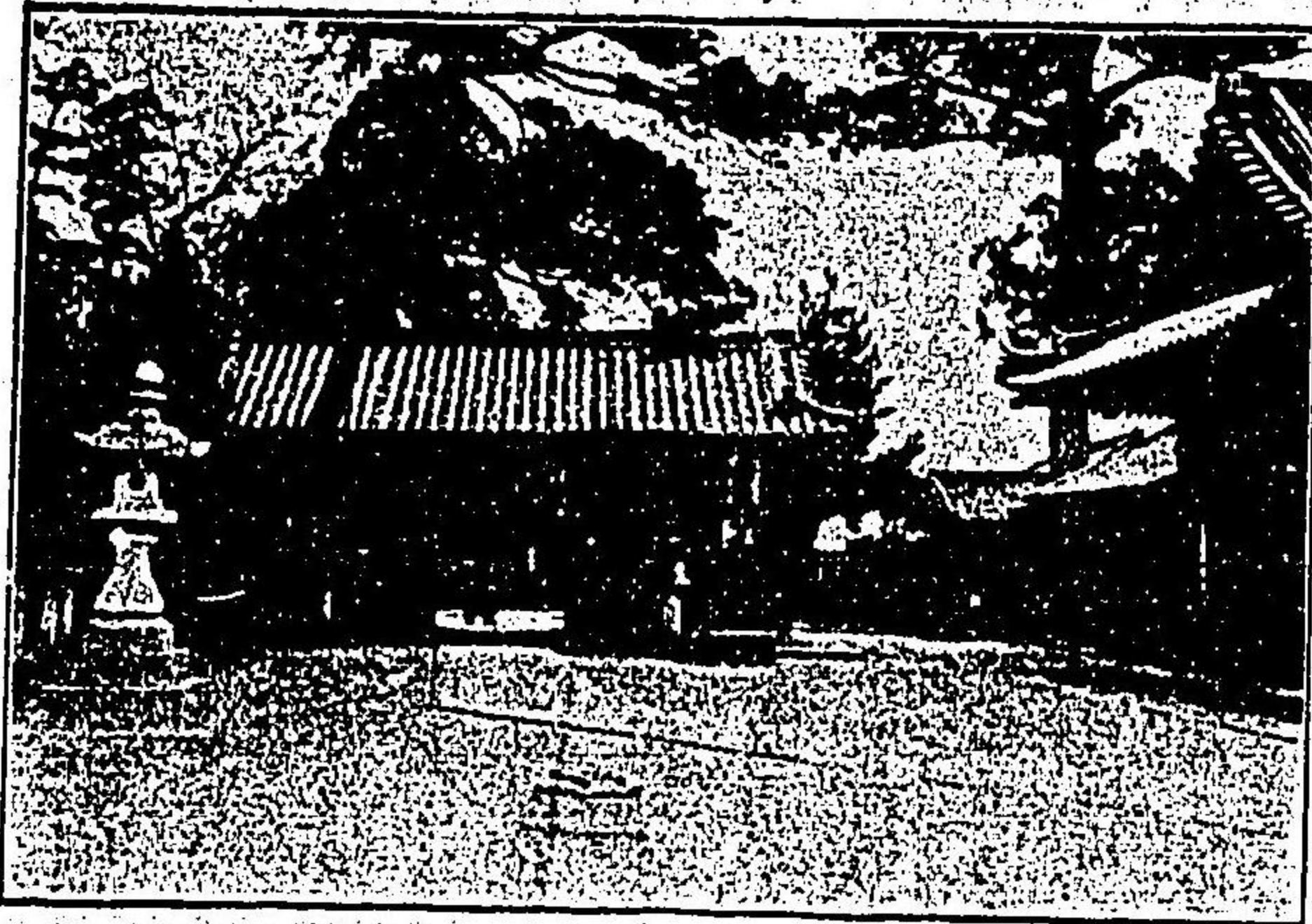
奥山城址 奥山とは岡山の事で、此所に會て城の築かれてあつた事は、和歌山城郭築造の條にいつて置たから、今又別だんに記すにも及ぶまひ。

城山 湊久保町四丁目、紀川に臨んで高岸の所を城山といつてゐる、之れに就き『續風土記』には『太平記大全』の
將山戦餘未だ尼崎に陣し給ふ時、細川頼之紀の邊城にありしを、湯川莊司將軍方に成て、湯川入道定佛が孫左京進が極頼りたる阿州川城(在田郡山保田莊にあり)を攻むと、湯川莊司將軍方に成て、湯川入道定佛が孫左京進が極頼りたる阿州川

を撃ち大に此を敗る、頼之は明れば紀伊津を立て熊坂に打懸、滿川と一手に成て滿津が城を攻むと評定一決したりけるが、思の外に滿川は兵敗れしかば、道まで出けるに阿波の小笠原、大四の類も、落行滿川が兵と一所に成て皆紀伊津城へぞ歸りける、かくて十日許り過ければ、京勢千動被にて服負たりと早島到來しければ、頼之は淡の城を捨て四國へ引てけり
とある一段を引て、その湊城とは此の城山にあつた城の事だらうと書てあるが、判然と決定はし難い。

第五 和歌山の古神社

○岡宮 祭神は刺田比古の大神と申すのだ、固より式内の神で、今では郷社にあつてゐるが、舊國主の紀州家の時には、和歌山城の産土神と崇めてゐたのだ、然るにこの刺田比古といふ御名を負へる大神は、『古事記』にも『日本書紀』にも見はれてゐるが、其故本居宣長翁は、自著の『古事記傳』の上で、刺田の田は國字の誤ではあるまひかと考説されてゐる、果して爾だとすれば刺田大神の事、刺田稚媛更の名大市姫の父神で、素盞鳴尊の眞神、又夫の大屋毘古大神、即ち五十猛命と大屋津姫命、抓津姫命並に大國主尊の外祖父神に當らるるのだから、當國に奉祀したのは尤も至極である、この宮今は刺田比古神社と稱し



(岡宮)

てゐる、大國主尊も合祀されて、攝社に入幡宮の宮を置に在たのたが、未社に辨財天にあらつたのだ、天満宮、稻荷、賽神、住吉神社とがあつた、當社は曾て有徳院殿吉宗公の産土神であつたから、享保十四年に台命を以て名草郡の内、田尻村の地二百石を寄附され、毎年一萬度の祓を行はし、而して御太刀一振を奉納されたといふ。

○水門神社 吹上神社 湊小

野町二丁目、古名雄芝といふ所にある、水門神社は世に惠比壽と稱する蛭子神を祀り、吹上神社は五十猛命を祀つたので、神號を伊達と申してゐた、舊は吹上の地にあつたのを天正年中に此所に移したとの傳説だ、其の李梅溪が作つた雄芝碑は、正面の社の右に寄た松の老樹の下に建られてゐる。



(水門神社 吹上神社)

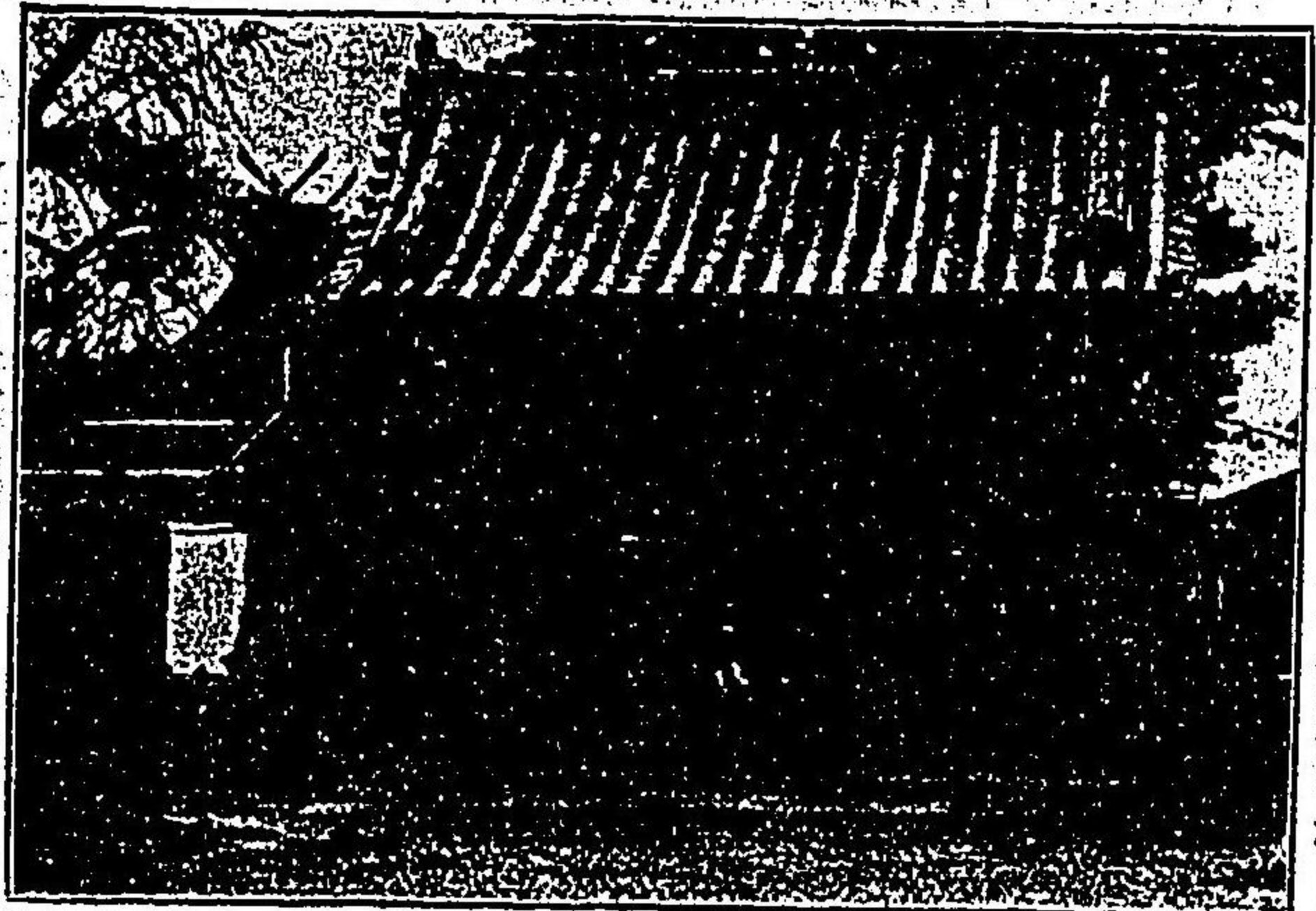
○朝涼神社 鷲森本願寺別院から北へ行た突當りの所にある、往昔は社邊に高大な檜樟樹があつて、梢に白鷺が常に群集するので、其故鷲森神社と號してゐたのだ、朝涼の社號は何の由から稱へたのか知れぬが、既に『延喜式』神名帳には名草郡朝涼神社とあるから、餘ほ古の神社には違ひあ

からう、祭神は國栖の祖神天石帆別命で、土佐國土佐郡の朝倉神社と同神だとのとだ、舊は社地も相應に廣かつたのが、永祿六年本願寺道場が其所に建立せれる時、社地はさんぐに切縮められ、剩へ夫の名木の櫛椽さへ無残に伐採されて、道場對面所の縁板に使はれて了つたさうだ、愚いふ次第だから神社の額取も思ひ遣られる事であつたらうが、元和から以來は國主紀州家の尊信も至つて厚かつた爲め、社殿もだんぐ形の如くに修造せられて、今では小さひながらも莊嚴を保つてゐるのほあり難ひ。

此他にも住吉神社が東住吉町に、多賀神社が、番町にあつて猶又小さな雜社が彼所此所にある。

第六 和歌山の佛刹寺院

大智寺遺址 吹上寺町の東の岡山の上にある、此寺は寛永九年玄恕上人の開基で建立されて、台徳院殿の靈屋、文昭有章傳信三院殿の合殿の靈屋もあり、國主紀州家から百石の寺領を寄附したつたが、維新後取潰されて、今は形の如き遺址が残つてゐるばかりだ、車坂稻荷神社が其邊にあつた。



(社 神 標 制)

つた。

報恩寺 吹上岡山の西の麓にあつて、寛永六年國主徳川頼宣卿の北之方瑤林院夫人が掩救されたにより、その遺骨を葬つた地だから、同十年に光貞卿の嫡子が幕府の允許を得て建立したのだ、その山號は白雲山で、その宗旨は固より法華宗一致派受不施派だ、又その寺格は法華の特立本山だ、當時境内は東西百三十二間餘、南北百八十一間餘あつて、本堂は表行十三間半に、奥行八間半あるのだ、正面に本尊佛と祖師の像を安置してある、是が即ち瑤林院夫人の靈牌堂だ、また本堂の東に紀州家姫方同方の位牌堂があり、その東に天真院夫人 光貞卿の北之方瑤林院夫人 伏見眞宮の靈牌堂があり、又別には台嶺院夫人 大臣兼輝公夫人 瑤林院夫人、寛徳院夫人、天真院夫人等の寶塔三十番神堂もあつた、さて又寺の什寶としては光貞、賴職、宗直三卿眞筆の書畫經卷、瑤林院夫人親筆の詩歌、天真院夫人の筆、寛徳院夫人の琵琶、その餘の書畫數幅、並に蜀江錦の七條袈裟などがあつたといふが、今も紛失せずにあるのだらう、然るに又近頃和歌浦養珠寺から養珠院殿の靈牌を移して、本堂の中に安置してあるといふ。

護念寺 増上山仙境院と號し寺町にある、境内周圍二百五十五間、始め宇治郷にあつて常福寺と號したのを、桑山宗榮法印在城の時に松屋町に移して、國城鬼門の鎮護をなし、今の寺號に改め、慶長六年また岡町に移り、而して寛永十七年に今の地に移つたのださうだ、本尊三尊の彌陀は宗榮法印の

納めたもので、二十五菩薩の畫幅は淡州三原で購求したもの、傳へて安産の曼陀羅だといふ、その餘清
深院殿親筆の墨瀟、唐畫の十六善神、蜀江錦の五條袈裟などは什寶で、また桑山法印の書翰なども
數通あつた、當寺は淨土宗西山派で、梶取村總持寺末だ。

蓮心寺 同く寺町にある、法華宗一統派で伊豆國玉澤妙法華經寺末だ、境内周圍二百五十七間
あつて、十一間に七間半の本堂があり、釋迦堂があり、祖師堂があり、三十番神堂などがあり、子院も

七坊あつた、慶長十四年養珠院殿の南龍公の御母駿府にあつて創建されたので、開祖は日産聖人で善曜山と號し
た、但しその善曜は院殿の祖父の法諡善久光曜に取り、寺號の蓮心はまた院殿の法諡蓮華院妙紹日心に
取たのださうだ、その後元和五年南龍公の命で和歌山に移つたのと、慶安元年院殿の逆修位牌を安置
したといふ、什寶に日蓮聖人の曼陀羅二年、同消息三幅、吉宗公親筆色紙、光貞卿親筆畫三幅、頼職卿
親筆色紙、三義院殿筆三十六歌仙があるといふ。

恩譽寺 附く火車記 この寺もまたある所は寺町だ、禪宗曹洞派遠州横須賀恩譽寺末で、元和五
年恩譽寺二世顯外和尚の開基である、時に寛文五年南龍公本山永平寺光韶禪師を請じて、法要を當寺に

説かしたのが、その時造營した書院は今も猶存しゐる、寺に火車の記を藏めてある、元和七年開山顯外
和尚の徒弟衣宗あるものが記したのだといふが、その大意を摘録すると、
開山顯外禪師坐坐之側、猶見常開睡、一夜禪師靜坐於丈室、忽外詳語相案而入、少頃猶亦來在側、師曰尊者人語者誰、座不願即通、

終失形影、月餘夜正四更、猶在枕頭語曰、恩意久不報、明日新葬必有變怪也、恐駭師矣、故來告焉、言訖始如夢覺、師益怪之、明日戶
探氏果告老死、葬期在夜、臨葬假大雨雷電、火車踐於空中、將葬死者去、舍葬者數十人、皆魂飛心消、雖散目喪、禪師神色不變、向
空中大喝一聲唱曰、來也既乘宿願、去又脫羂網、十方歸附一心洞然、以鐘打棺云、水流元入海、月夜不離天、唱畢舉念珠而合掌、時空
中有聲曰、師之德力不可犯、須臾收靈散、月光清明、觀者驚嘆、元和七年九月十一日也、戶探氏老母法隆聖利月大師、世人相傳以
爲談柄、竟逢公願、公曰、是可爲樂焉、乃改恩譽寺爲恩譽寺、其念珠要裝今猶傳以爲寺寶云

大恩寺 是恩譽寺の東にある、舊は栗林にあつたのだ、開山は源蓮社本譽といふのだ、その後
元和五年に玄恕上人あるもの遠州横須賀から来たから、そこで上人を請ふて住持として、之を中興開山

としたが、寛永九年上人は大智寺紀早山と號して寺町に轉住した、寺内に大須賀出羽守忠吉の石塔がある、
是は寛文五年横須賀黨の諸士が相談つて、舊君の爲めに建てたのだといふ、その事の銅板に鐫られたも
のが寺藏にあるのと、當寺は淨土宗鎮西派智恩院末だ。

大泉寺 是禪宗曹洞派甲州大泉寺末だ、寺地は大恩寺の南にある、慶長五年淺野家入國の時に
甲州大泉寺九世陽山あるもの從つて和歌山に来て、一寺を今の車坂の禪林寺の所に建立して、甲州のと

同じ寺號をつけて、淺野家の菩提寺をかつた、其故慶長十八年幸長の逝去した時、遺骸は一旦この寺に
葬つたのだ、が後寛永二十年に高野山に改葬したのと、悠ういふ因縁があつたから淺野家が蘇州へ
轉封にあつても、暫く二十一石六斗つつの寺領を賜つてゐたさうだ。

無量光寺 是淨土宗鎮西派大智寺末で、里宮山壽經院と號するのだ、寺地は大恩寺の東にあ

る、初め文化年間に徳本といつて、念佛専修の僧があつた、當國日高郡志賀莊の産で、數年の間國中を遍歴して京攝から江戸に至り、頻りと念佛を僧俗に勸めたから、世人は彼を念佛行者と稱し、また徳本上人と崇めて歸依するものが多くあつた、徳本寂滅した後、その徒弟本辨といふもの、國主の内命を得て一寺を建立すべしと志し、文政二年遂に公許を得て、神宮下郷中島村の廢院無量寺の號を譲り受けて新たに堂宇を此地に建立し、而して寺號に一字を加へて無量光寺といつた、一位老公治賢卿爲めに金若干を賜ひ、また無量光といふ三字を親筆した額を手へた、その餘の寄附品も多くあつたといふ、本辨既に志をかしたから、爾後ますます専念念佛に懈らなひで、徳本の遺志を繼ぐとに勤めた、仍て徳本を推して無量光寺の開基としたが、今でも念佛信者の參詣人が多ひとの事だ。

長覺寺 御小人町にある、淨土真宗東本願寺御坊自庵常輪番といふ格で、その山號を林黨と稱してゐる、慶長八年の建立で、元和五年淺野家が越前守に轉封する時、二代目慶清といふのは従つて彼國へ移つたが、長子玄清は留つて寺を相續して、寛永元年本山の御坊であつた、自庵常輪番といふのださうだ、寺家の舊説に據ると、當時は古名彌勒寺で、和歌浦街道の彌勒寺山にあつたのを、慶長年中に此地に移したとある。

西岸寺 御小人町にある、淨土宗鎮西派智恩院末の寺だ、本堂に向つて左手に安藤帶刀先生直次の嫡子彦四郎重治の墳墓がある、又その念持佛であつたといふ二寸ばかりの坐僧の彌陀佛が、上り

藤の定紋置た金梨子地の小厨子に藏めて寺の什寶にかつてゐる。

海善寺 道場町の西にある、淨土宗西山派樞材總持寺の末寺だ、元和三年正清夫人君で淺野長

長を葬つた事がある、封の時改葬す又李真榮の墓がある、真榮字は一陽齋で朝鮮李氏の後胤なりとの事だ、文政征韓の時、海善寺の住職西聖も亦た朝鮮人であつた、因縁から四右衛門に附して其榮を弟子にし本山總持寺に入れて勤學させてゐたのを、明公後が文才といつた亦た紀州藩の儒官であつた梅溪才學あつて書を善くし、又加納諸平の墓もある。

吹上寺 海善寺の南の丘地にある、禪宗臨濟派京都妙心寺の末寺だ、その開山は圭瑞和尚といつたが、南龍公の歸依僧であつたさうだ、寺内に正清夫人の茶毘の跡があつて、土を盛つて墳を築き、京保年中にあつてから碑石を建た。

正住寺 法華宗一教派京都妙覺寺末だ、寺地は東長町にある、その昔真言宗であつたが、中ごろ頽廢して、文明年中妙覺寺十三世眞如院日住聖人が再興したから、それで法華宗の寺にかつたのだ、寺内に蓮井象之助鬼勝といふ力人の石塔がある、又彼が平生佩びてゐた大小の刀がある、是れは先年天守閣で開いた寶物展覽會にも出陳されたが、大刀は身の長四尺五寸、莖が一尺五寸、小刀は三尺餘、大刀の銘には江州淺井郡之産蓮井象之助鬼勝行年二九、身長七尺強、臂力過人、又能相撲、无有與此敵者、頃年來在紀州、一時使良治鐵所自佩之刀、勢如長戟、鬼勝揮之、甚易如轉、不亦快乎、實可謂希世之巨刀、奇代之大男子者也、於南紀肥前守藤原鎮忠造、寛永丁丑十四年八月と鐫つてある。

□光明院 眞言宗高野山遍照光院末で本寺の兼帯地にあつてゐる、寺地は有田屋町にある、南龍公の薨葬の地だとの傳へだ、それで公の終焉の處に小堂を作つて、その靈牌を安置してあつたとの事だ、この堂前に曾ては古様か松樹があつたといふ、寺の本尊は正觀音で、大師堂なども亦たあつたのだ。

□覺樹院 東宇治にある、眞言宗高野山興山寺持の輪番所だ、その寺地は慶長年中國主淺野家から寄附したのだといふ、又その堂宇は應其上人大佛造營の功に依つて豊臣大關から賜つた殿堂を、其まま此地に移したとの傳へだ、本尊弘法大師の像は、大師四十二歳の時の自刻だとの傳へだ、今は高野寺といつてゐる。

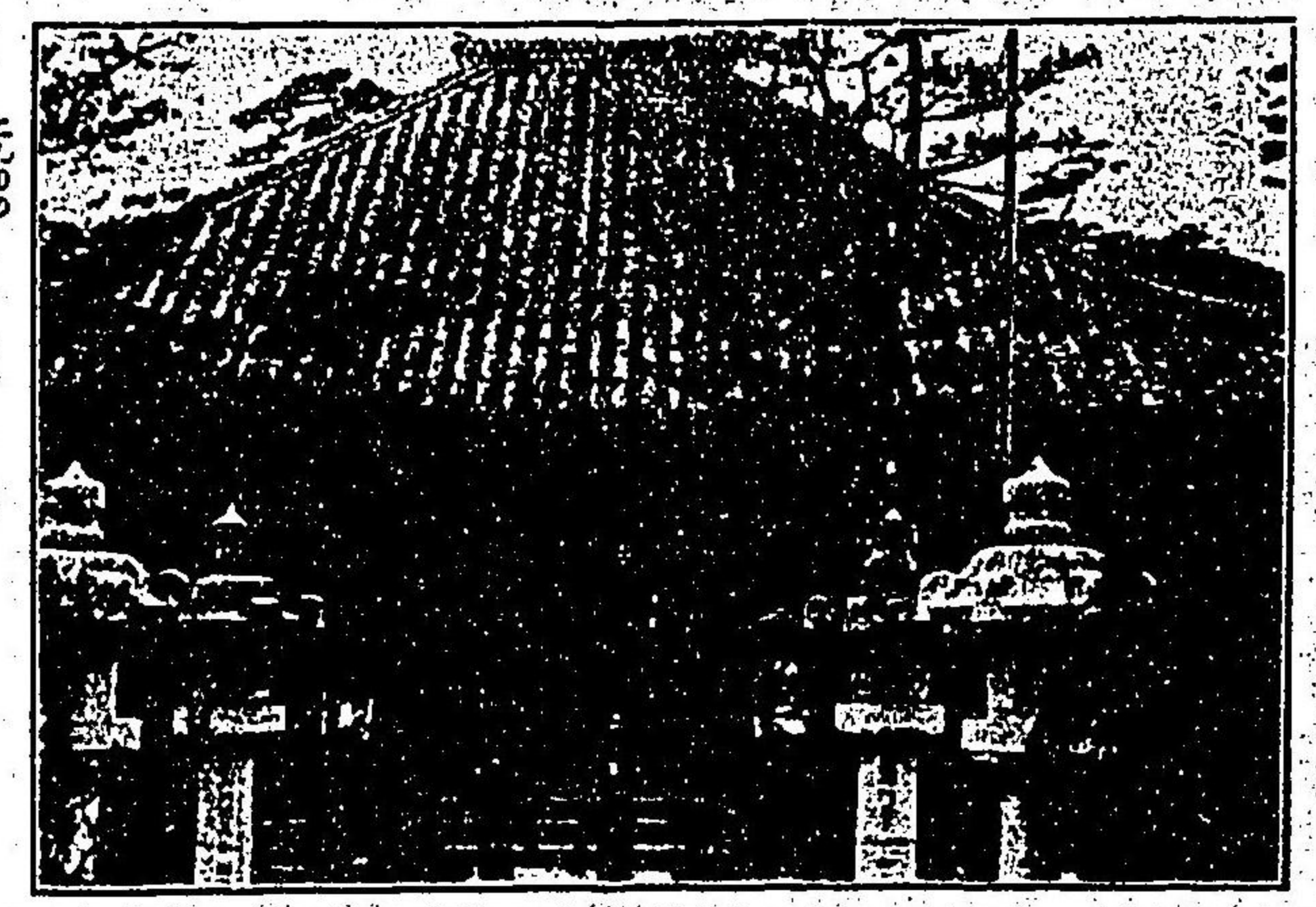


(寺野高)

□西本願寺別院 蘇森にある、仍て蘇森御坊といつてゐる、淨土眞宗京都西本願寺の輪番所だ、その傳に文明八年蓮如上人當國行化の時名草郡、冷水村喜六太夫あるもの、己が宅を捨て道場を建立す、今の冷水御坊はその舊跡、永正四年その堂を黒江村に移す、今の黒江御坊はその舊跡、天文十九年海部郡和歌浦彌勒寺山に移して、而して

永祿六年顯如上人又之れを蘇森に移した、今の對面所といふのが其だとの事だ。

□松生院 古義眞言宗彌勒寺末で、岡の谷にある、本尊は不動明王、智證大師の作だといふ、世之れを鼠突の不動と稱した、當寺初めは讃州山田郡殿之浦の洲崎にあつたのを、乾元元年和歌浦の廣邊に移し、因て廣邊寺と號して五百羅漢寺の前の邊にあつたのを、慶長五年淺野氏國主とあつて入國の時、岡の谷に移して寺領合して八十石を宛行ふた、それから南龍公淺野氏に代つて就封の後、寛永三年に岡の宮の別當寺に補せられた事がある、その寺傳に元暦二年佐藤嗣



(院生松)

□感應寺 法華宗一教派身延山久遠寺の末寺で、岡の車坂の南の禪林寺の南にある、南龍公の嫡室養林院殿

が、その加藤清正朝臣淨池院日乘本居士の十七回忌追善の爲めに建立したものだといふ。

○大立寺 淨土宗鎮西派智恩院末寺で、橋向町にある。寺内に吳五官任顯の墓碑がある。五官は

明國から歸化した人で、紀藩で群書治要を印刷する時、不足の銅活字を鑄造した男だ。群書治要の銅活字は加藤清正の文祿の征韓役

に分捕して来た。又た有徳院殿吉宗公の生母淨圓院巨勢氏の父母の墳墓もある。

○法蓮寺 淨土宗鎮西派小倉村光恩寺の末寺で、鈴丸町にある。伊藤蘭嶋の石碑のあるのは此寺だ。

○萬精院 眞言宗高野山丹生院の末寺で、是れも鈴丸町にある。寺内の梵鐘は、慶長十九年豊臣

秀頼が熊野本宮寺へ寄附したのだが、寛延二年に轉帳して此寺へ納つたのだ。銘がある。その文は邊

津すといへども字體猶は讀むべしと、『續風土記』に書てある。然るに『名所圖會』には、その梵鐘の事を

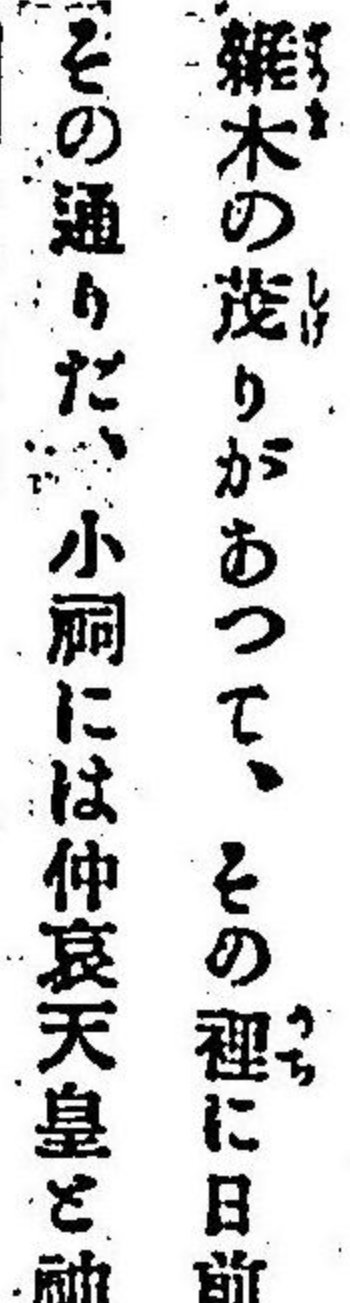
もとは小松内府重盛熊野本宮に寄附したものを、後にここに移したので、舊銘は慶長何年豊臣秀頼の命

によつて磨滅し、今の銘にほりかへたと書てあるが、是れは杜撰な書き方で、事實は『續風土記』に書てある通りだ。

第七 和歌山附近の名所舊蹟

○德勒津宮遺址 和歌山市の東北嘉家造から上方街道を十二三町も行くと、松並木の間に

二軒屋といふがある。其所を離れてから南の田圃道へ一町も入ると、約一畝歩ばかりあらうと思ふ程か



(德勒津宮遺址)

雜木の茂りがあつて、その裡に日前宮の末社ほど小祠がある。尤も頽敗してゐる。二坪餘りの拜殿も

その通りだ。小祠には仲哀天皇と神功皇后と應神天皇を合祀して、八幡宮と號してゐる。此の祠地が即

ち『書紀』仲哀天皇の御紀に「二年春三月祭丑朔丁卯、天皇巡狩南國於是留皇后及百寮、而從者三三卿大夫及宮人數百、而輕行

之至、絶伊國、居德勒津宮、是時熊襲叛之不朝貢、天皇於是將討熊襲國、則自德勒津發之、浮海幸穴門」と記されてある行宮の遺

址だと、仁井田南陽先生は考證してゐる。又德勒津は一に津と

と解津とも書て、上世は紀川下流の津渡であつたやうに説明も

してゐる。祠地へ南から朽腐して傾倒しうさ木の鳥居を潜つ

て入ると、右の方に一基の碑石が建てゐる。是れが即ち德勒津

宮遺址碑で、その碑面に刻まれた文は

德勒津宮遺址碑

書紀曰仲哀天皇二年、帝巡狩南國、至紀伊國、而居于德勒津宮、是時熊襲叛之不朝貢、帝討之、浮海而幸穴門、其所謂德勒

津宮遺址乃斯地是也、古者斯地、紀川之海口、而航海者必由此、所以有津名也、後河道南徙、民屋田

畝悉沒河底、去今六百年所、河道又徙而復故處、於是德勒津之故地、稍々累砂礫、鋤蓬壺、田邑既成、呼曰新德勒津、天正十三年豐太閤之攻太田城、引紀川灌之、築堤二里、當其道者、刮野拂地、物無孑遺、新邑復彈矣、亂平數年、逃亡浸聚、遂得復舊、今新在家部即是也、年紀悠遠、變遷亦如此、而行宮遺址、民猶識而無失、建祠以標其地、歲時祀之、豈非遺烈餘恩存民之深焉哉、嗚呼古者邊徼未靖、夷賊雜擾、嗚呼煽動、帝親遠征、蒙犯風務、以當矢石之危、將掃清海宇、爲萬世建太平也、豐功未成、竟崩於軍營之中、雖遐陬遠裔去夫漁堅之賤且愚、未嘗不哀號而呼天也、而況於六龍所駐奔走執役者乎、若子若孫、世々相傳、追慕於吠畝之中者、雖歷千祀又曷已焉、其遺蹤儼然以至於今、固宜矣、世移地易、渺乎滄溟變爲田驛村落、今之海口去此殆二里許、生於遷渝之後、長於無事之時者、唯觀其原田肥美、民物富庶也已、非斯遺蹤之存、誰知其然也哉、我公命建石、以表帝之遺蹤、臣好古謹奉命并記其土地變遷之由、以告後之人、

天保三年歲在壬辰夏五月

仁井田好古謹撰并書

といふのだ、が此の碑文を讀み、彼の小祠を見るもの、誰か感慨之れに續ぐに涕泣を以てせざるものあらんや、世の名教風化に志あるの士は、宜しく實地を踏査すべしと勸めて置く。

岸村行宮遺址碑 南海鐵道紀川驛から西北に當る榮谷村大字高芝小字帝が其所だ、碑文がある

岸村行宮遺址碑

稱徳天皇天平神護元年十月丙子、帝行幸於和歌浦、癸未車駕還、駐驛於斯地、史之所稱海部郡岸村行宮即是也、癸未實十月二十五日也、越翌日甲申、到和泉國日根郡深日行宮、今考車駕之所歷、自是西行十許町至梅原村、自村北折、谷行一里達和泉國孝子村、又谷行一里至深日村、此蓋紀古之通道也、神龜元年、聖武帝回蹕於和歌也、其馳道亦由于此、亞相公任卿之遊於和歌浦、其記中有踏笠衣之言、今梅原谷中有三笠池、此古名之存于今者、足以相證矣、世代轉化、官驛改而古道遂廢矣、荆棘榛莽、弗不可行者、亦安知古之通道哉、此地倚葛城山麓、西南臨平曠、一瞬殆三里、然以岸爲名者、古海岸之地也、海潮退縮、魚龍之窟化爲衍沃、民屋邑居、錯如置碁、求古之形勢、無復在焉者、獨行宮之遺蹤、民以帝呼之、千歲之久不失其處、豈非尊異護守之故哉、因此以求古、則陸海易地、鄉邑雖改、終古之跡、皆可尋究焉、好古奉命撰本藩風土記、此遺蹤之幸存、豈可不顯異之哉、乃鑄碑石、以標之、并記其由、

文化七年庚午冬十月

仁井田好古撰

右の通りだ、ところが今日その碑石があひ、變だと思つて會友小山漸氏に話した、すると小山氏はどう言つた、小字帝は僕の所有地だ、一通搜索して見ようと、而して早速歸村して、諸所隈々搜索して見たけれど、形は勿論影もあひとのどで、失望の色をしてのいひ條であつた、果して是れがあひとしたる

ら、廢藩置縣の頃のごくさ紛れに、百姓等が持て行て取路の橋にでもしたのか、爾でかくば寺院が俗家の庭の、履脱石にでもされてゐるのではあるまじか、何れにしても遺骸千萬、残念至極の事と聞かへした。

孝子越 榮谷村の西の中村の北から葛城を越して、泉州の中孝子や深日あごに往來する道だ、『續風土記』に走れば往昔紀州と泉州の往來の本街道で、神龜元年に聖武天皇が玉津島から還幸するのに此道から和泉國大鳥郡所石の行宮に至らせ玉ひ、天平神護元年に稱徳天皇の還幸の時にも、同く此道から和泉國日根郡深日の行宮に至らせ玉ふた、平安遷都の後には雄山の道路が開けたけれど、大納言公任卿の和歌浦遊覧には此道を踏られ、關白頼通公の和歌浦遊覧にも亦た此道を越したのだ、ただし公任卿はこれを笠木とこの家集に書き、頼通公は笠道山とこの記に記してゐるが、笠木も笠道もこの道の古名であらう、今ではこの谷を笠笠谷と呼んでゐるのは、古名が遺つてゐるのであらうとの考説を載てゐる。

形見浦 今の加太浦と呼んでゐるのが其所だ、海海また海海浦とも書た事があつて、日本で三ヶ所の沙干の所であつたといふと、古歌がある

玉葉集 その名の形見の浦の友ちとりあはぬ時の間もなし
新後拾遺 友千鳥をにをかたみの浦つたひ跡なき浪になきて行らん
拾遺集 秋の形見の浦ならんかはらぬいろを沖の月影
前關白太政大臣
前大納言公任
定家

加太驛家址

形見浦から五六町も東の山の麓が其所だといふ、この驛家の置かれた事は、『續紀』に文武天皇大寶二年春正月戊寅、始置紀伊國加太驛家と記され、又『延喜式』に「紀伊國驛馬、奴太八匹云云」とも、「凡諸國驛路邊樹菓樹、令性來人得休息」とも見へてゐる、但し此地に驛家を置たのは當時南海道の官道であつたからだ。

飽浦濱

また飽浦とばかりいふ、加太の淡島神社から西南につづひた岬だ、亦た古歌がある左に記す、

萬葉 網引爲海子哉見飽浦清荒磯見來吾 柿本人麿
新拾遺 紀の國の飽浦の濱の忘れ見ればわすれとしはふるこも 歌入しらす

太田城址

和歌山の真東で、大橋を渡つて真直を道を、日前宮の方へ折れずに行た所にある即ち太田村にあるのだ、今は和歌山の人島村氏の別荘にあつて、當時城内に生であつた二珠の老松が、庭前に高く風に嘯ひてゐるからすぐ分る、さてこの城は天正四年郷雄太田源三太夫あるものが築ひたとの傳へであるが、天正十二年小牧長湫合戦の時、太田の一黨は徳川方に應じ、根來寺の衆徒と謀じ合せて大坂城を攻取らうとしたので、豊臣太閤盛んに怒を發し、翌十三年三月大軍を起し、羽柴秀長を大將軍とし、三好秀次を副將軍として紀州に攻入り、先づ根來寺を燒滅ぼし、次で太田城に紀川の水を灌ぎかけ、四月朔日から二十四日まで、間斷なく攻めつづけたので、籠城の將士等今は防戦の術に盡きた所

から、總軍師の太田左近（或は總大將な）は、敵の一將蜂須賀家政に就き、城中重立のもの三十八名の死を以て士卒の命に代らんとを請ひ、秀長の允許狀并に蜂須賀前野兩將の起請文を得たから、そこで左近を始め三十八名、従ふもの三十五名、合せ七十三名（或は五十三名）自殺して、首級を敵に渡したから、残る士卒は城を開けて四方へ退散し、爰にその段落を告げたといふのが、この城に就ての物語の大略である。

■武内宿禰誕生井 日前宮から東南に當る松原村字柏原といふ所にある、柏原は上代に阿備柏原と呼んだ地で、口須佐から南に續いた小栗街道に當つてゐるが、武内定禰が此地で誕生した事を見るべきものは、『書紀』に「景行天皇三年春二月庚申朔、ト幸于紀伊國將祭祀群神祇、而不吉、乃車駕止之、遣屋主忍男武雄心命令祭、爰屋主忍男武心命詣之、居于阿備柏原、而祭祀神祇、仍住九年、則娶紀直遠祖菟道彦之女影媛、生武内宿禰」とあるのが即ち是れだ、又その誕生井といふのは、勿論宿禰が産湯の井であるが、享保年中國主紀伊家の命に依り、井傍に登を敷き、四圍に籬を施して、人の妄に入るとを禁制したが、獨り紀伊家で公子の誕生あるときは、この井水を汲んで、産湯に用ふるのが例であつたといふことだ。

第八 和歌山附近の神社佛寺

■日前國懸大神宮 宮前村にある、日前國懸とは兩大神の宮號で、鳥居を入て左に坐すのが日前大神の宮で、その御靈寶は日像御鏡だ、右に在るのが國懸大神の宮で、その御靈寶は日矛御鏡

だ、共に伊勢に坐す天照皇大神の前御靈體だと申し傳へてゐるこの兩大神は垂仁天皇の十六年に、毛見の瀨宮から遷し奉つたといふことだ、その宮地の名は名草萬代宮といつて、初めは伊太

祈曾大神の鎮坐した所だ、今は紀州唯一の官幣大社である。

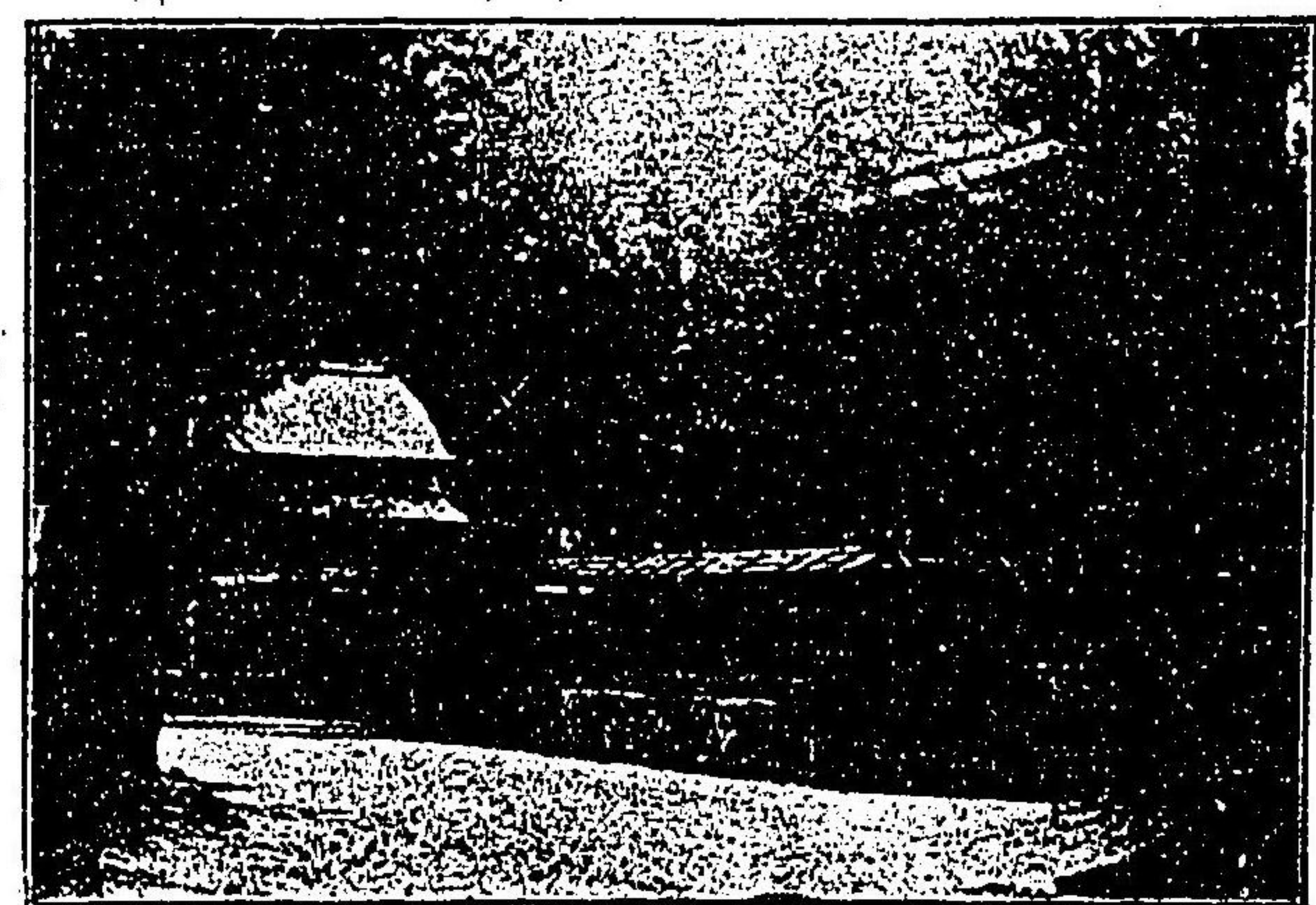
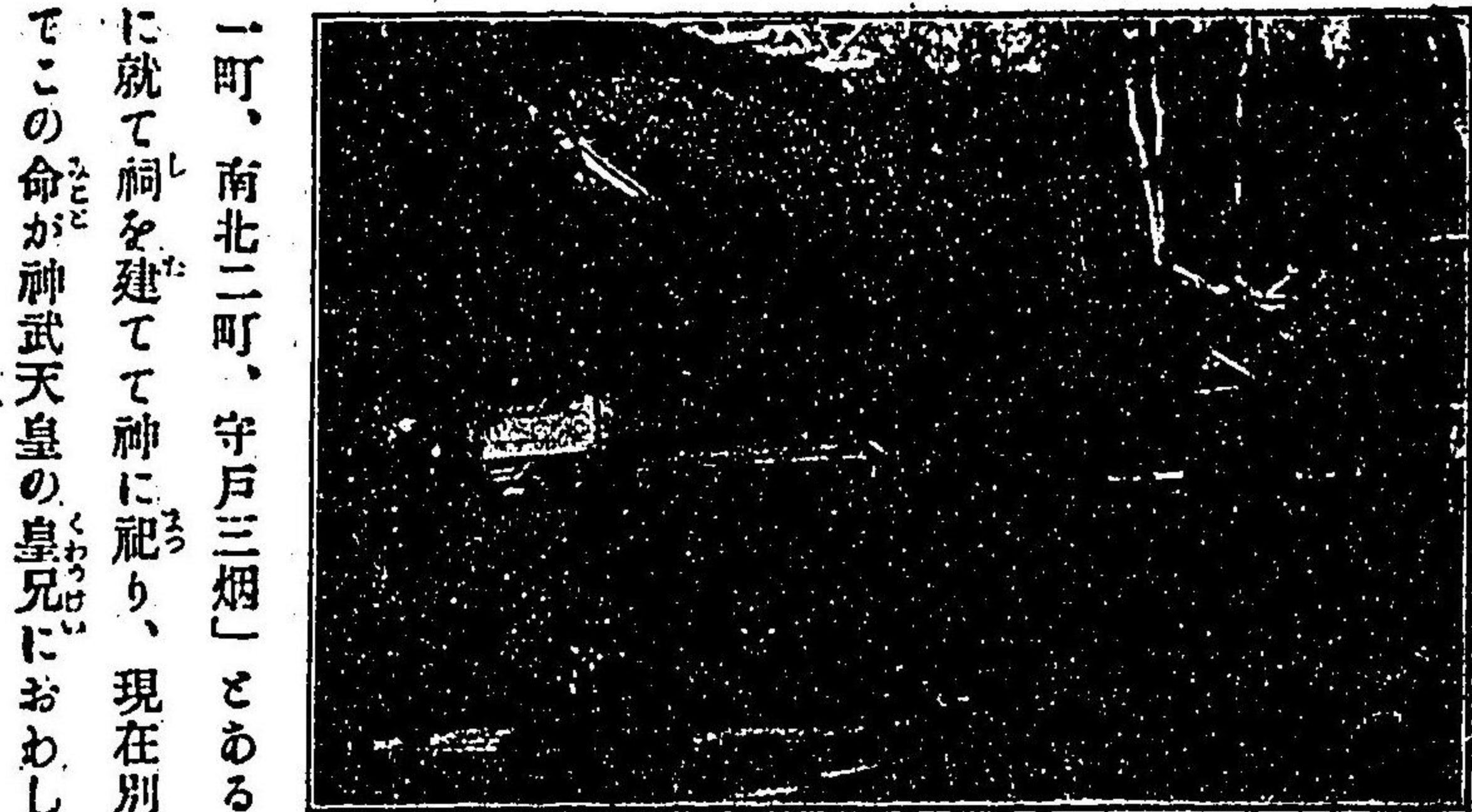
■竈山神社

和田村の竈山にある、彦五瀨命の御墓地で、

「延喜諸陵式」に、「竈

山墓、彦五瀨命、在紀

伊國名草郡、兆城東西



一町、南北二町、守戸三烟」とあるのが其だ、維新後該御墓地に就て祠を建てて神に祀り、現在別格官幣社と崇めてゐる、さでこの命が神武天皇の皇兄におわした事と、而してその神ざり

ませる時の事に就ては、『古事記』にも『書紀』にも臍氣ならず書てあつて、誰でも承知してゐる筈だから
今更ら事新らしげにいふにも及ぶまひ、左に古人の詩歌各一首を記して見さう。

五、潮命祠 川合孝衡

水門來弔白雲睡。傳道當年駐六師。龍負瑤舟感自壯。鶴舩華表事堪思。東征將略留文史。南土蘋蘩奉典祠。請見雄心靈未散。奔潮聲激漢寒波。

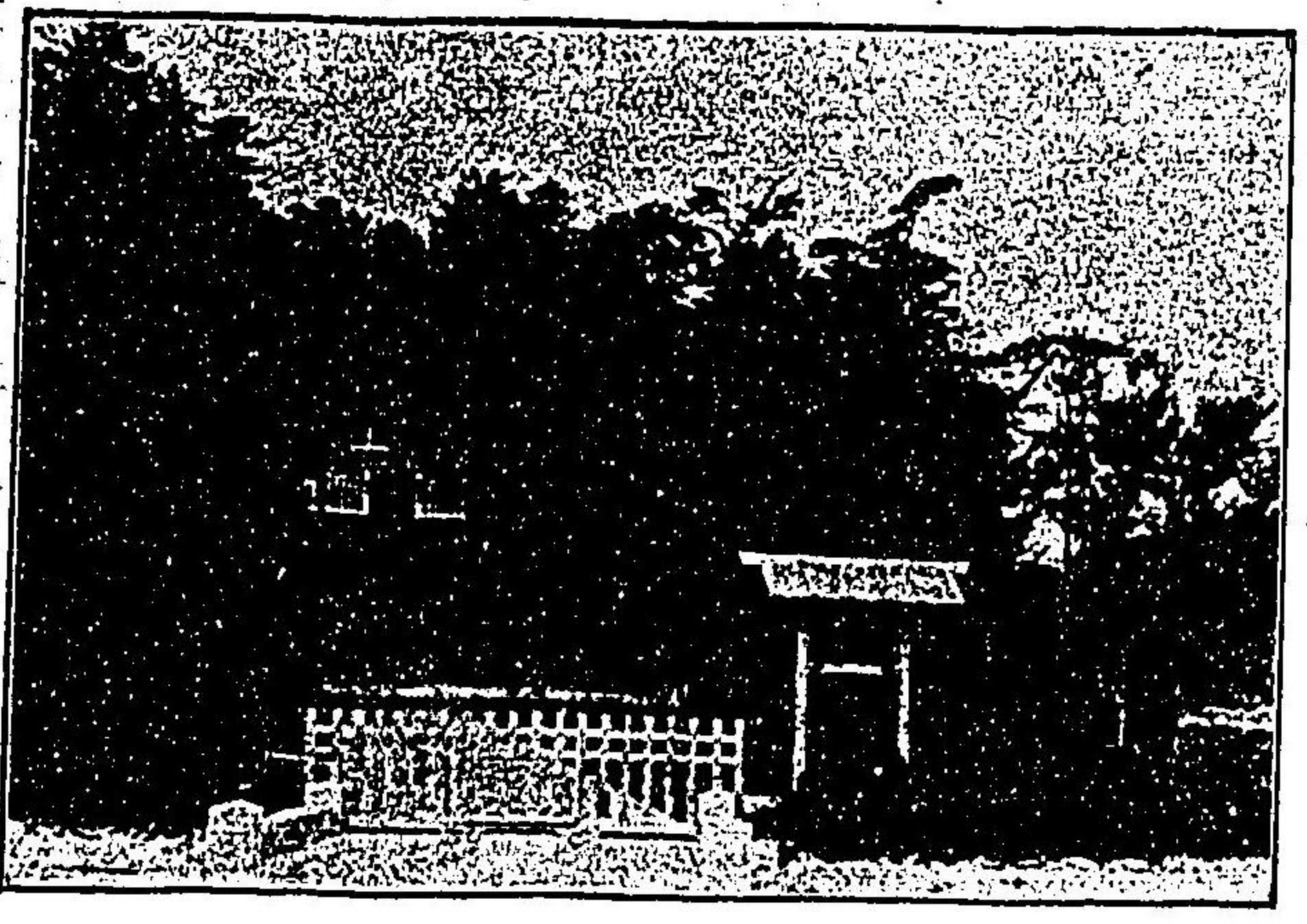
龜山の御墓に詣でて 本居宜長

をたけひの神代の御聲をもほへて

嵐はけしき龜山の松

□須佐神社 日前宮の所から東の口須佐村にある、祭神は須佐之男尊で、いつの頃か田郡から御分靈を遷しまつたといふ傳へた、但しその奉遷したのは餘ほど昔の事と見へて神領に須佐神戶が定められてゐた。

□伊太祈曾神社 山東の伊太祈曾村に鎮在して、今は國幣社の神だが、御名は大屋毘古神、又は有功之神とも稱し奉つた五十猛大神で、上世には日前宮



(社 神 山 龜)

の宮地の名草萬代宮に坐して、紀伊坐大神と稱へまをして、木國開闢の祖神におわしたのだ。

□相坂八幡宮 武内宿禰誕生地といふ松原村から北へ四町ばかりの相坂村にある、主たる祭神は應神天皇で、

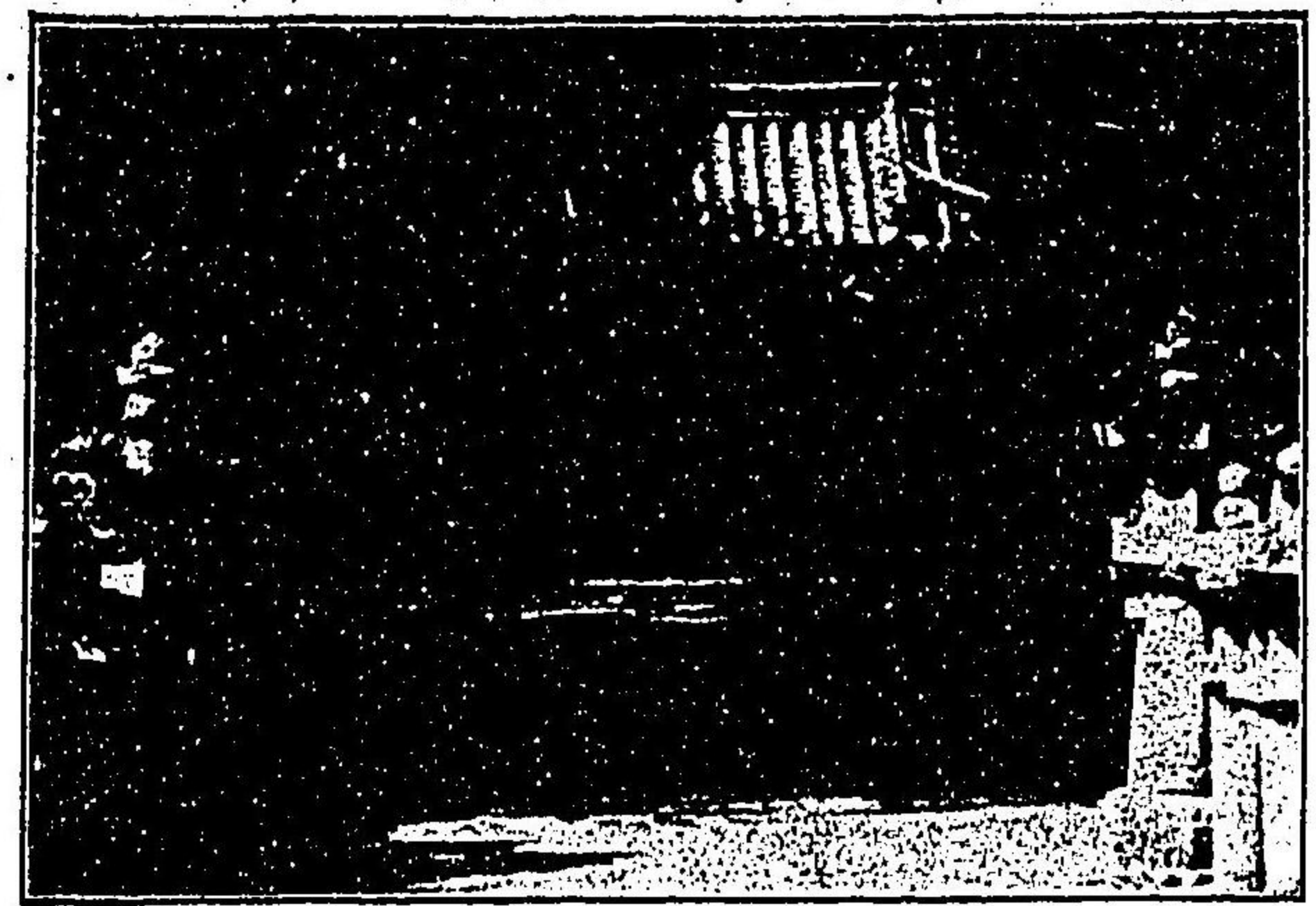
神功皇后と武内宿禰とが左右の合殿にあつてゐる、此所は神功皇后が三韓から御凱旋の時、日高郡衣奈から海路を御船に御して、上陸し玉ふた折の頓宮の跡だといふのだ。

□栗林八幡宮 和歌山の東北有本村字栗林にあり相傳ふその神體は鎌倉八幡宮の元の神體で、永享十一年鎌倉

管領足利持氏の亂に、別當僧之れを負ふて播州へ遁れ、尋で此地に移して鎮め奉つたものだと、寛文十二年南龍公の命で祠宇を壯麗にし、國城良位の守護神と崇めるとにあつた

といふ、社頭に慶安元祿の頃の年代を刻んだ石槩が數十基あるけれど、或は毀損し或は顛倒地に横はつて、殆んど荒廢の景狀が見える。

□蘭部神社 今の有功村大字蘭部志註蘭部村にある、祭神は伊太祈曾大神と同神で、『延喜式』名



(宮 祠 八 幡 栗)

草郡伊達神社とあるのが是れた、村民等は當社を一宮大明神と稱へてゐた、又當社並に志摩神社中野崎、和野村、和野村、和野村の三神を紀三所の神とも稱へてゐた、因に云ふ、靜火神社は龜山の東北雨霧山にある。

志摩神社 中野島村にある、「延喜式」に名草郡志摩神社とあるのが是れた、祭神は伊太祁曾神、大屋津姫神、爪津姫神の三神だといふ傳へた、是れも同じ紀三所の神ではあるが、神戶などの寄られてあつたのを見ると、當時朝廷の御扱は格別であつたと思はれる。

木本八幡宮 和歌山から加太への街道の木本村にある、祭神は應神天皇が正面で、左右に神功皇后と姫大神といふのが立てられてゐる、但し姫大神とは何の神だか分らぬ、またその鎮坐も何の年代だか詳かであひ、が古ひ由緒のあつた宮と見へて、鳥居に掲げた額面の文字は、小野道風の筆だといふ傳へがある。

加太淡島神社 加太浦の西南にある、祭神は四座で、正殿が少彦名命、相殿の左が月讀命に、右が大己貴命、その右方が氣長足姫命だ、社傳に仁徳天皇十七年に、苦が島から遷坐して、粟島大明神と稱へ奉つたとある、神寶に八坂瓊曲玉、神功皇后御鏡、同御太刀、綾巻物、神樂太鼓、大塔宮御兜、同御太刀などがあつたといつてゐる。

次に佛寺の歴史を有したものを二三个寺案内しよう。

了法寺 坂田村にある、日正山大雲院と號し、天台宗の海部郡和歌浦雲蓋院末寺で、初め丈六

止淨土寺、又は坂田寺とも號した、大同二年天台宗の僧行禪上人が開基したのでと寺傳にある、その後久しく衰頹の姿であつたのを、元和九年紀州家の國老三浦長門守平爲春、その先考正木左近太夫邦時の追福の爲めに復興し、是れからして三浦家の菩提寺にかつたとのとだ、南龍公の時同寺領に三十石を寄附されたといふ。

總持寺 梶取村にある、淨土宗西山派檀林七本寺の一で、寶徳二年明秀光雲上人の開基だ、而して後奈良、正親町兩天皇の勅願寺であつたといふ、元和元年同寺十九世長感上人二條城に伺候し、東照宮に謁した時、九个條目の朱印を賜ふたさうだ、末寺は紀泉兩國の中で八十八ヶ寺あつて、紀州で屈指の大寺で、羽柴淺野の兩氏から徳川氏に至るまで、代々の國主から手厚い保護があつたといふ。

和歌山と和歌浦前編 和歌山の卷 畢

和歌山と和歌浦後編 和歌浦の巻

紀州 養浩 居主人 著

第一 和歌浦街道

和歌浦とは和歌山舊城の南、吹上部に属する小松原通の盡頭から稱するにあつてゐる、さて其の小松原通の盡頭を出外れると高松にかかると、此所は今は海草郡古海關戸村の大字地にあつてゐて、和歌山水力電車の車庫や、其の電力變流所のある所だが、古ひ時代は此邊一帶に吹上の砂礫で、砂の堆積した所は岡にあり、露層した所は山にもあり、其上に幹長の高ひ松樹が幾十百株と多く生並んで、南北にかけて鬱蒼とした森林にあつてゐたから、其故で何時しか自然に高松といふ呼名が生れたといふ事だ、此所からして和歌浦入口までの街道の左右には、案内すべき所が數多ある、先づ夫の電車庫のある邊から少しばかり南へ歩むと、東手に廣瀬を更地がある、是は舊和歌山藩の時に、毎日寺漏生式ツンチール銃の彈藥一萬發づつを製造してゐた火藥製造所の跡である、其れから南へ續ひた地に曹洞宗の寺が二个所あつて、高松寺といひ丈六寺といつたが、今では一方は潰れて一方は破れてゐる、其れから更に南にあると、西手は小數の松樹の生てゐる土塘だが、東手は一圓に松林で、その中に一株珍奇露根の老松が立

てゐる、是が名高ひ高松の
根上り松

だ、古の時代には幾株もあつたやうに、『和歌浦物語』をどにも
書てあるが、今は只此の一株しか残つてゐるのみ、其他は朽て倒
れたものか、或は斧斤の厄に罹つて薪にでもされたのであらう
根上り松の前から南へ切らした道を下り詰めると、西手に一
棟の荒敗屋がある、舊は其店が二軒にあつてゐて、北の方を御
屋といひ、南の方を龜屋といつた、是が高松の二軒茶屋だ、何
時の頃からだか國主の紀州家から暖簾を給はつてゐて、毎年四
月十七日の和歌祭禮、又は君公が東照宮へ廟參の時に、其れを
軒先へかけるが例であつたさうだ、今ある一棟の建物は、まか
く古ひ、柱から鳴居鴨居も残らず丁斧削りて、何して見ても
三四百年前のものだ、又此家に銀質の永樂通寶錢がある、國主
の君公が式日に店前を通行する時、一文づつ賜はつたものださ
うだ、又此の茶屋の名物は衝餅だ、店先に看板がかけてゐる。



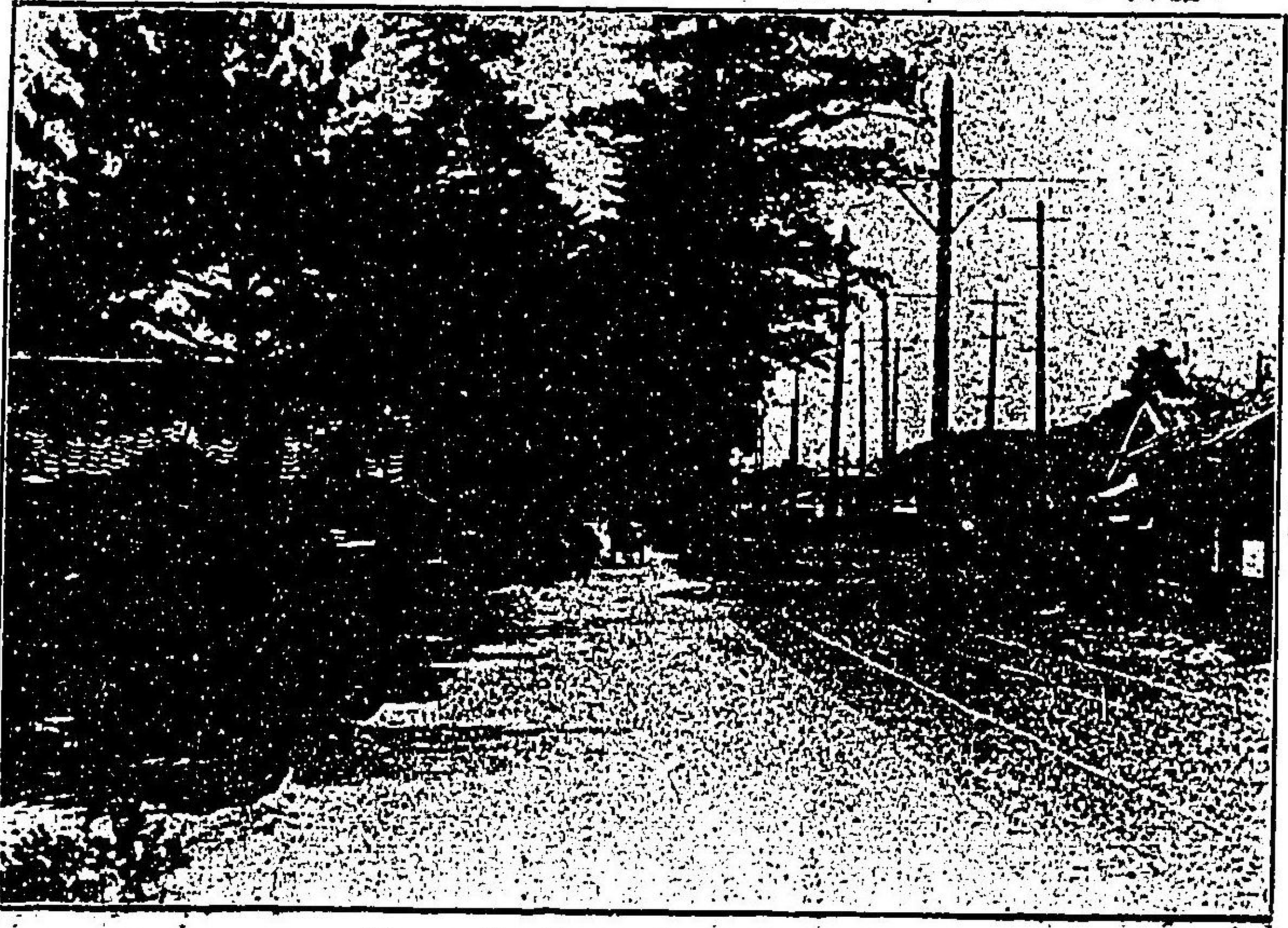
(松の根上り)

此所を離れると直ぐ八町驛の取つきにある、道の左右の並木松は徳川頼宣卿が命じて植さしたのだ、八
町驛の取つき邊から西へ二町ばかり隔つた所に、六七十年前まで小松の生た岡があつて、其前を南北へ
通じた細道があつた、是が今から八九十年前の頃の和歌浦街道で、公任卿の記に見へる成合の松原、頼
通公の記に見へる雜賀の松原であつたと、『續風土記』に考説がしてある、或は爾であつたらうと思ふ、
公任卿の記の抄略したものは、頼通公の記の抄略したものと同じに、右の『續風土記』に註脚を加へて
載てゐるから左に記して見せるとしよう、先づ其の公任卿の記の方は

曉に出でいとおもしろかある所々を見むとて、玉津島にまうでむてゐるに、道おぼつかあしをどい
ふ程に、神人たちうちたるもの神人は玉津島の祝部、社人の徒なるべし、先につかうまつらんとて出きたる、ありあひの松原
よりゆけば、なりあひの松原は高松と關戸村との間にあり、頼通公の記には雜賀の松原とある即是なり成合の名は此の松原の東に
の打寄て中に一條の松原道をして和歌浦の方和歌浦の古道は成合の松原にに通ずるを以て成合の松原といへるなるべし、こも草生しげり、澤に駒のあるもおかしう、和歌浦の古道は成合の松原より南は雜賀山と船頭山との間を経て和歌浦に入りしなり今船頭山の北に藤田といふ田地あり其處草生茂りといふは即ち此所なるべし今に至て古き頃の遺りたるも床し

此の以下の文は更に玉津島の所で記すとす、次に頼通公の記の方は
十八日癸未月天晴、卯刻供御膳、所々廻饗了、令立御宿給之間、召國司定家賜御馬一匹、方棹華船、
迄于木御川尻、令下給、送にて上陸せられたるべし、是行路之便爲御覽吹上嶺和歌浦也、巳刻之終着御湊
口宇治より渡村の邊なるべし、御馬并人々馬共遅、將來間光景欲傾、極興難抑、仍先召國司倍從、近邊所在之

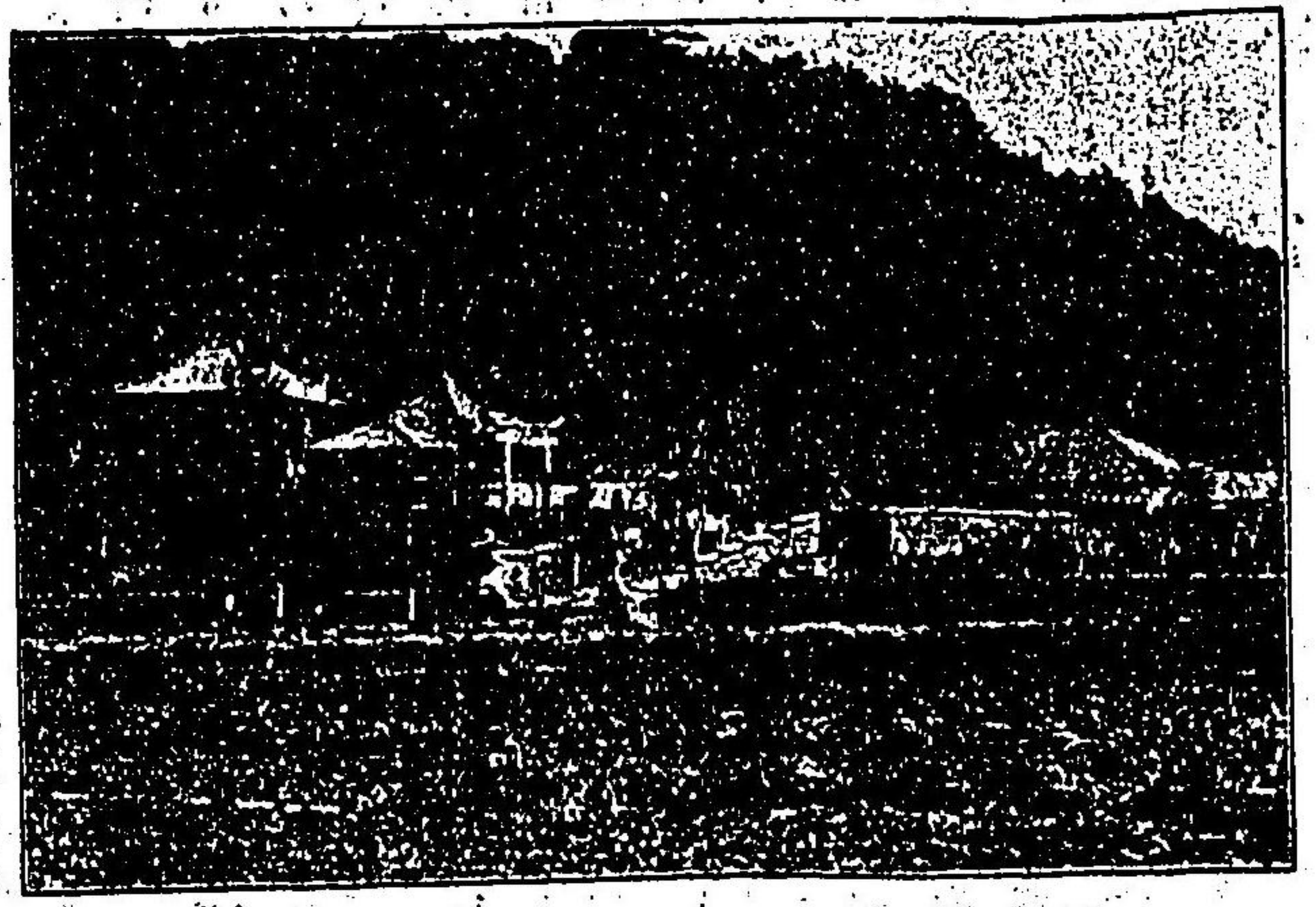
馬各宛騎用、先ト覽吹上瀨、朱紫比補尊卑爭行、
 于時蒼海渺茫晴砂崔嵬、如登天山似向葱嶺、
 瀨村、關戸村のあたりを通ふらせ玉ふなり、此邊は一面の砂瀨にて
 高きは山の如く卑きは谷の如くなりし故、加登天山似向葱嶺といへ
 り夫より高松のわたりへ出て松原へかかるなり、これは公任卿の肥に
 なりあひの松原とあるハラツク
 ものを是れなりとす 頃之經雜賀松原、令向和歌浦給
 ありあひの松原といひ、又は雜賀の松原ともいふ松原
 が八九百年も前の昔に、此邊にあつたといふ事が此の
 兩の記の文を見ても推想されるであらう。
 さて右の八町畷にかかつてから、東手をより向て見る
 と、田圃を隔つて山がある、餘り高くはあひ、
 □愛宕山、
 といふのだ、維新後まで愛宕大権現が祀つてあつた所
 だ、別當圓珠院の寺傳に、元和八年壬戌の歲南龍公が
 親から此山を見立てて、京都の愛宕山から勧請したと
 の事である、此の山上は頗る眺望の佳所であつて、



(和歌浦街八町畷取)

四

(山 宕 愛)



遠くは四國の諸山、近くは藤白の御坂、さては名草山から三萬濱に揚る燒鹽の煙も見へ渡れば、眼下に
 は吹上の濱や小江の浦、沖に浮べる釣小舟、汀に出て貝拾ふ獲の子等の姿までも一目に見へる、さて
 だ、本願寺御坊も永祿六年和歌山の登森に移つた、今の登森御坊が其れだ、然る處此の彌勒寺は、雜賀

其の正面の參詣道の角に碑石が建ててゐて、其所から半町ばかり
 も行くと同じ側に、狹口岩といふ小さな岩窟がある、狹口を
 開けた形に似てゐるから名づけたのだらう、けれど窟内には乞
 食でも寝起すのかして、敗れ葉や破れ藁や腐れ藁などが散ら
 つてゐるから、見るに得堪へぬ。
 愛宕山の峰つづきに、一層高く見へるのが

□彌勒寺山

だ、此山は一に御坊山ともいつてゐる、そこで其の彌勒寺山と
 いふ所由は、中古の昔に林麓山憶西院彌勒寺といふ天台宗の寺
 院があつたからで、又其の御坊山といふ所由は、天文から永祿
 の頃にかけて、本願寺の御坊があつたからだ、因に云ふ、彌勒
 寺は天文の初め和歌山の湊に移つた、今の片原の超覺寺が其れ

五

合戦で頗る名高くあつた、『和歌浦物語』や『續風土記』や『名所圖會』などに、其の合戦の状況が書てあるから、概ましの所を挿柄んで左に記さう

維賀の衆中鈴木孫市を大将として大坂へ御味方まをし、城を持たなければ、信長公大に怒り、とかく大坂の城の堅固なるは、維賀より人数を籠らせ、弓鐵砲の上手をいくらともなく補綴する故なり、先づ維賀を討果せとて、天正五年二月下旬、維賀三城、根來杉之坊を案内者として、秋田城介信忠卿、北島中将信雄卿、神戶三七信孝を大将として兵數萬騎を引率して、河内國若江まで出陣なり、維賀の者ども怒を聞て彌勒寺山の要害に據り、此所を本陣と定め、その他東澤寺山、宇須山、玉津嶋山、甲嶋、彌勒寺山等に營を築き、又小維賀の上下、名草の渡、玉津嶋邊の川中に、いくらともなく桶屋の類を埋めて、人馬の足ゆかざるやうに備をなし、さて曰く此度信長の勢數萬騎國へ發向の本、維賀の運命此時にあり、人力にては叶ふべからずとて、關戸明神(矢の宮)へ祈禱をかけ、男女老少をばらばす、山上山下にみらくたり、寄手は數萬騎なれども、騎馬にて自由ならず、味方はかち立なれば、打越と彌勒寺山と陰陽の高岸にありて、弓鐵砲を放つほどに、先陣に立たる堀久太郎一支部もせずして敗北したり、維賀勢さし詰めひき詰めさんぐに射て、手の下には馬を渡さんとするれば、川中に畑みおける籠桶の中へ乗込ん、人馬とも湖にひたりた。よひければ、信長勢はれた。事にあらずとて、皆悉く引退きければ、維賀勢陣内取つくりて、是れ備へに關戸明神の佛法を守護し、維賀を救ひ玉ふ故なりと、餘りに悦び、刀懸逆を先にして、弓鐵砲を水取にまわし、指物さしかざして、關戸明神にてよろこび踊りぬ。その後維賀運をひらきぬるためしなればとて、彌勒寺山から西へ二町ばかりに

□矢の宮

といふ神社がある、祭神は神魂命の孫鴨角見命であつて、夫の維賀合戦の記に關戸明神といふのは此の神社の事だ、但し之れを關戸明神と號するのは、其地が關戸村であるからだ。

のさうだ、原來

□五百羅漢寺

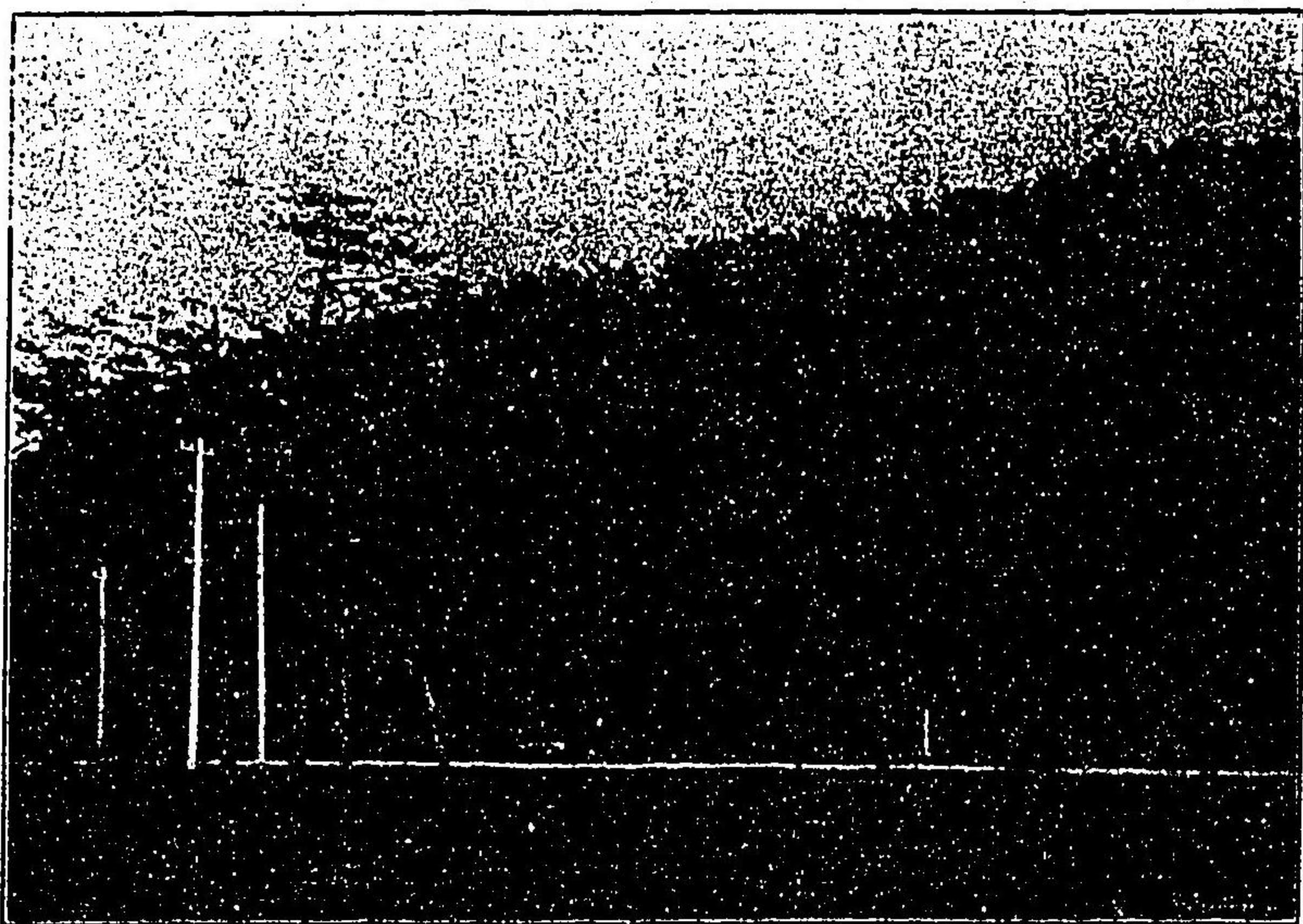
といふのは、初めは今福關戸の兩村塚にあつた黄泉宗の寺で、號を華嚴といつた其の開山は永平寺第四十五世真空妙總禪師であつたといふが、寶曆十一年曹洞宗に改めて今の地に移し、寺號も亦改めて、而して明和三年に始めて羅漢堂を建立し、本尊を釋迦如來として、爰に五百の阿羅漢を安置したので羅漢寺の門前は、

矢の宮から街道へ戻ると又一座の山の前へ出る、其所に石の鳥居がある、傍らに御手洗水の様か小池があつて、水中に鑿ひ形した平目の岩がある、是れを龜遊岩と名づけてゐる、さて鳥居を潜つて石礎を登つた上が

□秋葉山

だ、秋葉三尺坊權現が祀つてある、寛政五年癸丑の歲に遠州から勧請してその麓にある五百羅漢寺の守護神に頼んであつた

(彌勒寺山一名御坊山)



八
蘆邊寺の遺址だ、蘆邊寺の事は和歌山岡谷松生院の條で説明した、又鶴立島といふがあつたが、今は縣立園藝試驗場の中に葬られてゐる、又其の地續に兜崎といふ地、宗祇が松をといふ松の生てゐた所もあるがわざわざ往て見るにも及ばぬ。

さて此の羅漢寺の少し南が八町畷の盡頭で、其の出外れた所が和歌浦の入口にあるのだ、其邊の地を昔は和田浦といつた、道が南東に分岐してゐる、南の方は裏道で、東の方が表道だ、電車軌道は此所から津屋まで敷かれてゐる、總ては紀三井寺から津屋の西に和歌橋といふ小橋が架つてゐる、是れを渡ると中番に出る、即ち和歌の本村で東照宮や南龍神社、菅公廟へは此道から往くのだ、けれど覽古の土や初賞の客は、尤も電車の便もあるから、其れに依て直ぐ津屋へ往くべしだ、津屋は玉津島の神の鎮坐す地で、即ち和歌浦といふ名稱の因で以て生れた所だ、いでや是れが願を改めて、和歌浦の古今から名所舊蹟、神社佛閣などの事を説明しよう。

第二 和歌浦の位置と名稱の起因

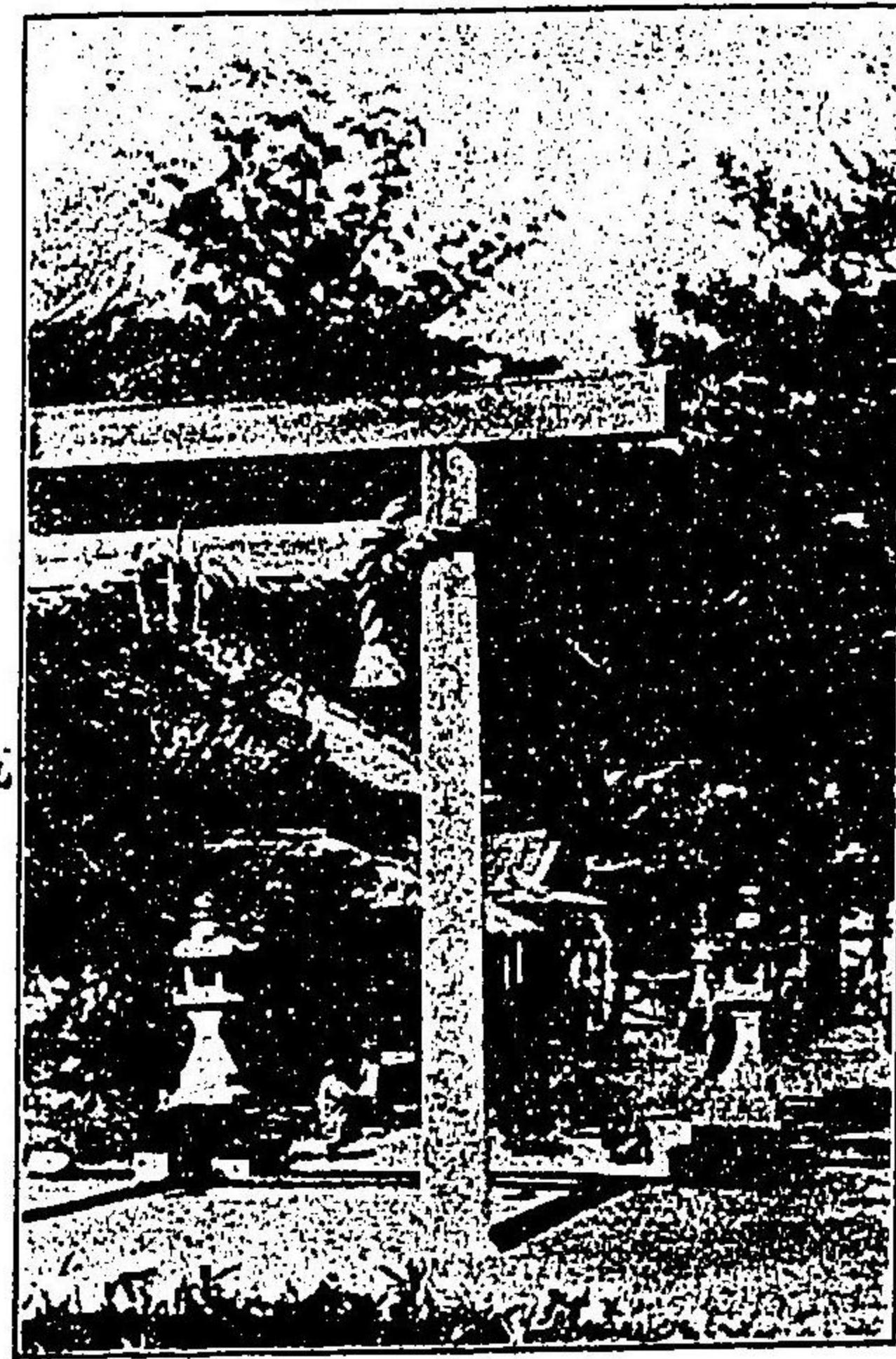
和歌浦は維新以前江戸幕府の時代までは、その御三家と稱された紀州家、即ち南紀徳川氏の領分の土地で、紀伊國海部郡今は名草郡と并合さ雑賀莊今は廢されてに屬して、その時代の和歌山府城から南のかた和歌街道をゆく一里ばかりなら二哩ほど北は田圃、西は山嶽、南東は海灣に面して、一部落をなした一區域の土地が其所だ、今は和歌浦町といふ中番、浦、市町、津屋、出島などの各字は、みか民家漁戶肆膠刺烹店等の

の立並んだ所である。

さてこの地、上古の大ひかしはわかにはまと呼んでゐたその所由は後におひく説明する、その後は是れを文字に顯はすやうになつては、稚濱とも又は弱濱とも書た、勿論假字であつて、その因で生れた所は、玉津島に鎮坐せる稚日女大神の御名から出たのだらうと、「紀伊續風土記」にも「和歌浦物語」にも考説がしてゐるがその義は尤に聞へる、さもあるべき事と思はれる、但しその地名を文字に稚濱と書たのは、古代の歴史には見へぬやうだが、弱濱と書たのは『續日本紀』聖武天皇の御紀に出てゐる、又改めて明光浦と稱する事も同御紀に出てゐる、何れも天皇の詔語の中に見えてゐるのだ、詳細の所由は後の玉津島の條で記さうと思ふ。

然るに之れと同時に一方では又わかのうらと呼び、文字には若浦と書てゐる、その人は田子浦の富士の歌で名高ひ山都宿禰赤人で、「萬葉集」六に作歌が載せてゐる。

若浦爾鹽滿來者滴乎無美葉邊指天多頭鳴渡と、わかのうらを文字に若浦と書たとは亦人ばかりではあゝ、同集の七と十二に作者不知で



宮の穴

若浦爾白浪立而與風寒暮者山跡之所思
衣手之眞若之浦之愛子地間時無吾戀銀
若乃浦爾袖左倍沾而忘負拾跡妹者不所忘爾

といふ三首の歌にもある、さればこの地を萬葉時代の國風の稱へてはわかのうらといひ、さうして文字には若浦と書くのが普通であつたと思はなければならぬ。

わかのうらといふ地の名を、文字で若浦と書くとは右の萬葉の證歌で解るとして、さてその和歌浦とは何の時代から書き始めたらうか、『詞花』『新古今』『新勅撰』『玉葉』等の諸歌集に

和歌の浦といふにてしりぬ……………

和歌の浦や沖津磯會に……………

和歌の浦や蘆邊の田鶴……………

和歌の浦や昔にかへる波……………

和歌の浦に年經て住し蘆田鶴……………

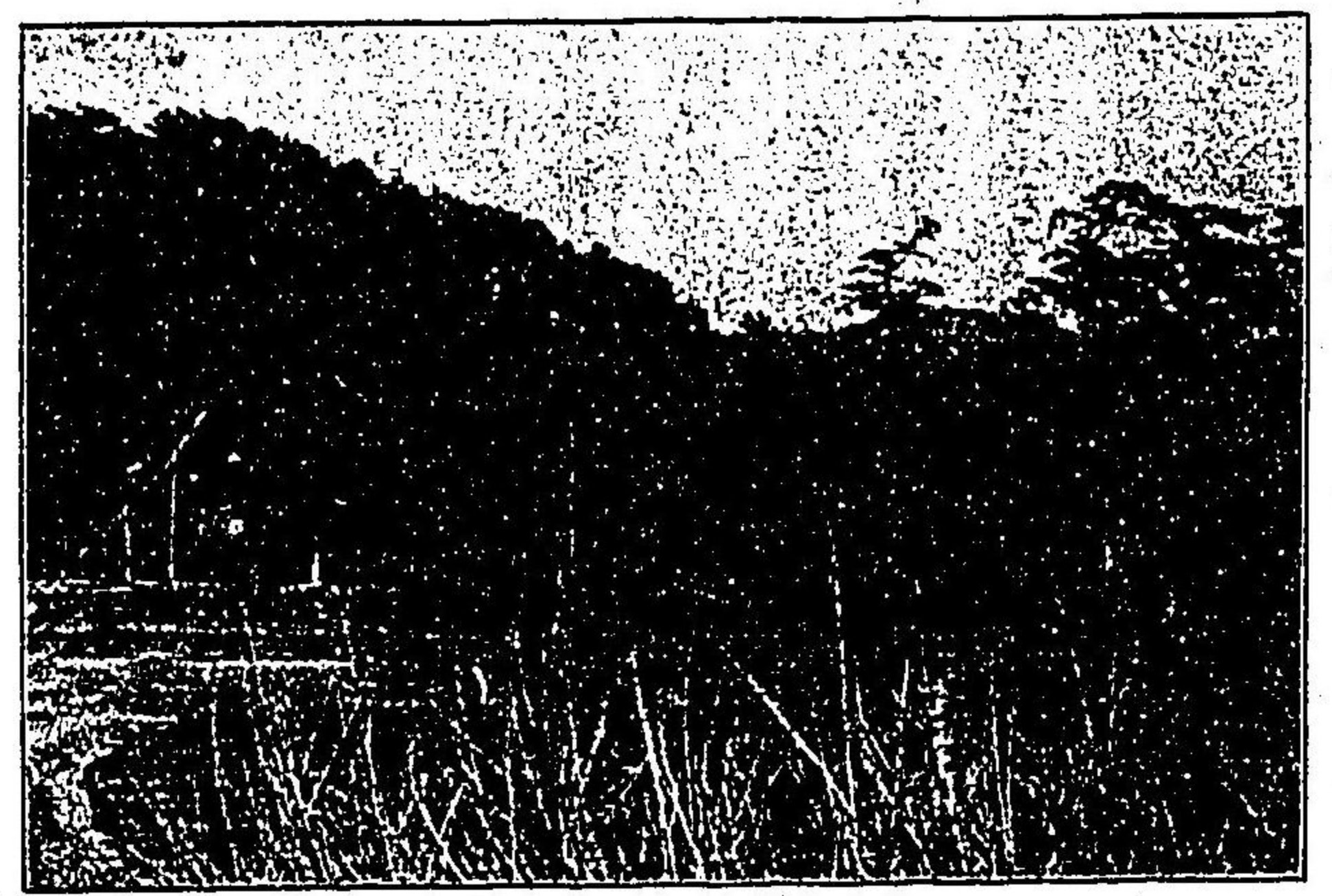
あごと読み出した歌の句に、みかその文字が書てあるから、萬葉時代を除はご經て、古今集時代よりもかは後の事からだと思なければならぬ、林羅山は自己の詩集の小序に『續紀』を引て、弱浦一の名は明光浦、後人弱を改めて若と曰ひ、又倭歌と曰ふと書てゐるが、弱の字を若の字に書き改めた事を後人の爲

る所をかして、さうして明光浦よりも後だと見たのは誤である、何故ならば聖武天皇が此浦の風景絶勝
ものを御賞美で、弱濱の名を改めて明光浦とあすと詔り玉ふたのも、山部宿禰赤人が作つた歌に若浦と
書たのも彼此れ同じ神龜元年十
月の事であるからだ、要するに
わかのうらは、初めはわかはま
といつて、文字には雅濱とも弱
濱とも書てゐたのが、改めて淡
音で明光浦と書き、同時に國風
詞の字で若浦と書き、その後更
に和歌浦と書たのが、數百年を
經た今日までも普通に用ひらる
る事にあつたのだ。

(寺 漢 羅 百 五)

第三 古代の和歌浦

古代といつても、諸册二尊の神
かのうらの事を記さうと思ふのだ、『續風土記』に和歌浦古圖といふのが挿入してある、固より想像して



代の事ではあひ、さうして又
神武天皇の御時代ごろの事で
もあひ、歴史の時代からいふ
と中古で、紀年の曆數から算
へると一千百九十年前、即ち
神龜元年に聖武天皇が玉津島
へ御遊幸で、浦の風光の絶勝
絶景あのを御賞美の餘り、弱
濱の名を改めて明光浦とあす
との詔を下し玉ひ、又その時
供奉に侍つた山部赤人が夫の
淡乎無美の歌を作つた頃のわ

作つたものではあるが、さり迎全く據のかひ圖ではあひ、古今地形地勢に變遷のあつた跡から考へるといかにも恣あるべしだと推測される所があるから、宜しく此圖に就て説明を試みやう、但し夫の和歌浦古圖は、隨寫して石版で摺上げたものが、本書にもまた挿入してあるから、よむ人は是をもよく看るべしだ。

さて先づ右の和歌浦古圖を披き、方角を正ふして見ると、その南の海灣に面した所を南濱といつて、今の市町中番の地先から、東照廟南龍社の前を通じ、菅公廟の前の邊まで一帯に、灣月形をなした波打際で、その背後に東西に長ひ松林がある、是れは歌にも讀まれた和歌松原である、さうして天平神護元年十月十九日、稱徳天皇の御し玉ふた南濱の望海樓のあつた所は、市町から中番の地先の邊だ、併しその跡は今日分明に指定はし難ひ、又是より先きの神龜元年十月、聖武天皇の玉津島御遊幸の時に、赤人が漁乎無美の歌を作つた所も、また中番の地先の邊であつたのとだ、その後大納言公任卿の記に記すに、「みどりの松こころさ中より白浪のたつも見とはさる」とあるは、和歌松原ごしに南濱の入海を見たるをいふありと、「續風土記」に註し、また關白賴通公の記に記すに、「翠松傾蓋白浪洗蹄」とあるも、和歌浦の海邊界の松原を経て濱邊に出でたるをいふありと同記に註してある、凡そ四方交通のまだ十分に開けぬ往昔、寧樂や平安のせせこましい山の中から、初めてわかのうらに遊ぶ人は、先づ此の南濱の風景を見ればかりでも、恐らくは神往き魂飛ぶの味があつたであらう、況てや歩を移し玉津島山に登臨して

その浦の全幅の風景を一顧阿の間に撮めて、以て恣に之を眺望するに於てをやだ。

ともく玉津島山といふは、此浦の東の海灣に臨んで、後世からはおぼろ山、又はてんぐ山をよご呼名をつけ、徒らに土人俗客の遊觀場としてゐたやうだが、實は聖武天皇が初めて御登臨で、「山に登り海を望む、此の間最も好し、遠行を勞せずして、以て遊覽するに足る」と詔らせ玉ふた、世に希れあるべき聖蹟である、然らば今此の山に登つて、直ちに前面を望めば、阿の山淡の島が、紀海を隔つて雲煙の如くに横はり、右を阿れば屏障の如くに列る雜賀の山が、翠影を清く海面に映させながら、雜賀崎に走つて岬角をなし、さうして海に入て快く潮水に浴してゐる、實際此邊遠見、更に左を顧れば、彼方に奇嶂怪嶺の連續重疊した長嶺が高野山の方から、遠きは淡く近きは濃き形を分つて、大崎の岬角まで脈を引てるれば、此方に名草山が青松の髪を被り、名草濱毛見濱が白砂の帯を結び、さうして琴浦の巖角が小刻みに走り寄り女波と細語してゐるを、是れが此れ玉津島山から眺望する全幅の風景の勝槩である。

悠やうであるからその名聲は夙に海内に鳴響き、都鄙遠近に傳稱されて、前にもいふ通り一千二百年ほどの往昔から、聖武天皇の御遊幸も、稱徳天皇の御遊幸も、猶又桓武天皇の御遊幸もあつて、その聖蹟を玉津島に遺され、その後には大納言公任や、關白賴通かごの名公鉅卿、その他の縉紳家諸名流の人士も、おの／＼駒を歩ませ杖を曳きて、或は道の記を物し詩歌を吟詠しながら、飽までもこの風を觀景を

攬て樂を極めるとが、今日に至ても猶その跡を絶さぬのである。左に關白賴通公の和歌浦遊記の一節を記さう、但しその前半は前の高松の所で記して置たから、是れはその後半だと知るべしだ。

翠松傾蓋、白浪洗蹄、これら歌浦に至りて海邊の界にある松原を歴て演進に出らるゝなり、翠松傾蓋、白浪洗蹄、每見風流之飽
地勢、彌感土宜之莫天然、猶指一獻吹上之濱、和歌之浦、雖山邊之說、柿本之詞、合此地亦難矣、加
之按轡扣鞍、爭拾色色貝之輩、已不別老若、各任志之及、乘輿之餘、殆忘日暮、津嶋のほとりへ廻り給ひしな
るべしれどもは略していはざるべし公任卿は玉津嶋の方へ先に行きて夫より濱邊
のあたへまわり給ふ、因て玉津嶋の事を委く述へ前濱のほとりの事を略せるなり、未刻、還御御船、暫殿供御湯濱、國司
獻檜破子荷、皆以色紙付標申刻、於木濱御御馬、自笠道山令通給、御船とは紀川を渡り給ふなり木濱は今の榮谷あたり
山の麓にて海つづきなればこれより梅原に至り笠道山より令通給とは眞志榮谷は萬城
谷より和泉國孝子に輪むられしなりこれ古の本道也山中乘燭、海濱伴月、亥刻之終着、御日根御宿、國司御儲如例
次に大納言公任卿の玉津島詣の記を記さう、但し是れは前かた玉津島の所で記すやうに斷つて置たが、
問題を説明する順序で此處に載るとした。

みどりの松こぐらさ中より、白浪のたつも見とほさる、これは始めて和歌村に入りて見る所の景色をいへり松の松小崎
松の多く生ひ並べなるなり今も海濱の地は多く然り其松の木の間より海面
の白浪の見ゆる状をいへり中世の人の歌に和歌の松原といふは是れなりやうく御社にいたる程に、入江のほとりに蟹
の家がすかにて、舟ごもつおさあみごもほしおさしたるも、都にかはりておかし、和歌村に入りては濱邊には
て玉津嶋明神の方にまはりしなり入江なり、
のほとりとは直ちに津屋の事をいふ也御社にまうてつきて御てぐら率り、所々めぐりて見れば、いひやらんか
たなくおもしろくおかしきを思ふ人に見せぬを、たれもくおもふべし、その有様いはし中々おど

りぬべし、かゝる所にて中々ものもいはれぬ物にあんありける、此の一段は玉津嶋より廣く向ひを眺めし景色をい
る景色もあるべし玉津嶋の前に入江なれば歌人の歌にも
玉津嶋入江といひ或は玉津嶋輪などいひしも昔此地なり、云云

この公任卿は後一條天皇の萬壽元年に大納言を致仕して、後朱雀天皇の長久二年に卒し、賴通公は公任
卿致仕の後に關白とあつて、白河天皇の承保元年に薨じた人だ、さてその和歌浦を遊覽したのは後冷泉
天皇の永承三年だから、今から八百六十餘年前、公任卿の玉津島へ参詣したのはその三十年ばかり前と
見れば合せて約八百九十年で、聖武天皇の玉津島御幸の時から約三百年、稱徳天皇の御幸からは約二
百六十年、桓武天皇の御幸からは二百二十年しか経てぬから、其れ位の間ならば和歌浦の方とて玉津
島の方とて、その風景に差した變化は無つたのであらう、否や多少の變化は有つたであらうが、何れ
位の程度だかは想像がつけれあひ、併し玉津島の名及び和歌浦の事が我が歴史の上に見はれてから約
九百年、近古時代に移るまでの間に、此の方面に於ける地形地勢に大なる變遷と異動との跡を存し、隨
つてその風光景色にも亦大なる變化の狀を生じた事は、十分に説明がし得られる次の題でその景狀を描
き出して見るとしよう。

第四 近古時代の和歌浦

爰に謂ゆる近古とは、往昔聖武稱徳桓武三柱の天皇が玉津島へ御遊幸の御事あつてから大約九百年、又
夫の大納言公任卿が玉津島神社へ参詣の事、及び關白賴通公が和歌浦遊覽の事あつてから又約六百年の

後の代、而して今からは約三百年の前の代で、即ち徳川氏が封に紀州に就た頃の時代をいふのだ、本卷に又和歌浦全景の圖といふのが挿入してある、是れは同時代に於けるその現在の地形地勢、及び風景を見取て描寫したものだから、之れに據てその約六百年間に生じた幾多の變遷と、變化との景狀の説明を試みようと思ふ、先づその地形地勢の點からいふならば、東のかたに於て紀川の分流紀川は今から三百年は郡中之島の上流で南西に分岐し本流は四のかた青岸の海口に向つて直下し分流は南のかた名草山の麓を流して和歌の海岸に注いだから吐出す土砂は、海底の土砂と混雜して、而して其れが風浪に洶られ盪されて、西のかた雜賀山の波打際に寄聚まり、堆積して附洲と爲り、さうして漸漸南のかたに延長し、更に東北のかたに膨脹して、而してその東北のかたに膨脹したものは、遂に南濱の海灣を埋没し去て、僅かに池沼の形を其所に留めた、是れを今は東照宮の御手洗水といつてゐる、勿論南濱に臨んでゐた松林、即ち夫の和歌松原の松も、此時ふんは既に老朽ら摧け折れて、釣する蟹の漁火に燃されて了つたか、或は斧斤の厄に罹て、村人士民に材に使はれて了つたか、その遺株すらも残つてはゐるか、尤も現在東照廟の前から、菅公廟の前にかかつて六七本が八九本も立てゐる盤根の老松は當時の名残を留めたものだとして古者は傳へてゐる、さて又附洲の南東のかたに延長したものは、恰も一條の長堤を築ひた様に、その尖端は殆んど琴浦の岩角に接觸するばかりにあつて、玉津島の入江の口を、大かたあらず填塞してゐる、而已からず對岸の名草濱も、亦殆んど全跡に鹵田にあつて、さうして其れが漸漸に擴つて來たから、玉津島輪は是れが爲め自然狹隘にあつて、彼も此も往昔の俤はあひやうに

つて了つた、随ふん變動もし變化もしたものであるまひか。

恁やうに往昔からの地形地勢に變動を生じ、その結果其所此所の名所が没滅する、随つて風景も一旦は變化したらうけれど、造物の化工は妙なもの、その時代が替れば替るだけ、又新時代の名所も生るれば、更に相應の風景も添はつて來る、玉津島の西南の砂濱に、新らしひ露根の松原が生れる、又その南の方に片男波かたまたまなみなみと名稱なづなといふ新らしひ名所が生れたかとは、正しくその一例と見て宜からう。若夫れ人工的景色の之れに加はつたものを舉れば、雜賀山の西の半腹に菅公廟が建造される、因て其所に天神山といふ名がつき、東の山上に東照公廟が造立される、因て又其所に權現山といふ名がつく、さうしてその西山の麓に雲蓋院といふが建立された、東照宮の別當寺だ、又和合院始め六僧坊が權現山の麓の東に並んで建立された、雲蓋院の寺中で東照宮の社務所だ、それから養珠寺といふが津屋の玉津島山の東北麓に建ち、さうしてその西北の山に妙見堂が立つ、因て又其所に妙見山といふ名がついた、又妹脊山に多寶塔が建ち、玉津島山の西の麓に大相院が立つ、法福寺といふもその附近の小学砂山にあるが、是れは南朝後村上天皇の興國中に開基したとの事だから、時代は近古より餘ほど古ひ、その他も佛堂寺院の建立された數は少あくまひ、就中東の對岸名草山の中腹の紀三井寺が建立、尤もその開基は稱徳天皇の御時代とも、光仁天皇の御時代ともいふから、その時代は中古の中期ぐらゐに屬するのだが、兎に角和歌浦の風景に一層の佳色を添へ來つたものだ、風景變化の説明は此のへんで筆を擱て、是

れから和歌浦に對する古今の歌詠詩賦文章品題等の事を少しづつ記して、更に現今の和歌浦の實況に及ばふ。

第五 和歌浦の風雅大觀

『和歌浦物語』に『紀路歌枕抄』に引く萬葉集以下、二十一代集および堀川百首、源氏若紫卷、六百番、山家集、拾玉、長秋、名寄、月清、拾遺愚草、夫木集、建保百首、建保三名所百家合、草庵集、建仁元年御幸時等で、わか浦の歌二百二十一首ありといつて、悉く其れを載てある、『續風土記』にも亦此等の歌集、その他の歌が八九十首載てあつて、合せて三百餘首のものがあつたにあらうが、『萬葉集』に載てゐる赤人の作歌前記とその他の歌の數首の外は、大かた奇題逸詠の歌らしひからわが意に適はあひ、されど其れを全然捨るもの異おものだから、中で實景實況に副ふと思ふものばかりを拾つて記すことにする。

- 新古今 わか浦を松の葉こしに詠れば梢によする蟹の釣舟 寂蓮法師
- 新勅選 和歌の浦渡邊の田嶋の鳴聲に夜渡を月のかけぞさひしき 御製
- 新後選 わかの浦や鹽干の湯にすむ千鳥ひかしの跡をみるもかしこし 前木政大臣
- 新後選 跡たれしもこのちかひを忘れすはむかしに返れわか浦をみ 前大納言為家
- 新古今 父淑文朝臣玉澤嶋社にてわか浦に名をよめる故あらは道しるへ 津守國助
- 新後拾 たつねゆく和歌の浦路の渚千鳥跡あるかたに道しるへせよ 紀淑氏朝臣
- 新後古 わかの浦の瀟瀟のたつの聲はかり浪にきこはてたつ聲かな 左大臣 前參議行忠

- 同 みな人の心のたねもかはらねは今もむかしの和歌のうら松 よみ人不知
- 同 わかの浦や雲井の衣にさそはれて蘆間かくれの田嶋も鳴なり 無品親王
- 同 千五百番歌合むれおつゝわか浦に鳴たつたの聲にも君か千代ぞきこゆる 俊成卿女
- 同 後鳥羽院藤野御幸時藤白御合歌 因幡守通方

- 夫木抄 わかの浦に打出てみれば淡路嶋月に波こそ八重の雄風 前中納言定家
- 同 熊野へまわりけるに藤白にて和歌のうらを見やりて 六條院宣旨
- 同 白波の立よらねども和歌の浦を蟹のいさり火ほのかにそ見る 後久我太政大臣
- 同 わかの浦や沙路をさしてゆくたつの翅の波にやさる月かけ 清輔
- 家集 はるくといつち行らんわか浦の浪路にきゆる蟹の釣舟 俊成卿
- 長秋 わかの浦の風に立よ友嶋の君かちとせに拾ふぞうれしき 藤原和尙
- 拾玉 ほのくゝと蟹の袖のくれなゐをくはは白きわか浦の波 後鳥羽院御製
- 御集 和歌の浦の蘆間の波に立踊るむかしに似たるたつの聲かな 爲家卿
- 同 和歌の浦の蘆間とひわけゆくたつの聲きかたに月ぞすみける 大納言雅親
- 家集 わかの浦玉もひかりをあらはしてみかき出たる秋の夜の月 爲家卿
- 同 名にそたつ神も心をさめしよりいつくはあれとわかゆら波 大納言雅親
- 同 天津風蟹のみをよりふきそめて月影よする和歌のうら波 正徹
- 草根 のとかなる和歌の浦波立つけ履も波も春はしるなり 道遠院内大臣
- 繁玉 夕附日霞の上のしほに松も春とやわか浦のうらなみ 正徹

古歌の中で和歌浦の景色眺望の意を詠じたものは先づ此れくらゐものだらう、その後豊臣太閤も和歌浦遊覽の時に、玉津島の邊から向ひ浦の布引の松を眺めて詠じたは、

うちいて、和歌の浦より眺むればみどり色添ふ布引の松
又近ごろ勝海舟は、紀州藩で築造する和歌浦砲臺の工事を視察に來た折に、

和歌の浦やあし邊をさしてよる波に世のふる衣とき溼はかむ
と詠じて人に似した、勿論是れは和歌浦を題に假た寓意の作であるが、名士の歌だから載ておく。
此他近古以來の名人大家の詩文を録すれば、

紀州雜詠遊和歌浦

藤原 愼窩

遊遊諸客海城傍。激盪水光連彼蒼。出網跳魚新撥刺。一聲欸乃逐斜陽。

倭歌浦排律

林 羅 山

弱浦昔聞名。今看猶眼明。蟻粘疑石出。蟹走訝錢行。松下有漁到。蘆邊奈鶴鳴。堆堆鹽甕冷。處處
草苔生。土腹如蜀府。湖去似盆城。乘興朗吟發。山青水自清。

明光浦眺望

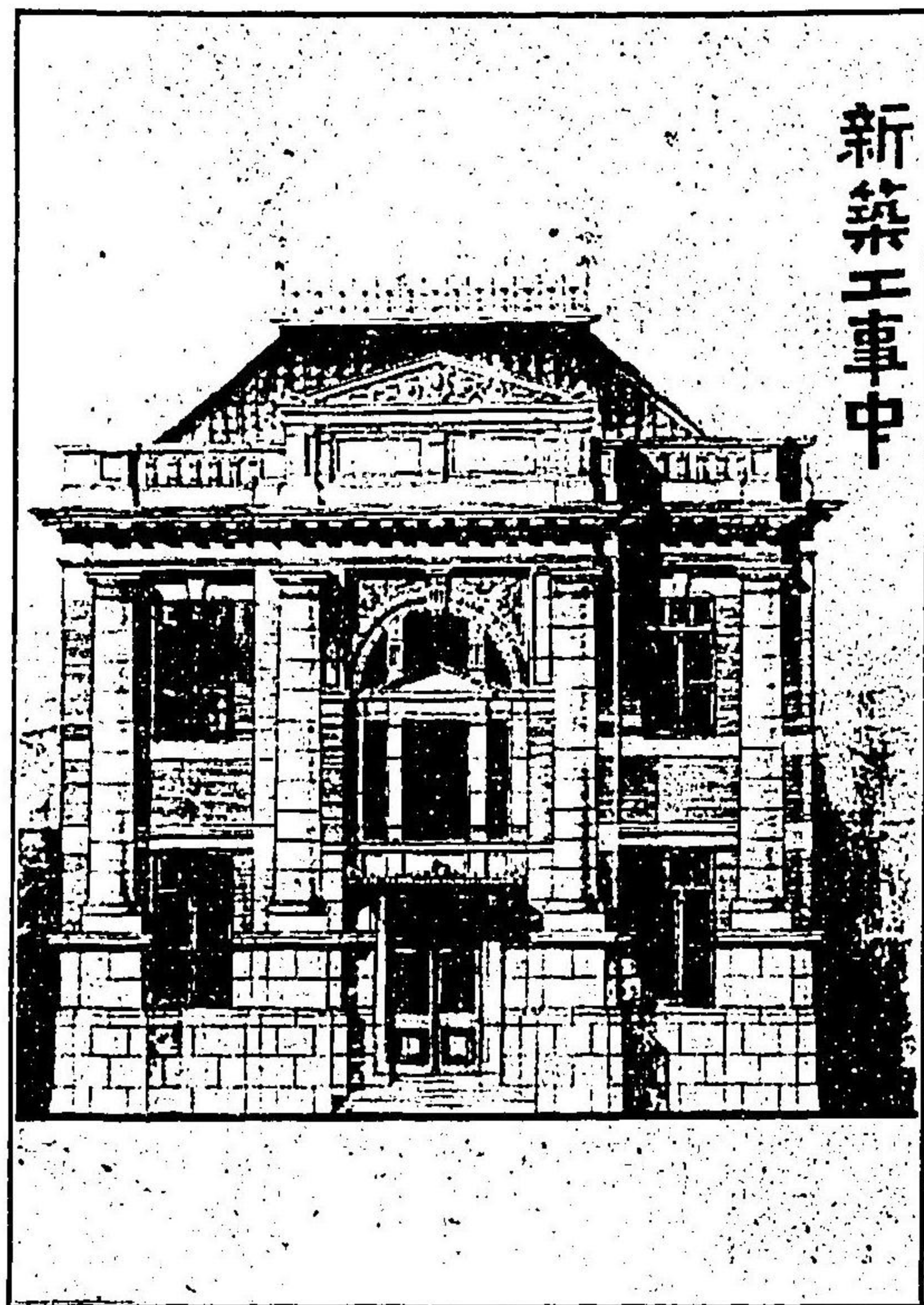
伊 東 東 涯

兩峽爲門倚海涯。明光勝景素相誇。天風忽自南溟落。萬頃銀濤吐雪華。

祇 園 南 海

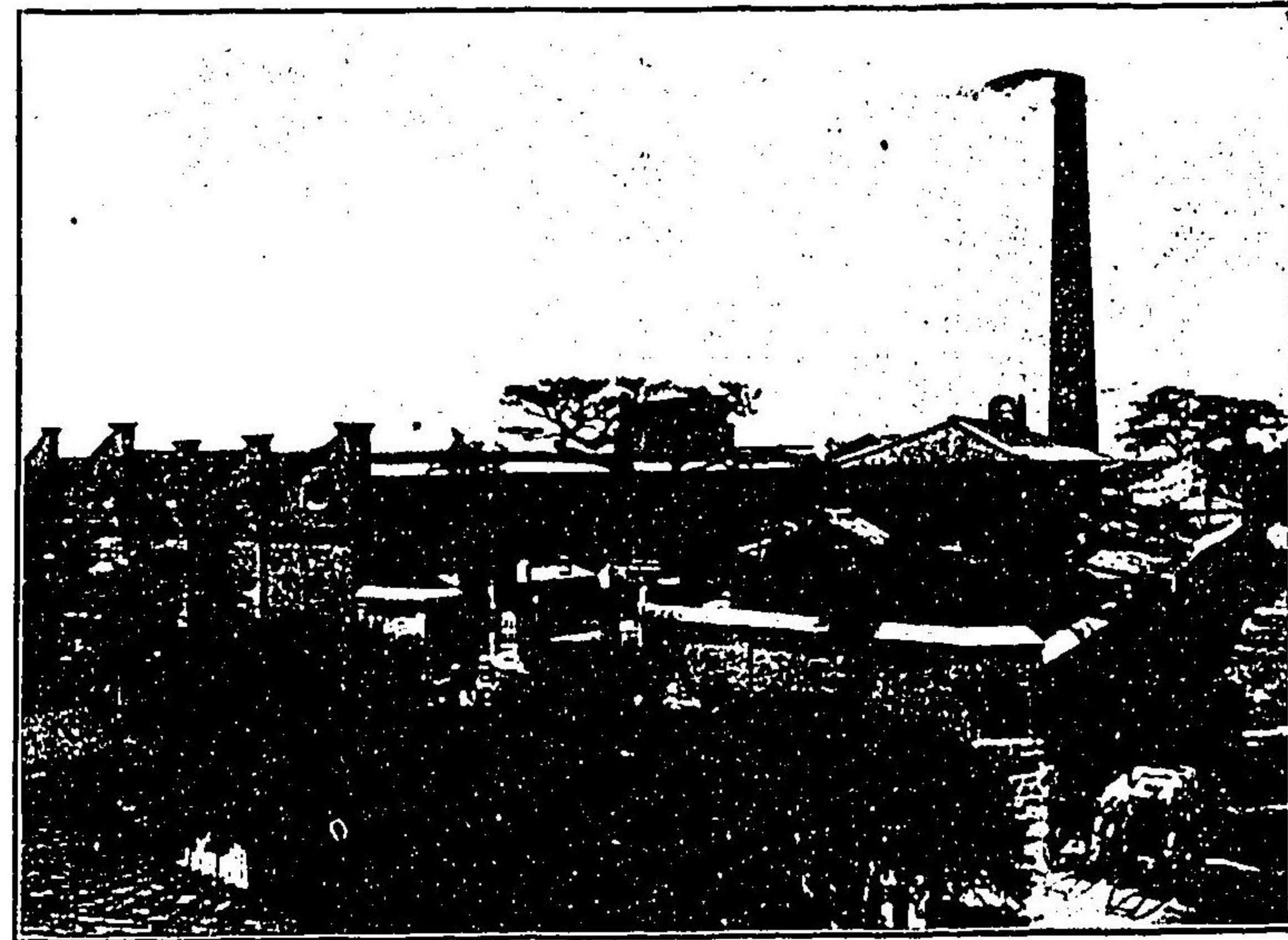
繫組千古綠參雲。浦得松風翠自聞。波底華鯨何處吼。無人試問洞庭君。翠浦松綠
峰樹金碧新嫩嫩。樹裏分明曳杖人。江水年華流不盡。斜陽花落寺門春。金鐘反照

新築工事中

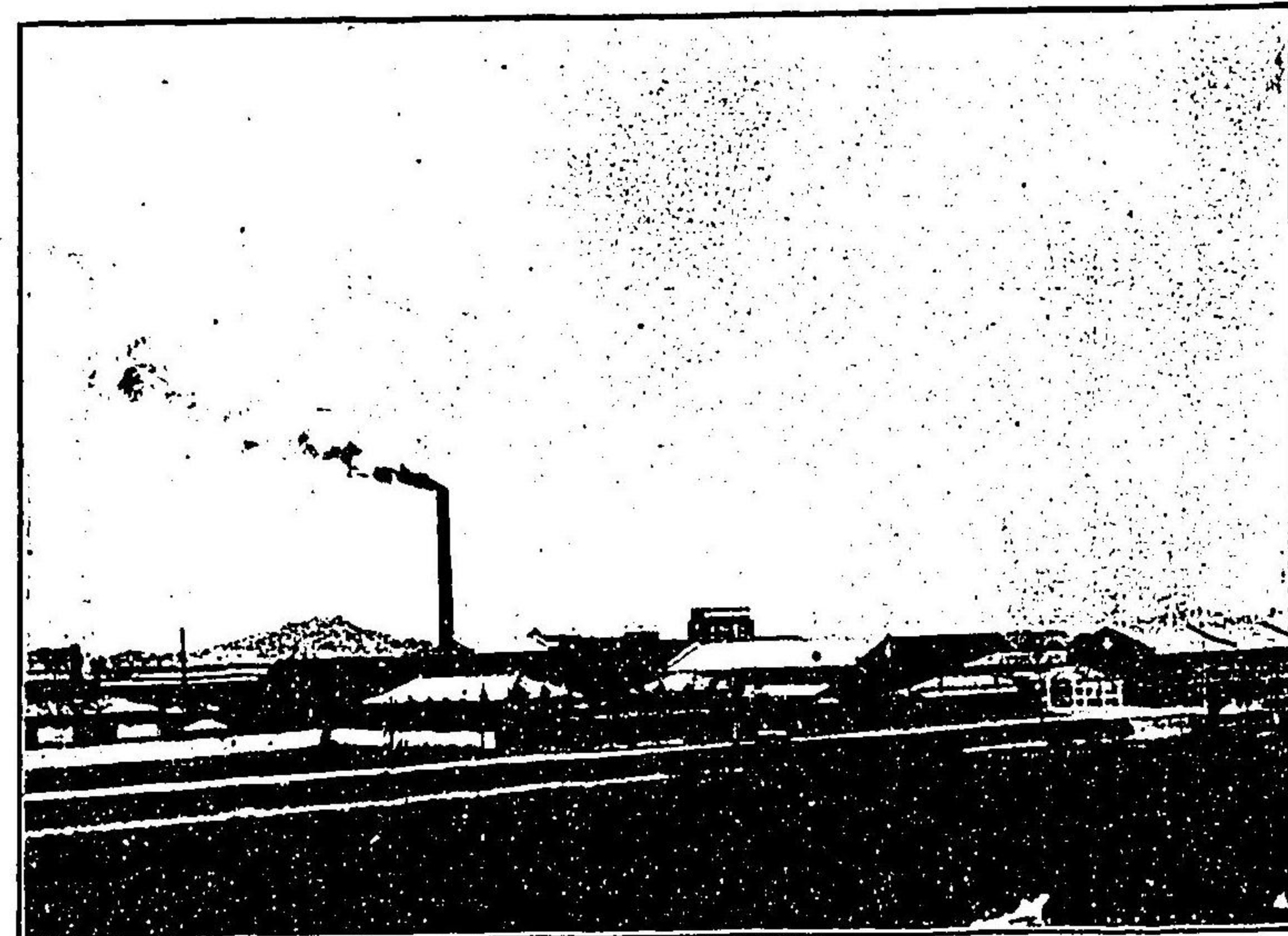


合名會社三井銀行
和歌山支店
(電話四六九番)

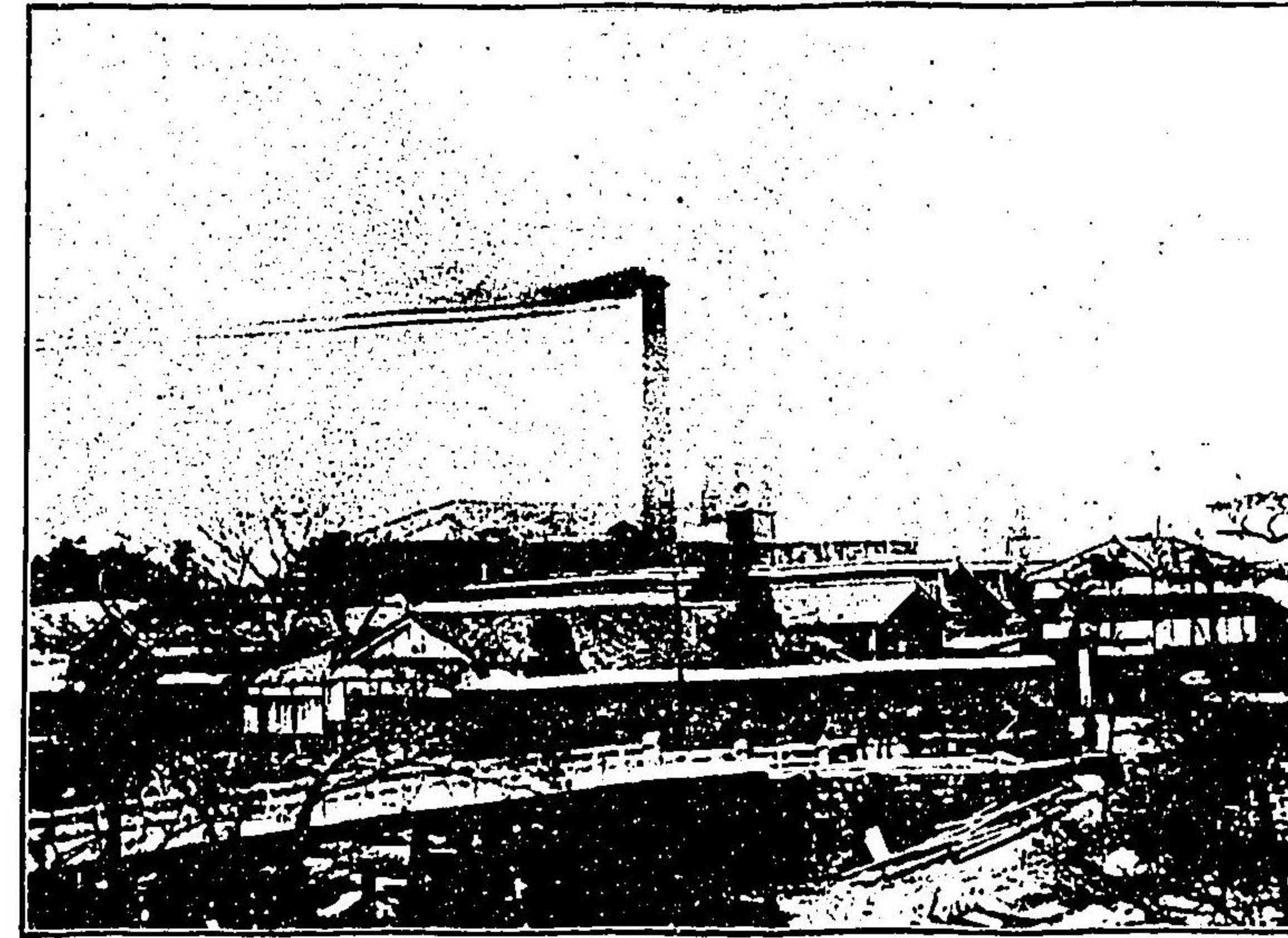
○舶來雜貨
○洋食原料品商
○各種眼鏡
和歌山市駿河町
山東洋物店
(電話四六四番)



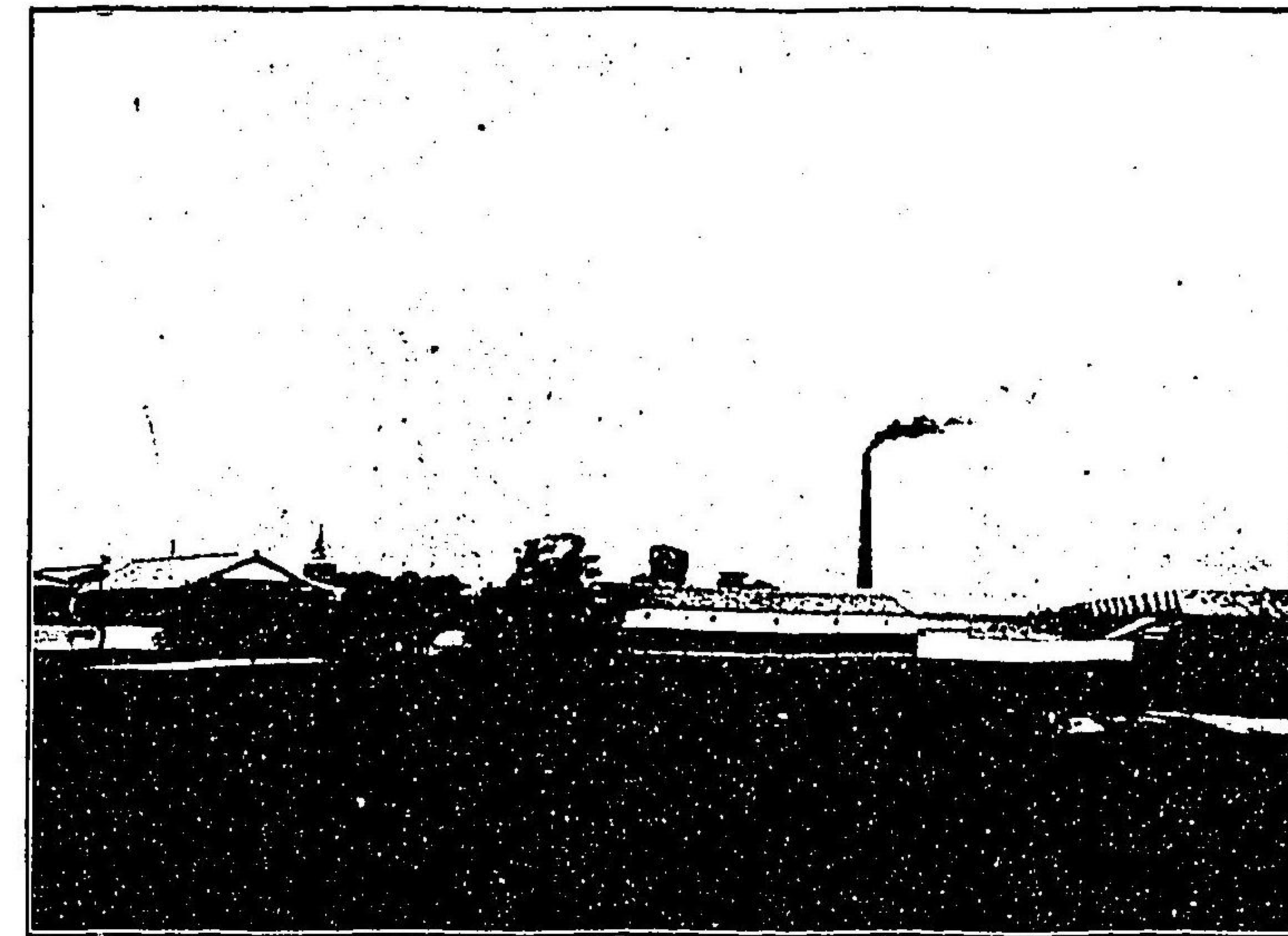
和歌山織布株式會社本社
(電話三三番)



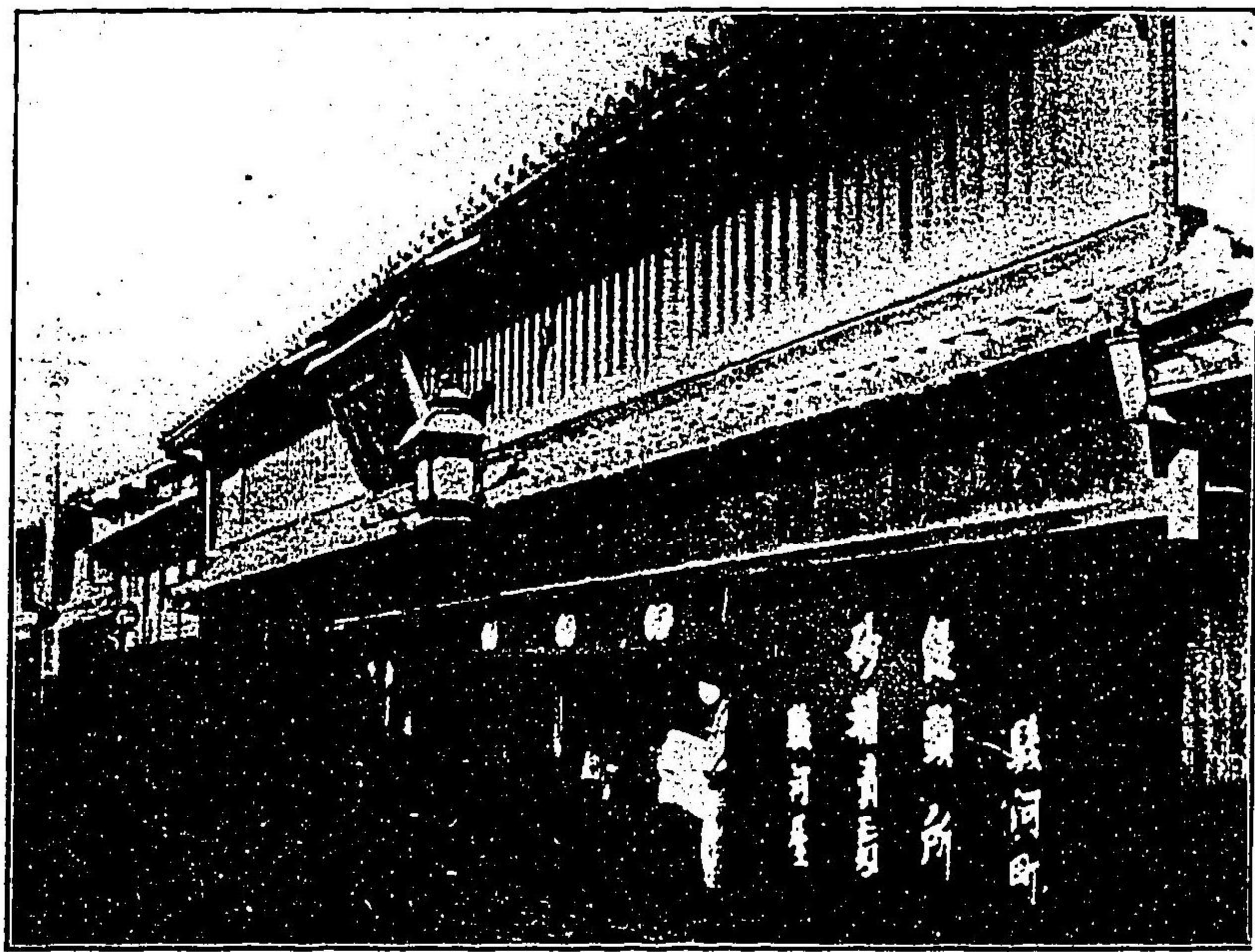
和歌山織布株式會社分工場
(電話三九番)



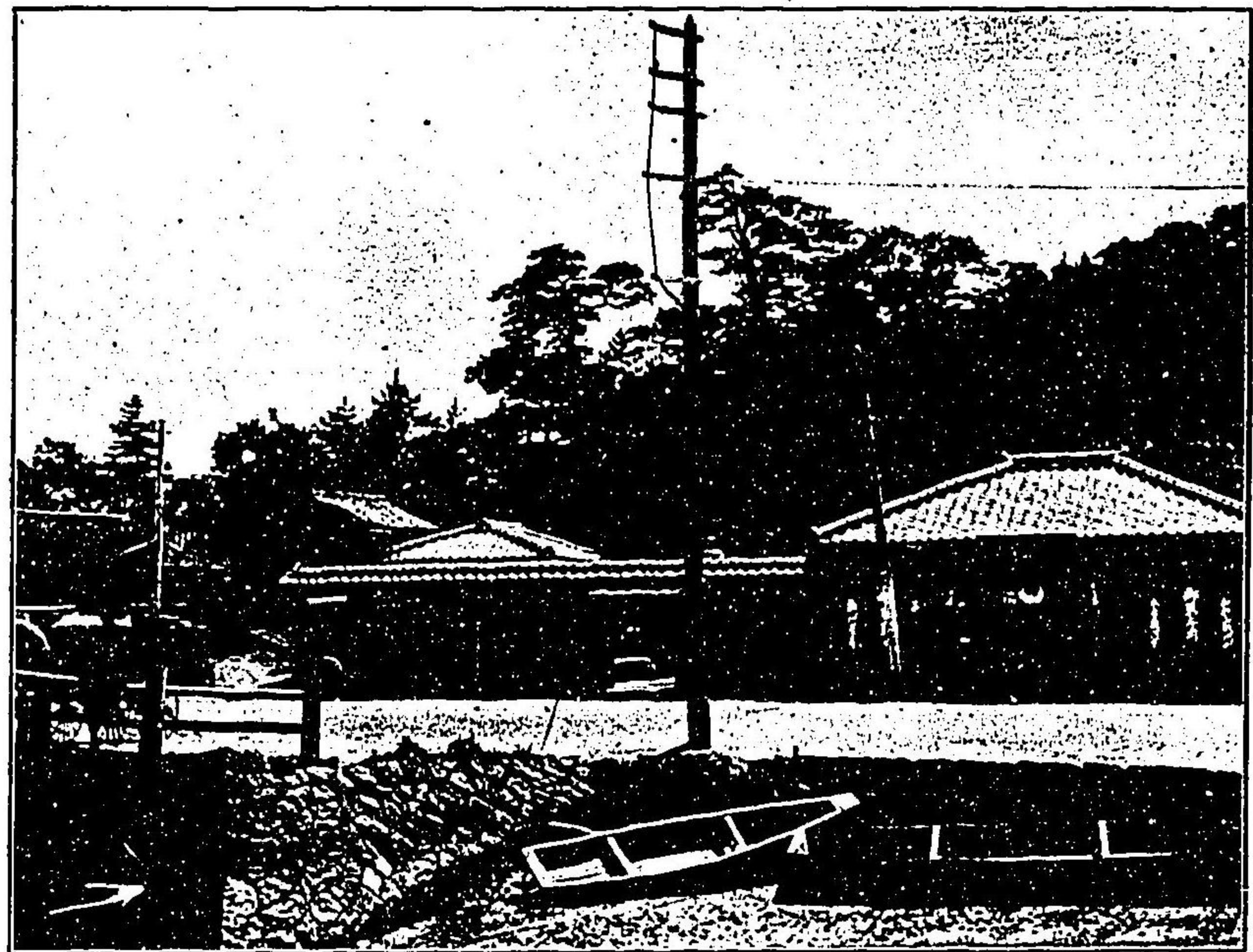
和歌山紡織株式會社本社
(電話五六番)



和歌山紡績株式會社分工場
(電話四一二番)



(番六三話電) 店本屋河駿山歌和



店出屋河駿浦歌和

毛羽如雲泛泛輕。磯頭驚老舊同盟。鵜鴒波上休相駭。白砂淺水夢自消。岸岫巖嵐
 嵐霧春深暖更籠。山容日晴轉朦朧。一痕黛色烟江杳。妝出文君明鏡中。藤代暖風
 誰勞歸神向江東。銀鱗金鱗興不空。潮捲浪花漁笛雨。雲掠吟髮釣鉤風。鰯舟釣魚
 風鳴江草夜漫漫。神女不還秋月圓。二十五弦空雁影。霜葉如夢水雲寒。玉鴨潭潭
 開倚西風散倚波。蕭瑟却比蓼花多。曉飛宿雁月侵夢。夜釣漁舟雪滿鏡。明光蘆花
 雪滿江村迷四鄰。撒空休笑與鹽均。其中何處不圖畫。獨有探春驢背人。雪村邊舍。

この他にも南海が「秋日遊明光浦」の五律、「丁未中秋與諸子泛明光浦」の七古、野田好古が「遊弱浦」の七古、伊東蘭嶼が「題和歌浦圖」の七絶等數首あるけれど、餘り長く且つ多くあつては、讀む人が厭倦を催すだらうから、詩を記すとは此のへんで止めて置て、次に貝原益軒が「南遊紀行」の一段を摘録しよう。即ちその摘録は和歌浦の遊賞に關した事である。その始めに「和歌浦は和歌山より一里あり」と書きだして、

東照宮右の山上に立たまふ、宮つくり大にして甚だ美麗なり、神領多し、僧舍六坊あり、是より和歌の浦を望めば其景すぐれたり、今日には此邊橋邊に咲きて并敷いとまされり、御宮下和合院に東都御歷代の靈廟あり、其西靈靈院に假山水あり、甚だ佳景なり、蘆邊の田畑など眺めし處は、東照宮の下、天神の島居のあるところなるべしといふ、天神の社は東照宮の左に並べり、是また山上にあり、社又大なり、これより少し左の方へ往きて漁人の町を過ぎ、和歌の浦の海つゞきに出づ、沖に地の嶋沖の嶋見ゆ、和歌の浦は雨をうけて入海なり、俗説に此浦におなみありて、めなみなし、故に片男根といふと、此説非なり、男なみとは大なみなり、女なみとは小なみなり、

り、われもどより其歌を信ぜず。あめつちの内をたぐひぬることやあるべしと思ひしかば、かへりて後人にもかたり、其まじひをささん為め、わざとこの遺邊にやすらひて、心なごめて久しく見侍りしに、いさゝか俗説の如くにはなし、只尋常のどころのごとくおなみなみとも、いくたびも立きたれり、和歌の浦にしほみちくれば片おなみと古歌によめるは、俗説の意にあらず。しほみちくれば濁なくるといふ意なり、其故あしべの方に田植なき來るといふ意あきらかに聞ゆ、萬葉第六卷に此歌あり、渚平無美と書けり、此文字にて歌の意明かなり、乎はやすめ字なり、しほみちくれば濁なくるといふ意なり、いとまなみといへるもいとまなしといふことなり、このたぐひ萬葉の歌に多し、此浦の佳景開しにまさりて目をおどろかせり、われ此景色をむさぼりみて、海邊に躊躇し、去るを忘れてときをうつせり、つとめてまたもとの道にかへり、玉津嶋にいたる云云。

玉津嶋妹背山の雨の方は高き砂の岡ありて、所々に松生たり、此岡ながし、此入口のあたり佳景なり、古歌に一人とは見つとやいはん玉津嶋かすむ入江の春のあけぼの」とよめるは此所なるべし云云。

あざと記して、さうして又和歌八景といふは

東照宮○天満宮○玉津島○紀三井寺○妹背山○片男浪○布引の松○蘆邊寺
是れありあざとも記してある、因みだから云ふが、「和歌浦物語」に紀海音がつらねたりと前置して、さうして和歌八景は

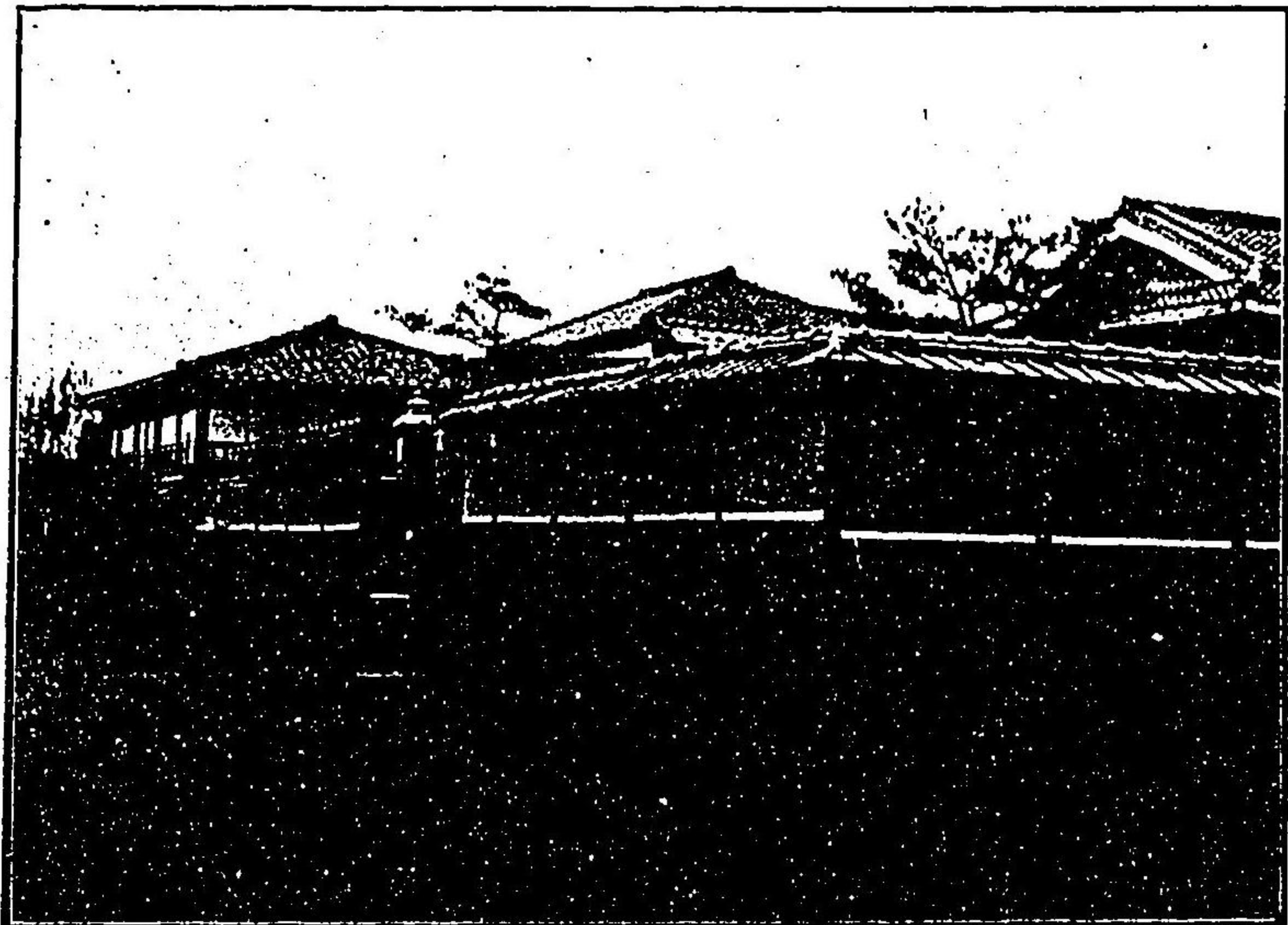
片男波歸帆○玉津島秋月○布引松夜雨○蘆邊落雁○紀三井晚鐘○市町晴風○蘆邊夕照○藤代峰暮雪
だと記して、さうして一と議論してある、その要點を摘でいふと、或人弱浦秋月の題で詩と歌を作つた
氣霧湖平月正圓○嬋妍秋色眼中寬。名區不獨洞庭景。好是明光浦上看。
月清み千里の波にかけみちて秋をしらふる和歌の松風

會席御料理兼御旅館

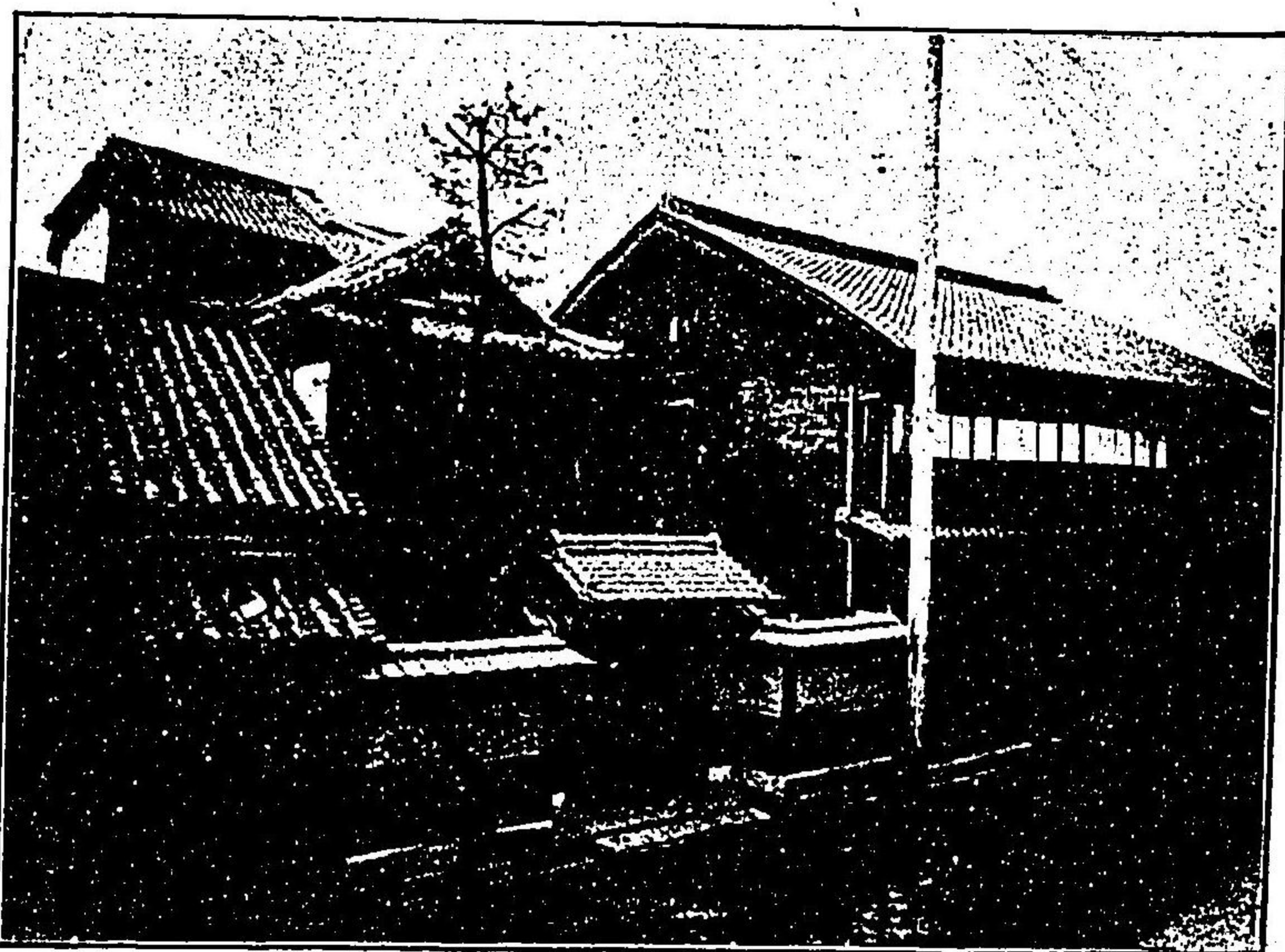
庖丁巧妙。肴類新鮮。料理奇拔。塩梅適口
○酒は御客様方の御好に應じて氣剛ひのも柔かなのも又は甘ひ方でも辛ひ方でも御口に適ふのを上燗でさし上
○御座敷は約百疊の大廣間の外、三十疊以下の室が十五番まで御座ります
○御泊りの御客様には無垢清潔の夜具を用ひて快く御寝ませ申します
○庭前には約七八百本の佳樹珍木を植へ又約千坪の芝生も御座れば相當の運動會場に亦た御用ひられになり升
○塲所は和歌山の中心を占めて居れど而も市中熱鬧の塵を避けて至極閑靜に又た流車の驛站へも電車の乗場へも程近ひ位置に御座ります
右の口條通りで決して嘘ご偽りは申さず候間、四方の御客様何卒御愛顧の御入來を願上ます

和歌山俱樂部
亭主女房敬白

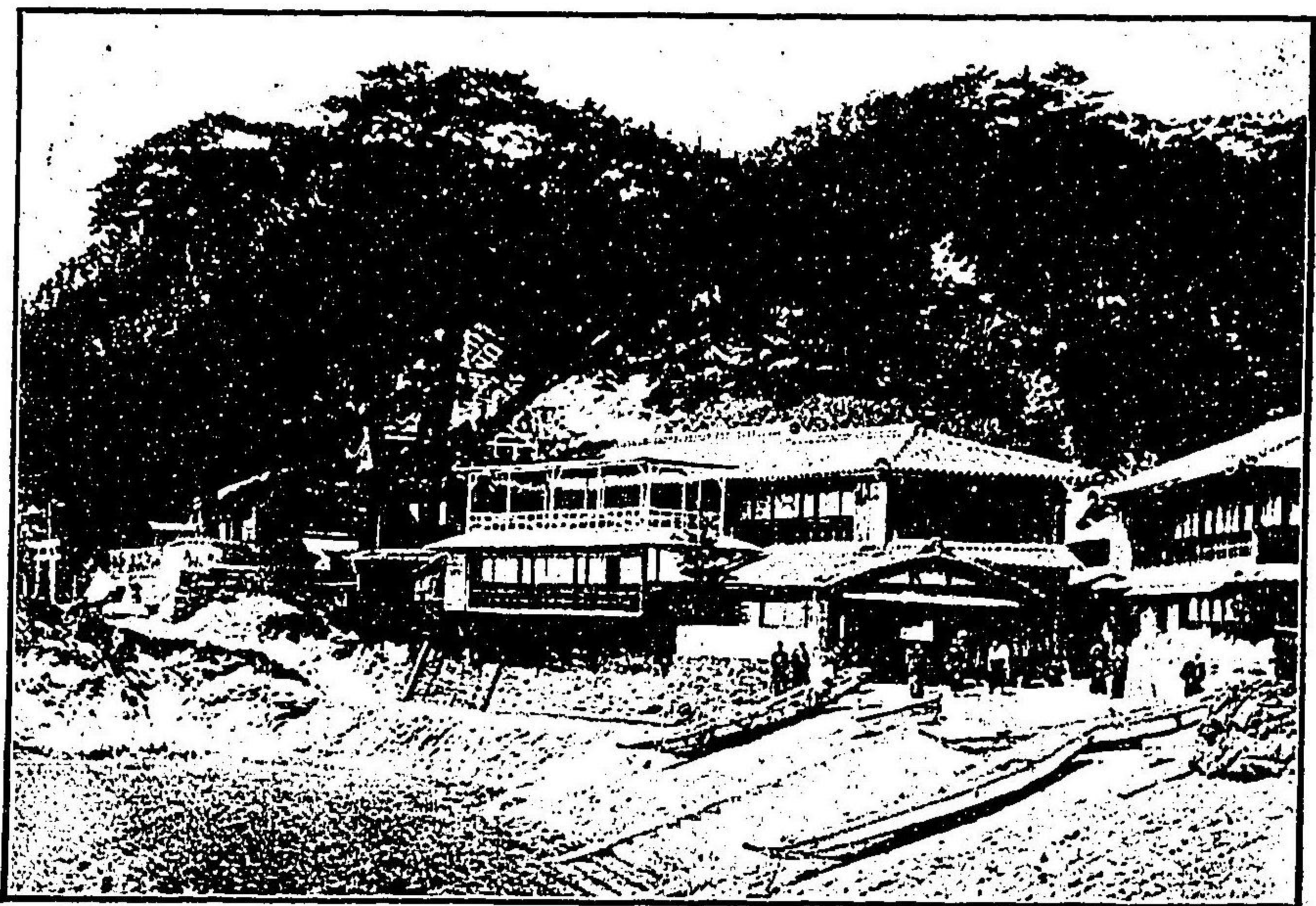
電話百〇八番



●御旅館



和歌山市 十三番町 有田屋 (電話二五番)



會席御料理店兼御旅館
和歌浦出島 米榮別莊

といふのだ、が和歌の浦はただ秋の月ばかりではあひ、山山の晴嵐、海上の歸帆、平沙落雁、漁村夕照、遠寺晚鐘、夜雨、暮雪までで以て、明光浦邊に既に八景ありといひつべしだ、具原氏が諸州めぐりの記に和歌八景前に記といふがあるが、玉津島をのぞみては何れも古來の名所であひ、紀海音がつらねた八景は似つかはしく聞へるが、局限してあつて面白くあひ、此所は世に隠れかき名所であるから、必ずしも八景とかざるは恐だ云云、われ等はこの論を賛成する、何故あらば前にも既にいつた通り、和歌浦の風景は時代によつて變化して、布引の松などは何の昔にか枯れ朽もて根も遺さず、蘆邊寺も和歌山の岡の谷に移轉し、さうして近來は雪景色も多に見られず、雁の如きは殆ど種切れも同様、殊に今日では蘆邊寺と取たつていふ程の所もあひ、また市町の晴嵐といふけれど、此所で嵐に出あつたから、眼に砂が飛込み、衣服が塵芥塗れにあるばかり、閉口の色こそあれ、面白味などは些ともあひからだ、但し前に記した祇園南海が八景の詩の品題は、やや今日の實景にも稱つてゐるやうだ。

要するに今日和歌浦の遊賞を試みようとする風雅の客は、各自隨意に好風佳景と思つた所を撰擇して、其所で以て詩も賦すべし歌も詠すべし、さうして發句なども作るべしだ、さうあからわれ等にその場所を案内せよと望むならば、われ等は玉津島山を最上無比の地として指導する、何故あらば此山は前にも一言して置た通り、聖武天皇が御登臨にあつて、「山に登り海を望む、此の間最も好し、遠行を勞せずして、以て遊覽するに足る」と詔らせ玉ふた地で、和歌浦の開闢した所の全景を展望するには、最も好

適を場所であるからだ、詳事を事は又後にいふ。

第六 現今の和歌浦

①
現今の和歌浦といつてもその景風は爰近く四五十年前のものと、差したる變化はあひらしひ、ただ土地で目で見ても變つたかと思ふ事は、維新前後まで彼所此所に廣瀨赤地を占めて建てた佛舎堂宇が、大概のみを取潰され、神社祠廟も年毎に頽敗に傾むくといふぐらゐるものだらう、その代りに町役場が設置される、巡査駐在所が設置される、小學校が建設される、郵便電信局も亦設置される、さうして町内に家屋が新築改造若くは修造されて、軒並があか／＼好くあつた、又割烹亭や旅舎なども市町の東端から津屋の邊、かけ離れた出島の片隅までにも開店されて、營業があか／＼繁昌する、港灣へ蒸氣船が出入して、海上の往來が便利にある、その他は毎年舉行される東照宮の渡御祭、即ち謂ゆる和歌祭も、氏神菅原神社の例祭も、玉津島神社の祭典も、往昔からの式の如くにして執行される、南龍神社が雲蓋院の故址に建設される、出島の魚市、海上の網曳、乃至磯邊の牡蠣撈ひ、浦輪の海苔採りなども、従前に比べると一層進歩發達した方だといふことだ。

一層の進歩發達といへば、電車の開通に上越すものはあるまじ、この電車の軌道は、現今でこそ玉津島山の麓の津屋までを終點としてゐるが、七八月にあれば紀井寺は勿論、黒江日方の方へも延長するのであるから、従來因循してゐた各地方の雅客といはず俗人といはず、この最便最利を交通機關の建設されるべし。

た事を聞て、東より北より南より遊覽に來るものは、更に數層の多きを加ふるは勿論の事だ、意ふには玉津島の神も、菅公東照公南龍公の神も、之れに依てます／＼其威徳靈光を顯揚し、和歌浦の地主の神及びその風景の靈も、之れに依てます／＼その面目を發揮し、佳色の妝を凝らすであらう、さうして紀三井寺の觀音菩薩は、之れに依てます／＼その大慈大悲の眸を垂らされ、あり難き利益を増すであらう、又毛見の濱宮に鎮り坐す大神等及び琴浦の靈も、之れに依てます／＼その神威を赫かし、美景を觀すであらう、就中此所彼所にある名所及び舊蹟の精靈は疑ふて之れを歡迎するであらう、さうして又その土地土地は股脈にあつて、其所に住居する人等は之れが餘澤を被むるであらう。

以上は決して妄想的囁語ではあひ、宜しく適中するとの期せらるる豫言と謂つべしである、以下和歌浦の名所舊蹟を案内しよう。

第七 玉津島及び玉津島之神

本編本卷の第一で和歌浦街道の事を説明して、その和歌浦を觀覽する人等は、直ぐ津屋へ往くべしといつて置たから、そこでその通りにして津屋で電車から降りたならば、先づ以て

玉津島神社

へ參詣すべしだ、そも／＼此の神社は玉津島の地にあつて、祭神は三座おわし、その一は稚日女尊、二は息長足姫尊、即ち神功皇后で、三は衣通姫ありとの説だ、之れに就き『續風土記』に記してある所は

玉津島に、と上り世より鎮りまは御神は、伊都奈夜伊都奈美二柱の尊の御兒、御名は稚日女尊と申す、又の御名は丹生津比女尊、伊

都野にす、丹津比女神と同神にておわせり、神功皇后新羅を伐ちたまひし時、此の大赤土を以て功勳を立たまふに依て、皇后其の功勞に報ひたまひて、伊都郡丹生の川上菅川藤白峰に鎮め奉りたまへり、いま天野にたまはるは後に遷し奉れるなり、これより玉津嶋天野と一神阿所に並び立たまひ、其間十餘里を隔つれども、毎年九月十六日天野の祭禮に、神輿を玉津嶋に渡御なし奉り、照水の後までも何ほ其の事忘りなかりしに、海内競争の世となりて、其の事廢絶すといへり、皇后かく此の御神を尊ばせたまひし事なれば猶ほ深き由緒もおわしけむ、やう後に皇后を合せ祀り奉り、二座の神となし奉り、然るに光孝天皇和二年九月十三日、右大辨源隆行朝臣を勅使として、衣通姫を玉津嶋明神と祀り奉りしめたまふ、是は帝の御夢に衣通姫の現はれて、一首

立かへりたまも此世に跡垂むその名うれしきわかのうら波
といふ詞の歌を詠たまふと見たまふ御事のおわして、かくは勅命したまふとなり、三柱の神を合せて、總て玉津嶋明神と申し奉る云云
大抵八下年所以、衣通姫を和歌の御神と崇め奉る事世に盛んにして、一座の神の如くなり來れり、云云

だ、是れで見ると、稚日女尊は神代から此地に鎮りおまして、衣通姫は光孝天皇の仁和二年に合祀した事だけは解る、されど神功皇后を合祀した事は何の年代だか解らちひ、併し神后が伊都郡丹生の川上菅川藤白峰に鎮め奉り玉ふた丹津比女大神、即ち稚日女大神の神戸を、伊都郡賀兩郡の地で定め玉ふたのが應神天皇でおわすから、その神后を玉津島の神に合祀し奉られたのも、同く應神天皇ではおわさかつたらうかと思ふ、兎に角尊崇虔敬を致すべき神明である。

然るにその玉津島の地の名、玉津島の神の事が我が國史の上に見はれたのは、『續紀』聖武天皇の神龜元年十月の條に

甲午十月至海部郡玉津島嶼宮、留十有餘日云云、又詔曰、登山望海、此間最好、不勞遠行、足以遊覽、故改弱濱名、爲明光浦、宜置守戶、勿令荒穢、春秋二時、差遣官人、奠祭玉津島之神、明光浦之靈、

云云

と記されたのが初めてだ、即ち聖武天皇の御遊幸に依て、その名その事が天下に見はれたのだ、その後又稱徳天皇も桓武天皇も中間御一代を隔つて此の地へ御遊幸があつた、即ち同紀稱徳天皇の天平神護元年十月の條に

丙子十月天晴、進到玉津島、丁丑、御南濱、望海樓、奉雅樂及雜伎、權置市廛、令陪從及當國百姓、任爲交關、云云

又『後紀』桓武天皇の延暦二十三年十月の條に

壬子十月幸紀伊國玉出島、癸丑十二日上御船遊覽、云云

と記されたのが其れた、但し聖武天皇の詔語に玉津島之神との玉ひたるは、勿論稚日女大神を指し玉へるからんが、明光浦之靈との玉ひたるのは果して何ものであらうか、恐らくはその浦の風景の靈の事いつたものであらう。

光孝天皇が右大辨源隆行を勅使として、衣通姫を玉津島神社に合祀し玉ひたる事は既に記した通りである、是れからして同社の神は衣通姫一跡で、和歌の道を守護するといふ傳へにあつて、之れを上にして九重の内裏を始め奉り、謂ゆる月卿雲客より弓取の人人まで、殊には歌人の尊崇は一層加はつたものらしひ、學者の中でも亦た玉津島の神といへば、衣通姫一跡を祀つたのだと心得てゐたものがあつたら

しひ、其故夫の一代の儒宗と仰がれた林道春山なりでさへも、玉津島祠の題で

百世神蹤何處尋、明光浦畔古宮深、昔時曾報蜘蛛喜、網住允恭天子心

あざといふ詩を作つてゐる、但し其の轉結の句は、世に衣通姫が讀た歌だといふ「わが脊子がくへき背ありささかにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」とある心を取つたものだ。

さて又前に大納言公任卿の玉津島詣の事をいつて、その記の一二節を記したが、その結末の文は

かへさにこしの岩屋を見れば、佛のいとけにておわすを玉津島社より今の盛遊茶屋の方に行き

出崎をまはれば奥の窟にいたるなり

少將

整人の染わたしけんしるこにや窟にあとをさめおきけむ

といへば

あまのすむ浪の窟の佛には波の花をや折てよすらむ

わかぬ浦よりかへるに、おもしろささくらや老たるあまをみて少將

年をへてわかぬ浦なるあまされと老の波には猶をぬれける

公任卿も悠く神社に参詣し、入江の邊に立て遊覽した体が見へるから、おもふに關白頼通公も亦同じ様に参詣したのであらう。

公任卿の前には國司藤原清正も参詣してゐるらしひ、その後には前大納言爲氏、同爲家、同爲世、住吉の津守國道、前中納言定家、紀國造淑文、逍遙院内大臣實隆、その他の權紳家も多く参詣し、中に就く

爲氏爲家等は社頭で歌合あざもした事がある、足利將軍義滿も参詣して歌を讀でゐる、その詞は

我も三代人も三代まで馴來つゝともぞみかく玉津島姫

といふのだ、また豊臣太閤も天正十三年南征の時に参詣して、夫の有名な

うち出て和歌の浦より眺むればみどり色添ふ布引の松

といふ歌を讀でゐる、藤原欲夫堀も林道春山も同じ社に詣でての詩作がある。

玉津島の神を衣通姫一跡のみであると心得てゐる世人の爲めに、その誤を聊か辨じておかふ、其れは同姫を當社に祀つた光孝天皇の仁和二年以前に、既に玉津島の神のおわした事を一言したからば宜であらう、即ち陽成天皇の元慶五年十月廿二日に

紀伊國正六位下玉出島神授從五位下

と『三代實錄』に出てゐるのが爾うだ、その後醍醐天皇の延喜六年二月七日に

紀伊國玉出島神授從五位上

といふ事が『扶桑略記』に見へる、但し是れは衣通姫が合祀された後の事だから、その存意で見ると宜しひ、要するに當社の神は衣通姫の合祀される前も後も、朝廷の御尊崇があつた事は是れで解る、此の後とても朝廷の御尊崇は申すに及ばず、武門からも特に尊崇してゐた事は次に記さう。

文明四年に後土御門天皇から、かき題百首の和歌の御奉納があつた、その中に御題及び御製が二首ある。

切 題 として日のかけはくもらぬ明かすみ光やはす玉つしま山

といふのだ、又年代不詳後奈良天皇から玉津島大明神の神號を染め玉ふた宸翰、寛文四年後水尾天皇から和歌の短冊五十枚、天和三年仙洞御所から同く短冊五十枚、正徳四年靈元法皇から月次御詠歌の巻物二卷等の御奉納があつて、さうして又武門では前の國主淺野幸長は慶長年間にとの神社を再建し、後の國主徳川頼宣は萬治年間に重ねて修造を加へ、且つ拜殿神庫を建造し、社領をも寄附し、尋いで寛文四年聖護院道晃法親王に神社祭奠の久しく廢絶した事を情陳し、因て懇請する所があつたので、法親王は急いで之れを後水尾天皇に奏した結果、天皇には神祇官領下部兼通に勅命あつて、玉津島神社の祭奠の規式、並に神龜以後國史所載の故事數條を勘査せしめ玉ひて賜はり、さうして春秋二時官人を差遣して神事を執行せしめ玉ふ事に定まつたといふた、因みに云ふ、當神社には朝廷からの御奉納物を始めとし、國主は勿論、他家では水戸家^{光國}及びその外からも、奉納あり寄附かりの貴重物品が數十百點あつたとの事であるに、今は誰が書たか知れもしかひ短冊が、僅か二十枚ばかりしか殘存してゐるひとは、誠以て情あひ始末柄である。

然るに爰に玉津島といふ地名の稱、又その神社の號に就き、古來二様の書き方と讀み方があつた、先づ聖武稱徳兩天皇の御紀には、玉津島と書て太滿都島と清音で讀ませるに、桓武天皇の御紀には、玉出島と書て獨音で太滿頭島と讀ます『三代實錄』も『扶來略記』も爾うだ、それを又歌などでは字訓のままに、

太滿伊頭留島と讀だ例も二三はある、何故であらう、其の事は固より疑問ではあるが、早急に考がつかぬ、或は玉出島の名は、上古神功皇后の三韓御征伐の時に得たまへる、干滿兩つの珠の出た所に因て生れたのだとの説、又は往昔この島輪の邊で多く真珠が撈れたからだとの説もあるが、畢竟土俗が附會した説で信じられぬ、又『續風土記』に此島の名は、舊は多摩豆島と稱へてゐたが、二百年計り以後は、豆を清音で稱ふるを普通として來たと書てある、けれど其れを推しきめて宜ひといふ證據もかひやうだ、詰り舊は詞の使ひかたで、玉津島とも玉出島とも、彼此れ混じ合つて書てゐたものと見て不可あ事はあるまひ。

遮莫れ玉津島は、神代から尊き大神の鎮りなませる靈地で、風景も亦た佳絶の域で、殊更ら三代の天子が前後うち續いて御幸もあり御遊もあり、且は十餘日間も一連に御駐蹕の事さへあつた名所で、さうして萬葉以下歷代の名人の歌詠は勿論、文さへ詩さへ作つたものがあるから、その中で實地に適ひ實景に副へりと思ふたものを左に記せば、先づ『萬葉集』六の赤人の作歌は

神龜元年甲子冬十月五日、幸于紀伊國時、山部宿禰赤人作歌一首、並短歌

安見知之和期大王之常宮登升奉流左日鹿野由背上爾所見與島清波瀾爾風吹者白波左和伎潮于者至玉
 瀧河管神代從然會得吉玉津島夜麻

反歌

奥島荒磯之玉瀧潮干満伊隠去者所念武香聞

又同集七の詠人不詳の作歌は

玉津島能見而伊坐青丹吉平城有人之待問者如何
玉津島雖見不飽何爲而妻待將去不見人之爲

又同集九の柿本人麿の作歌は

玉津島磯之裡末之眞名仁丈爾保比去名妹無隙

此の他『古今集』以下の歌では

古今集 わたの原よせ来る波のしほくも見まくのほしき玉津嶋かも
續後選 人とは見すとやいはむ玉津嶋かすむ入江の春の明ほの
續古今 いかはかり和歌の浦風身にしてみて宮はしめけむ玉津嶋
玉架集 過かてにみれともあかぬ玉津しまむへこそ神のこころとみけれ
玉津しまにまうてよみ侍りける
和歌 みかきおく跡をおもは玉つしま今もあつむる光をもませ
夫木 玉津しま磯邊の松の木の間より朧にかすむ春の夜の月
同 玉つしま岩根のすゝき穂にいてまねけはかへる和歌の浦波
同 玉つしま和歌の松原ゆめにたまに見ぬ月に干鳥鳴なり
玉吟 玉津島そちに干鳥の深かけて波にかたよく冬の夜の月
真玉 濁りなき玉津しま江の小松はあらはに千代のかげそみへける
永久 玉津嶋入江の小松おひにけりふるさ御幸のことやとはまし
草根 胡なく霞む入江の玉津しままかてや春の光そふらん

詠人不詳
後京極攝政前太政大臣
藤原實成
前大納言爲家
右兵衛爲教
源兼盛
鎌倉右大臣
家隆
相模
讚人不詳
正徹

ちどあつて、又『宇津保物語』吹上の巻には

舟をへて波のよるて玉の緒にねまごめなむ玉つづる嶋
おほつかな立よる波のなかりせば玉つづる嶋とてかてしらす
玉つづる嶋にあらはわたりつみの波たちよせよみる人ある時

とある、但し此れば夫の玉出島を字訓のままに讀た事のある例證にある歌だ。

さて先づ玉津島神社への参詣が終つたから、直ぐと社の右傍の坂道を攀ちて、土俗がおぼろ山とも、又てんぐ山とも呼ぶ名をつけた

玉津嶋山

へ登つて見るべしだ、この山は前にも概ましいつて置た通り、神龜元年十月某日聖武天皇が御登臨にあつて「山に登り海を望む、此の間最も好し、遠行を勞せずして、以て遊覽するに足る」と詔らせ玉ふた聖蹟で、和歌浦の四方遠近の風光景色を一顧阿の間に撰めて眺望し得られる、唯一無雙の地だ、本巻に挿入してある和歌浦全景の圖の石版繪や、又た山上の南角から紀三井寺を望んで撮た寫真版に参照して見たから、われ等の言の他を歎かぬとが解る。

山上に一基の碑石が建てゐる、篆額に望海樓遺址碑と刻ひであつて、碑は紀伊續風土紀纂修總裁仁井田好古の撰文だ、舊は市町の東の端で玉津島神社の境内から、南へ岩石を切通した抜け道を出た右方にあつたのだ、聞く所に據ると去る明治三十五六年の頃誰かが此所へ建て替へたとのどた、誰にもせよ怎樣

の妄舉をするものは「紀伊國名所圖會」まで言てある説や、その挿繪をぞを見て獨り合點する、一知半解のもの所の爲であらう、何故ならば「續紀」稱徳天皇御紀の明文にも南濱の望海樓とあつて、南山とも山上とも書てはあひ、而已からその遺址を査定するには、仁井田先生を始め續風土記纂修員諸氏の苦心の跡が歴歷知られる、にも拘はらや輕輕しく之れを動かすとはいかにも淺はかだ、剩へ始めから山上にあつた奠供山碑記を取下して、神社右側の幽藪を所に放置するなどは、一面では地下の先輩を侮辱するに當つて、奇怪千萬といはねばならぬ。

議論のやうな事は閑話休題として、是れから次の諸所を案内しようから、玉津島山を降りてから神社の前を南へ、巖殿の切通し道をぬけて五六歩東の、

興の窟

を覗いて見るべし、此の窟に就ては種種の傳説があるが、信じられぬから書かあひ、公任卿の記に據ると、いとけの佛がおわしたといふが、現在では此所に鹽釜の神が祀られてある、是れは和歌浦名所といふ俗語に「四に鹽釜よ」といふ句があつて、本原は玉津島から名草濱邊に揚る鹽屋の煙を見る景色をいふたものだらうに、其れを何の頃の何ものが、奥州に坐す神の號に附會して、恣やうに世惑はせの事をしたのであらう、夫の望海樓遺址碑を玉津島山の上に移し建てたのと同様、誠に烏滸の什業であるさて窟を見たら西へ後戻りをして、右に記した望海樓の遺址は此所か、稱徳天皇御幸の時に權に設置

された市廓の舊跡は何所か、和歌松原の舊跡、さては赤人が滴乎無美の歌を詠じた舊跡は彼所かあごと市町の片側通を更に西に向て、東照宮の參詣道の方へ行へばした。

第八 和歌浦の名所舊蹟

和歌浦の名所舊蹟として擧るからは、玉津島も又興の窟も、無論其の中に入れべきではあるが、是れは前に別題を掲げて説明したから、再び本題の下では繰返さあし事にして、直ぐに東照宮の方へ案内するとしよう。

東照宮

此の宮地は亦夫の和歌浦名所の俗語で「一に權現」と歌ひ囃されてゐた所で、雜賀山の東の山頭にあるのだ、尤も宮地は數百年も前の古ひ時代から、菅公の神靈を祀つた廟が建てられてあつたのを、元和六年南龍公が祈請して、廟を西の山に移し、さうして宮を創建したのだ、維新前までは紀州家から年年歳歳に保護修繕があつて、金碧燦爛目を概ふばかり壯麗であつたさうだが、その後は歳歳年年に頽圯傾廢に赴く景狀なのは、轉た慨歎すべき事であらう。

舊興の窟の今、鹽釜の神を祀る所



南龍神社

は東照宮の西の山麓にある、明治八年の交、舊士族が主唱して藩祖頼宣卿の恩徳に報ゆる爲め、宮の舊別當雲蓋院の故址を相して建設したのださうだ、社の左側に碑が建てたる徳川茂承侯の撰文だ。

菅公廟

のある所だ、但しその此所にある所由は前にいつたが、廟の創建はかか古ひ、既に『雜山詩集』にも倭歌浦天満宮者、未詳其創章之時世也、其從來已久矣、或曰橋直幹自幸府飯京師時、過此浦而始崇奉焉、今所在者、淺野幸長之所改造也、頃歲藤偃窩應幸長之求、而作廟碑銘、然有故不建碑云とあつて、さうしてこの詩は

菅氏家風儒者宗。靈神今古仰遺蹤。西都北野南浪浦。三處祠堂一色松。

といふのだ『續風土記』に東照宮御鎮座の時、當社を以て地主神とし、社領二十五石の寄附をした、社は舊と規模小で、社地も狹隘であつたが、慶長年間淺野家から修理をして、神殿の造營美を盡した、本社左右關平陸奥珠の銘に紀伊國和歌浦天神、淺野紀伊守豐臣幸長再興之、慶長十乙巳年五月初日とあつて又棟札に本社唐門瑞麟殿門東西四間、慶長十年淺野紀伊守幸長再興、翌年左兵衛佐下郡浪浦宮を祀しありとある本地堂は桑山治部卿法印宗榮建立の棟札があり、末社三寶荒神社も天正十六年桑山氏の造立棟札がある、然らば當社修造の事は、桑山氏の時にその初めを開いたのだらうと書てある。

因に云ふ、偃窩の菅公廟の碑銘は「重建和歌浦管神廟碑銘」と題して、其の文集に出てゐるが、非常の長文だから省略に従ふとする、但し淺野氏が之れを建てずに終つた事情は、今から是れかと判斷のしようもあひが、同碑銘の文中に「國主豐臣姓淺野氏幸長公云云」の句があるから、或は其れで關東を憚つて建てなかつたのであらうかと思はれる。

東照宮から南龍神社、菅公廟と順に參詣する道の左傍、御手洗水と稱ふる潮入池の廻りに、盤根老幹の松樹が幾株がある、往昔の和歌松原の記念に遺つたものだといふ傳説のあるのは是れだ、又夫の俗語に「三に下り松」といふのも、此の老松の枝の垂れてゐる姿を指したものだといひ傳がある、此所を南へ出盡して、西へ行けば出島から田之浦、雜賀崎の方へ行く、東へ行けば新しひ根上りの松原にある、其取つきの所が舊和歌山藩の砲臺跡で、その先の方が東照宮の御旅所のある所だ、さうしてその邊から南に向た一帶の海岸が、今日の謂ゆる片男浪だ、然るに此片男浪といふ事に就ては、中古以來



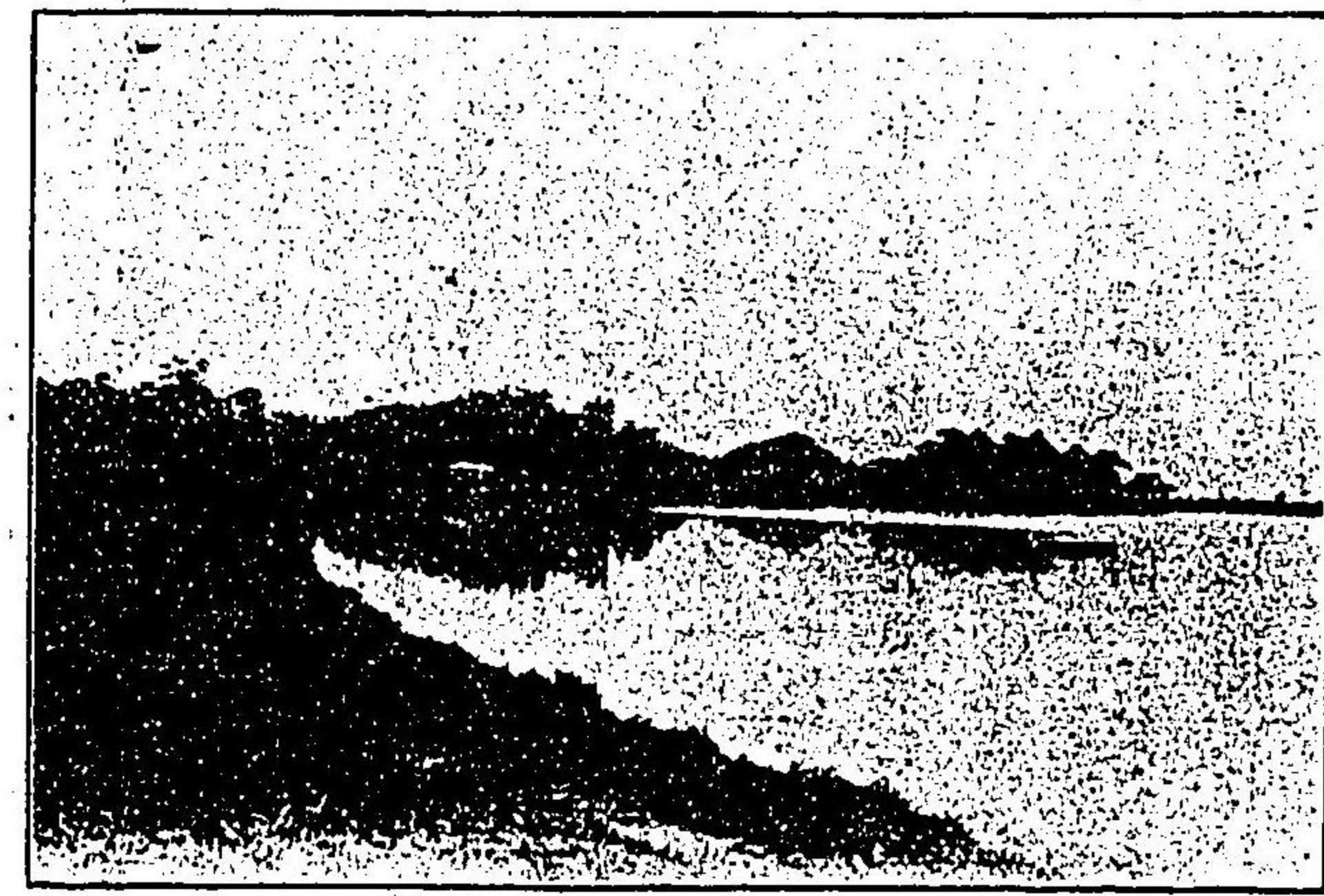
山崎浦及び其の魚市

の歌讀み人に擧し議論があつて、此の浦に潮の満て來る時は、男浪ばかりが寄せて女浪は寄せあひ、赤人の歌も畢竟其れを見て讀だのたと主張して、具原益軒の説 赤人の浦乎無美と詠たのは浦に潮が満るものがある「和歌浦物語」の著者の如きはその側の人である又此の論者の様に誤解して、誤解のままに歌讀たものもある、千五百番歌合に出てる「かたをのみあしべをさしてあく田鶴の千代をともかふ和歌の浦人」(家長)又南朝五百番歌合に出てる「わかたの浦や潮干もそこと見へわかたをのみみたつさみだれの比」(源頼氏朝臣)もどが其れであるが、此等の僻見誤解は寧ろ憫笑すべしだ、併し其所の風景は佳である、寫真版を挿繪にして置たから、能く實地と見比ぶるが宜しひ。

片男浪から背後の蘆の間の細道を抜けると、玉津島の入江の岸に出る、其所から玉津島の方を望んだ景色も亦た佳だ、是れも寫真版の挿繪がしてある、其れから入江の岸に沿ふた小道を西北に歩むで、不老橋と呼ぶ石橋を渡ると、又夫の輿の窟の前へ出るから、道を東に取て

妹 脊 山

へ往くが宜しひ、此山は舊の名は郭公で、入江の中の離れ小島であるが、慶安元年に國主紀州家の經盛があつて、道から島へ石橋が架け渡され、さうして山嶺には多寶塔、東の麓には水閣、北の麓には塔守の寺あどが、夫れく建築造立された、之れに就ての委しひ説明は「和歌浦物語」にある「續風土記」にもある、即ちその「和歌浦物語」の説明する所は



ひ忍を山脊妹び及江入嶋津玉りよ道の東の浪別片

みかけ石の橋三をわたりて、行當りより少し右へよつて、四へ向きたる小堂あり、内に高さ一間ばかりの切石に、法華經の扉目の梵字を漢字にほり付たり、蓋縁縁邊縁空陀利伽蘇多塊あり、此の小堂の前より左右へ道あり、左は守の僧が住む毘盧への近道なり、右の方は是れ經堂へ參る道なり、此道左の方小堂の次にちらびて高札あり、妹脊山禁殺生と樹木の枝折へかす、ちくすすべからすとの制札にて慶安四年四月日とあり、夫よりちと南へまはりて東へ行く道あり、右は磯にて石垣の岸なり、左は伽羅岩の山岸なるを、外の切石にて築きたる石垣なれども、所々に自然石の伽羅岩を大小築き出したる所あり、具原翁が「諸州めぐり」に妹脊山は皆伽羅の文理の如き翡翠色の石山にて、一山たゞ一石なり、甚だ奇しく觀なり、岩の形勢あやしき事目を驚かせり云云と、南の磯邊の道は東北へ廻れば、東向の正面に、川中へかけつくり玉津の無蓋三間に七間あり、川中の柱、床より下は切石にて、無蓋はけやきの材木なりといふ、無蓋の所より四へ向ひてのぼる石階十五段(内上五段は外の切石、次の七段は伽羅岩の自然石、下三段は又外の石なり)あり、壇の上に門あり、左右は柵なり、門より内は小石をしく、真中に經堂あり(二間に二間半)佛像はなく、堂の正中には天燈ありて、下に禮盤あり、又禮盤頂上のきぼりしゆの所は六角なるに、一面に一字づつ「法華經華經」といふ字を左右に彫上げに切つたり、唐門の内には

び机あり、机の上に經玉八軸をならべ入りたり、見ゆる所を安す左右には燈籠を釣りてあり、一殿に此の經堂の下に法華經を石に書て(一石に一字づつなりといふ)埋み納めたりといふ、堂の右の傍に井戸あり、此の經堂の後一段高し、石階五を登りて、唐破風ひわだぶき三棟の門あり、左右の石垣の上は、石の欄東と南とにあり、西北は山の岸なり、石階の左右に石燈籠二基あり、銘に奉寄附燈石一雙、三浦長門守平島時、慶安二年己丑春二月十五日とあり、燈籠石六角なるに、一面に二字づつ彫上げたる字あり、右は「唐觀諸經而於其中此經第一」(法華經見寶塔品の經)とあり、左には「此經能令一功衆生離諸苦惱」(法華經獅子王菩薩本事品の經)とあり、

中に丸堂伊りの二重の塔あり(上の重は腐垂木にて下の重は常のなる木なり)常には閉戸す、内には「養珠院殿妙紹日心大師、承應二癸巳年八月廿一日遊行」の石碑を安置すといふ云云
次に又『續風土記』に説明してある所は

妹背山の石殿に倚て石を疊みて高く一塔を開き、その上に二重の寶塔を作る、その初め慶安元年東照宮三十三回の御忌に當らるゝにより養珠夫人御遺誓の爲めに法華經題目の七字を片石に書したまふ、太上皇の御聞に達し御感の餘り、親しく宸翰を片石に染させられ、又一時の諸親王公卿に詔して、同く片石に書さしめ、併せてこれを賜ふ、大夫人親ら書す所と違て二十餘萬石に至る、石殿を圍てこれを納む、宸筆の片石を石殿に盛て中央にありといふ、四方石を疊みて高く築き、その上に一大石を建て、題目石の事を記し(此の石は天降の石の雄石なりといふ文は備臣那波元成、永田道慶命を奉りて記する所なり)小堂をその上に作る、後承應二年八月大夫人掩帷の後、南龍公堂を改めて二重の寶塔を作り、釋迦如來を以て塔中の本尊とし(大夫人の御分骨を釋尊の腹内に納むといふ)塔中ある所の大石に就きて、大夫人の法號を刻り、寶塔の前拜殿あり(東西二間南北三間)拜殿の前唐門あり、唐門より石階を降りて水閣あり(東西三間南北五間餘)土人これを妹背の拜殿といふ閣は水上に臨み、眺望最も絶妙なり、寶塔守護の寺その北にあり、海禪院といふ

右の通りである、因に云ふ、寶塔の建てたる山の名を妹背と負はせたのは、慶安元年國主紀州家下山腹に題目石を藏める時、船方奉行の竹元丹波といふが海島から平面の二大石を取て獻じたのを、土人がその石を夫石雄石と呼だので、其れに因んで山の名をつけたのださうだ。

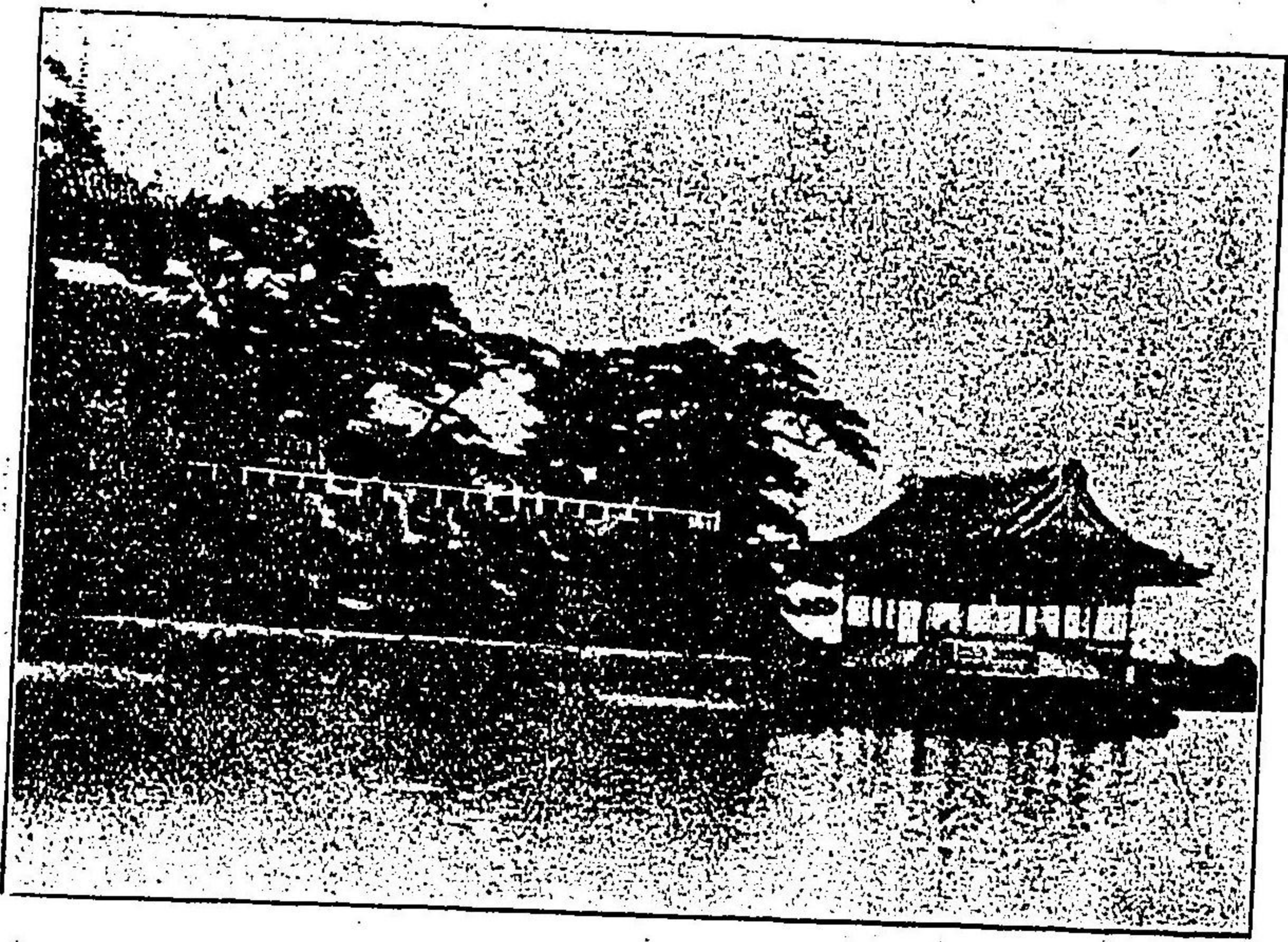
○觀海閣

は妹背山の東の麓に水面に半ふんかかつてあつて『和歌浦物語』に舞臺といひ『續風土記』に水閣といつたのが是れた、今の名は近ごろ誰かがつけたのであらう、此の閣に据へてある床几に腰を卸して前面に向ふと、紀三井寺を始め東の方の諸景色が指順の中に歴々と展望される、殊に入江に潮の満ちた時は、藻探り船や柴積み船が、右左りに往きかふさま眺められて、その風情は一層である。

妹背山から向ふは一面の入江で行き道がみから、あと戻りして三斷橋を渡り、もと来た道へ出て右へ行くと、左方の山の根に二軒茶屋があつて、廣邊といひ朝日といつたが、その後潰れて今は別の料理屋が建てる、其所から玉津島神社の前を通り過ぎて左を見ると可なり廣ひ空地がある、今は或る植木屋の花壇にかつてゐる、其所が即ち

□養珠寺遺趾

だ、同寺は妹背山と號し、



妹背山多寶塔及び其の拜殿

法華宗一致派受不施派の本寺として、承應三年に南龍公が生母養珠院殿の爲めにその靈牌所に建立したものだ、その開山は身延山久遠寺二世權大僧都中正院日護上人である、當時はかか／＼立派な寺で就中くその櫻之間といふのは、養珠院殿が存生で駿府に御さつた時の寢室を移したのであつたとのと

だ、維新後廢寺とあつてからは、その靈牌は和歌山の報恩寺に移したさうだ、又この寺の庭園の美であつた事は『名所圖會』などにも書てあつて、殊にその垂枝櫻は頗る有名なものであつたと見へて、夫の祇南海も賞觀の詩を作つて獲てゐる

養珠寺賞垂絲櫻花

夜來新雨足。枝放十分妍。翠翠比梨暖。條條借柳懸。寺稱地勝樂。客醉花豐年。但恐暴風夜。正將寒食前

あごと、舊境内の南の山の麓に一個清冽な泉がある、當時の關伽井で、思齋と銘してあつたさうだ、傳へていふ南龍公曾て手自ら此の泉を抱で、亡母の靈牌に手向けるとて

多羅千禰遺志多布許已呂乃多武計美豆無加志平伊麻爾美流茂奈津嘉志

と、一首の和歌を詠じられたとのとだ。

□妙見山

養珠寺遺址の背後の山だ、山上に妙見堂が建てられてからその名が生れたのだ、但し堂は萬治三年とかの創建で、本尊の菩薩は南龍公の命で、夫の日護上人が彫刻して本堂の中央に安置し、右に東照宮、左に三十番神を安じてあつたさうだが、堂は明治十年頃とかに、大暴風で吹き飛ばされて了つたといふとで、今では獨り石の鳥居ばかりが立ててゐる。

此の山の西の方に土俗に千疊敷と呼ぶ所がある、此所が傳説のある

□雜賀城址

で、紀州で有名な雜賀氏本姓は給木氏の據てゐた城だといふとだ、然るに又夫の祇南海は、尤も土俗の傳説に據たのであらうが、此所を天平神護元年十月稱徳天皇の御されて御遊の御催しのあつた、望海樓の遺址だと見立て、登妙見山といふ題で、

望海樓何處求。玉津島北石巖頭。翠華不返煙波渺。沙鳥雲帆神護秋。稱徳神護元年辛卯光浦、詣玉津島、是望海樓遺址、奏歌舞雜伎、今按妙見山乃

といふ詩を賦し註を加へてゐるが當らひひ、

□望海樓遺址

は前にもいつた通り、市町の東の端で、舊望海樓遺址碑が建てあつて、今は望海樓といふ割烹料理店の建ててゐる邊が、何でも其れに違ひかからうと思ふのだ、又た稱徳天皇が御目慰み御心慰みの爲め、權に設置させ玉ふた

□市廳舊跡

も、赤人が作つた歌の

□瀟乎無美舊跡

も、猶又公任卿が「みどりの松小暗き中より白浪のたつも見とほさる」といひ、頼通公が「翠松傾蓋白浪洗跡」といはれ、その他中古の歌人の詠題にした

和歌松原遺跡

も、皆前に記した望海樓の遺址の邊から、西へ東照宮の前に横ひた地に違ひあからうと思ふのだ。又左に和歌松原を詠じた古歌幾首かを記さう

新羅古 霞ふれば和歌の松原うつもれて沙千の田嶋の聲ぞのどけき
常盤院 ぞこしも和歌の松原たつのなく沙千のどけく立置かな
歌合 霞つもるわかまのまつはら古にけり幾世へぬらん玉津嶋守
寂後選 夫木 少なきの春の沙千は野にて霞に遠き和歌の松原
霞玉 霞たつのなくはもすみてよくる夜に月かたふさぬ和歌の松原
霞玉 じれかるやつるの心も春の色に霞さけりなわか松はら
同 あり田嶋の沙千の聲も明ほの波にわかれわか松はら
同 拾まで春の霞のみつ沙に干涸もやは和歌のまつはら

藤原雅承朝臣
入道前左大臣
鎌倉右大臣
中務卿みこ
宗尊親王
道通院内大臣實隆

さて此のへんまでで和歌浦の名所舊蹟は、大概擧げ盡したと思ふから、次に其の附近の名所舊蹟を二三
个所書て此の筆を擱くことにしよう。

第九 和歌浦附近の名所舊蹟

和歌浦附近の名所舊蹟としては

雑賀埼浦

といふ浦がある、往昔は一名所にかぞへられてゐて『萬葉集』の歌にも

木國之茨日鹿乃浦爾出見者海人之燈火浪間從所見

とありて、又『夫木抄』には

きの海のみひかの浦のおきつもの春の日くらしかつく蟹入

あざとある、だが是れは今の西濱あたりから海を見た景色を詠じたもので、又赤人が「左日鹿野」と讀だのは、高松の西から關戸の邊一帶の所を指したものだらうとは『續風土記』の考説だ、けれど當年の雑賀埼浦にも一个古跡と見て宜ひ事がある、何かと問はふから天正年間織田右府が石山本願寺を討伐する時、安藝の毛利が本願寺を援けて石山へ輸送する兵糧船を大阪灣に遊撃する爲め、九鬼嘉隆に紀州沿海の船舶を徵發して、泉州堺の大湊へ回漕せよと命じた折、嘉隆が其の船舶を點檢もし艦装した場所が即ち此の浦であつたのだ、猶又他の一个は、紀州名物雑賀鮎の本家本元が此所にあつてゐる事だ。

鷹巢

といふ風景奇絶な所がある、其れは浦の西の海際にあつて、巖石聳立崖壁の如くにあつてゐて、その高さ百有餘仞で、常に烈風の之れを撲ち、怒濤の之れを噛む所とあつてゐるから、石角の鋭さといつたら恰も鋒刃の如くだ、然るにその絶頂の巖石の罅隙に、蒼鷺が來て巢をくうによつて、土人が鷹巢とい

ふ名をつけたのださうだ。

此の鷹巢の巖壁の下に廣ひ深ひ窟がある、入口の上下左右の高さ廣さがおのゝ二丈餘りで、深さ三十間ばかりもあるといふのは、中へ入て見たものの話ださうだ、是れを十俗は

□上人窟

といつてゐる、何故かといふと此の巖窟へは、石山本願寺の教如上人が、織田の軍兵に追撃された時に潜匿して、一旦の危急を脱れたからだとの傳説だ。

因に云ふ、雜賀崎へは和浦歌の出島敷かれの客だ能ては漸次發展して好くならうから、西の方へ山越しに二十六町ばかりだ、その間に福之浦、牛之鼻、田之浦、難波崎あざといふ所があつて、和歌浦の風景の變化する所を見るのは一層の興味がある

和歌浦から西の方では雜賀崎が行き止りだ、それから東の方にあると、第一が

□紀三井寺

だ、寺は名草山の半腹を占めて立てゐる、稱徳天皇の御宇唐僧爲光上人が開基したのだといふ説もあるが『續風土記』に據ると其れは光仁天皇の寶龜元年である、眞個の寺號は金剛寶で、紀三井はその山號である、境内は東西八町、南北十二町で、本堂は方九間、中央に本尊の十一面觀音薩摩が安置され、左方は梵天、脇腹は藥師如來、小脇腹は聖觀音、右方は帝釋天、脇腹は阿彌陀如來、小脇腹は千手觀音が

おのゝ安置されてゐる、西國三十三所觀音第二番の札所で、

ふる里をはるゝこゝに紀三井寺

佛の誓たのもしき可南

といふのが、謂ゆる御詠歌であるさうだ、何にもせよその寺の地位が地位であるから、本堂から寄り又は境内から西を望んだ景色は、和歌浦玉津島が一眸の中に眺められて、殆んど還るとを忘れるの興味がある。

□濱宮

紀三井寺から熊野街道を墨江の方へ向つて行て、碓子といふ小字の西から右へ折れて參るべし、此處は『倭姫世記』に

崇神天皇五十一年甲戌、遷木乃國奈久佐濱宮、積三年間奉齋云云

と記し又『國造家舊記』に

崇神天皇五十一年豊種入姫命奉天照太神御靈、遷坐于富國名草濱宮之時、日前、國懸兩大神自琴浦移、千名草濱宮、並宮鎮坐蓋三年也、五十四年十一月天照太神雖遷吉備名方濱宮、日前、國懸兩大神留坐千名草濱宮、至垂仁天皇十六年自濱宮遷于同郡名草之萬代宮而鎮坐也、今宮地是也
と記した通り、天照皇太神と日前國懸兩大神の鎮り坐した事のある神蹟で、而して今ある宮は皇太神と

兩大神を祀り奉た所だ、因に云ふ、稚子の西一町ばかりに鳥羽橋といふがあつて、橋畔に享保年間國主

四十八

紀州家の命で「天照太神三箇年御鎮坐舊蹟」と刻んだ碑石がある筈だ。

□ 琴 浦

濱宮のある毛見浦の續きで、海面へ突出した岩角の所だ、此所は初代の紀國造天道根命が、日前國懸兩大神の御靈實たる日像御鏡、日矛御鏡の二種の神寶を以て、此の浦の海底の巖上に安置し奉つたと『國造家舊記』に記してある所だ、がその信すべからざるとは、既に『木國史談會雜誌』で辨じて置た。



□ 黒 江

若夫れ日前國懸兩大神宮、伊太祈曾神社、龍山神社、徳勅津宮遺蹟、栗林八幡宮、齒部神社、岸村行宮遺蹟、木本八幡宮、加太淡島神社、志摩神社等の事は、前編和歌山の巻に記してある。

往昔は黒牛洞といふた『萬葉集』に柿本人麿の歌が出てゐる、

古家丹族等吾見黒玉之久漏牛方乎見佐府下

と、此外にもあるが其れは略す、此地は琴浦から舟尾を通り南へ出た所で、今は黒江町と呼び和歌山縣下で漆器の特産地にあつてゐる。

□ 日 方

往昔は一圓に遠干潟であつたから、干潟浦と呼んでゐたが、元弘元年に大地震のあつた時に、變じて陸地にあつたので、其れで今の町が生れたとの傳へた。

□ 名 高

『倭姫世紀』に崇神天皇の五十四年、皇太神の御靈寶を、毛見濱宮から吉備名方濱宮に遷し、四年奉祀すと見へた、その名方濱は此所だとの傳説がある、今は名高浦と呼んで内海村に屬してゐる、この浦も亦た人麿が歌に讀んでゐる『萬葉集』に

本海之名高浦爾依浪音高島不相子故爾

と出てゐる。

□ 淨 土 寺

今の内海村大字鳥居居村にある、山號は仙臺山といひ、相州藤澤山遊行寺一遍上人の開基で、大野城主

山名修理大夫義理の菩提所であつたさうだ、本堂前の北の山に△鈴木三郎重家、龜井六郎重清兄弟の碑石があり又、△山名義理の墓碑もその邊にある。

□日切地藏尊

浄土寺の本堂にあるのだ、諸人が萬病平癒などの祈願をかけるときは、日限を切て懸驗を示現するといふとだ、尊像は聖徳太子の自刻だとの傳説がある。

□藤白御坂

此所は齊明天皇の四年十月に、有馬皇子が絞殺され玉ふた歴史のある所だ、併し峠の御所の芝から和歌浦、玉津島、加太浦、友ヶ島、阿波の鳴門あたりまで見渡した風景は、あかく佳美である『草根集』に見へる正徹の歌に、

藤白の御坂のほれば吹上の

眞砂にけふる和歌のうら松

と云ふのである。

□藤白若一王子社

藤白浦の南にある、祭神は伊邪諾尊、伊邪冊尊、饒速日命、速玉之男命などで、回限二十四个村の産土

神とのとだ、境内に宇多法皇、花山法皇、白河法皇の寶塔が三基あつたといふ、建仁元年十月後鳥羽法皇熊野御幸の時、社内で御歌會の御催しがあつたとの傳もある、さて此浦の最寄が冷水浦、鹽津湊などで、その他又有馬皇子の御遺骸を葬り奉つたといふ遺址名高ひ藤白の松はその傍で後世石地蔵が立ちたであるから、附て記しておく。

和歌山と和歌浦後編 和歌浦の巻畢

明治四十二年六月一日印刷
明治四十二年六月五日發行

定價金四拾錢

遞送郵税金四錢

版權
所有

發著
行者兼

和歌山縣和歌山市北仲間町四十四番地

內 村 義 城

印 刷 者

大阪府大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地

井 下 幸 三 郎

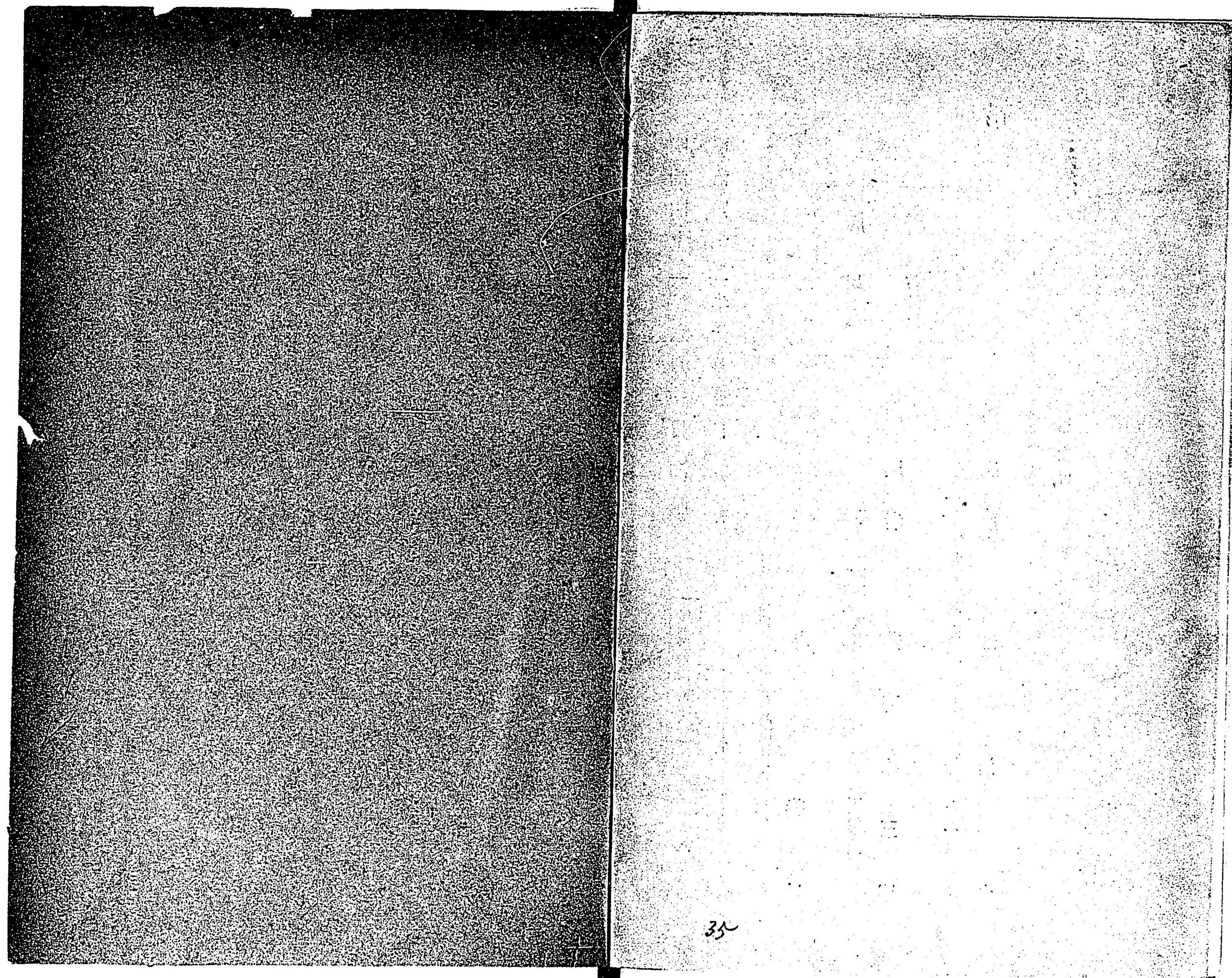
印 刷 所

大阪市南區心齋橋北詰西入

浩 進 舍

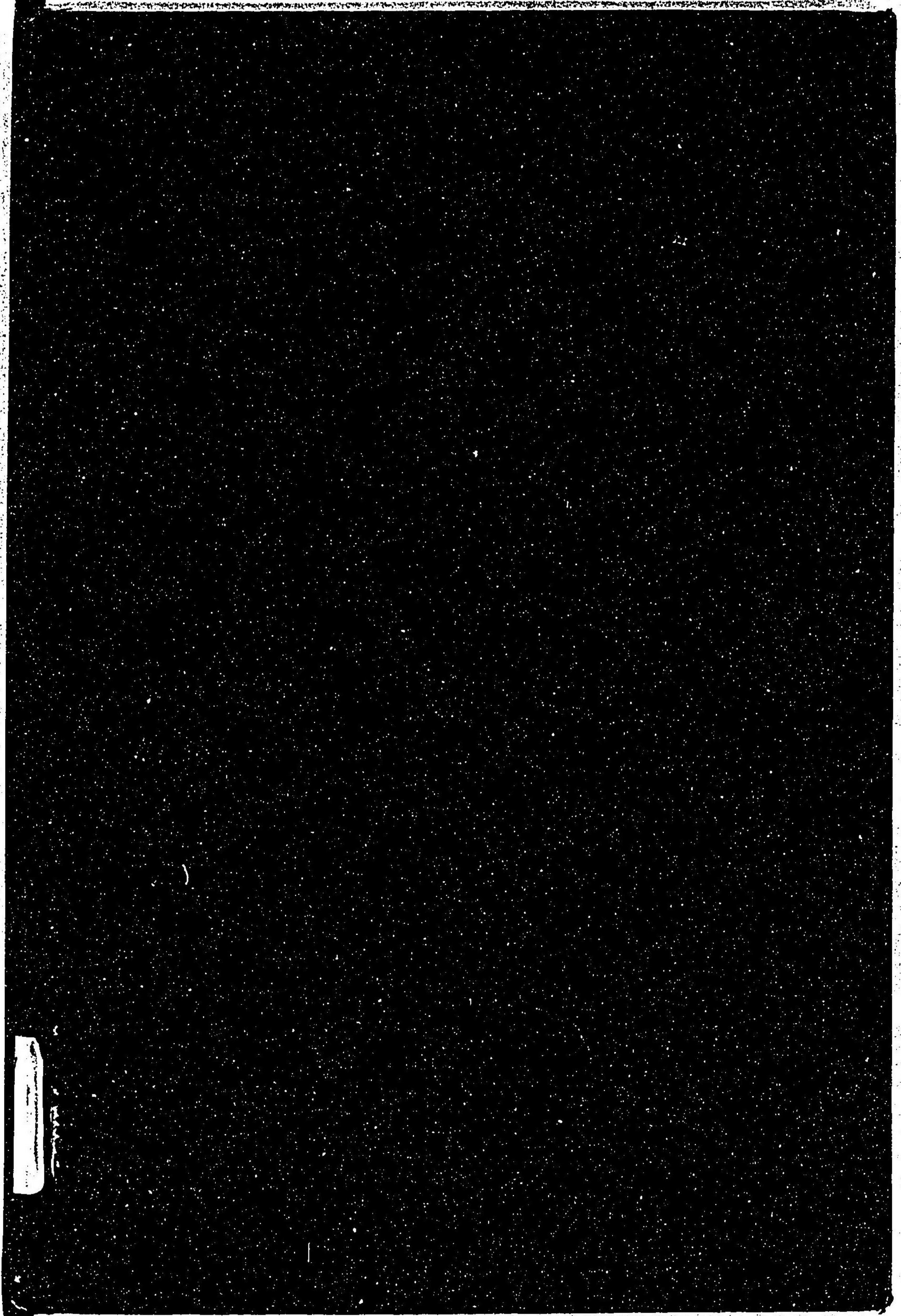
和歌山縣和歌山市北仲間町四十四番地

發行所
木國史談會編輯局



32

529
46



1

327
46

025730-000-4

327-46

和歌山と和歌浦

内村 義城(養浩居主人) / 著

M42

ADC-3264

